1. 平成25年度の取り組みの概要

1.1. 文部科学省の施策に関わる取り組み

1.1.1.「ミッションの再定義」

少子高齢化の進行や地域コミュニティの衰退，グローバル化によるボーダレス化，新興国の台頭による競争激化，といった急激な社会の変化や，東日本大震災という国難に直面するなかで，文部科学省は，大学が「知の拠点」として果たすべき役割が急速に拡大しているとの認識に基づき，平成 24 年 6 月に「大学改革実行プラン」を公表し，それに基づき，同年秋から「ミッションの再定義」を開始した。これは，「各国立大学と文部科学省が意見交換を行い，研究水準，教育成果，産学連携等の客観的データに基づき，各大学の強み・特色・社会的役割（ミッション）を整理」し，「今後，強みや特色を伸ばし，その社会的役割を一層果たしていくための機能強化を図っていくためのもの」である。

本学部・研究科は，国際文化学部・国際文化学研究科とともに「学際分野」と位置付けられ，先行する「医学」「工学」「教員養成」の各分野に続き，平成 25 年度夏より文部科学省との「意見交換」を開始し，平成 26 年 3 月末にその内容が最終確定し公表された。その間の動きは以下のとおりである。確定したミッションは，巻末に掲載する。

平成 25 年 7 月 16 日	学内意見交換（教員養成のあり方について）
平成 25 年 7 月 19 日	文科省説明会 → 学内説明会（7 月 23 日）
平成 25 年 8 月 7 日	「ミッション再定義（学際分野）説明資料」提出
平成 25 年 10 月 23 日	文部科学省との意見交換（文部科学省 16F 第 1 会議室）
平成 25 年 11 月 20 日	「『ミッションの再定義』にかかる追加資料」提出
平成 25 年 12 月 20 日	文部科学省第一次案提示 → 修正案提出（平成 26 年 1 月 16 日）
平成 26 年 2 月 21 日	文部科学省第二次案提示 → 修正案提出（平成 26 年 2 月 25 日）
平成 26 年 3 月 14 日	文部科学省第三次案提示 → 修正案提出（平成 26 年 3 月 17 日）
平成 26 年 3 月 26 日	文部科学省最終案提示 → 修正案提出（平成 26 年 3 月 27 日）

1.1.2.「国立大学機能強化改革」

文部科学省は，平成 25 年度に入り，「日本再興戦略」（6 月 14 日閣議決定），「教育振興基本計画」（同日閣議決定），「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）」（5 月 28 日教育再生実行会議）等の政府全体で進める改革動向にあわせ，今後の国立大学改革の方針や方策，実施方針をまとめ，「国立大学改革プラン」（11 月公表）として発表した。そこでは，第3期中期目標期間（平成 28 年度～）に各大学が持続的な「競争力」をもち高い付加価値を生み出すことができるよう，それに先立つ平成 25 年度～27 年度を「改革加速期間」と位置付け，個々の大学に対し「グローバル化」「イノベーション創出」等に向けた機能強化改革を徹底的に進めることを求めている。

神戸大学でも，平成 25 年度後半より本格的にこの改革に着手し，特に年を明けてから本学部・研究科を含め全学で「学部・研究科等を越えた資源再配置」「教育研究組織の再編成」に向けた議論が急速に進められつつある。

1.2. 神戸大学の施策に関わる取り組み

1.2.1.「アクションプラン 2013」

神戸大学は，第 122 回教育研究評議会（6 月 22 日）において，神戸大学ビジョンを実現するため，「学長裁量枠定員の新たな確保」「部局等戦略定員の設定による部局等の戦略実施体制の見える化」「メリハリある教員評価の実行」という3つの行動計画を盛り込んだ「アクションプラン 2013」を審議・承認した。

本研究科では，このプランに基づき，学長裁量枠定員の確保に関わり，「人間発達環境学研究科における学長裁量枠定員の拠出に係る取り扱いについて」（7 月教授会承認）を策定し，本研究科割当ての 4 名の拠出方法を決定した。同時に，「学長裁量枠定員【部局等発戦略分】プロジェクト」として，部局代表分として 2 件（「アーバン・

ウェルビーイング研究プロジェクト」「持続可能な開発と ESD に関する国際的研究拠点形成」）を提出したほか，他部局代表分 6 件に参加した（いずれも採択の可否は未定）。他方，教員評価については，「国立大学法人神戸大学教員活動評価実施規程」（第 126 回教育研究評議会（11 月 21 日）承認）に基づき，「神戸大学大学院人間発達環境学研究科教員活動評価実施要項」等（2 月教授会承認）を策定し，平成 26 年度より実施することとした。

1.2.2. 「ファクトブック」の作成・公表

神戸大学は，教育研究等の活動にかかる様々な取り組みやデータなどを広く社会に向けて発信するため，平成 24 年度より準備しつつあった「学部・大学院等ファクトブック」を各部局のホームページに掲載することを決定した（11 月部局長会議）。本研究科でも，「強み・特色編」「沿革・構成編」「データ・資料編」の三つのファクトブックを作成し，1 月末より公開している。

1.2.3. 「大学機関別認証評価」及び「大学機関別選択評価」に向けた準備

神戸大学は，第二期中期目標期間終了後の法人評価に先立ち，本学の教育及び研究の質の高さを明らかにし，第三期中期目標への足がかりを作りたいとの視点から，平成 26 年度に「大学機関別認証評価」及び「「大学機関別選択評価」を受審することとした。本年度は，そのための自己評価書等を作成準備した。本研究科では，認証評価につき自己評価委員会が，選択評価につき執行部と学術研究推進委員（福田博也准教授）が対応した。

1.3. 部局としての取り組み

1.3.1. 教育

1.3.1.1. 「紫陽会グローバル人材育成支援基金」の設立

本学部・研究科の学生による海外の大学等との交流活動を推進するため，同窓会による「グローバル人材育成支援基金」の設立を促進し運用を開始した。「紫陽会グローバル人材育成支援基金に関する内規」を策定し（9 月教授会），正課の授業ないしゼミの活動等の事業を通じて，所属学生を海外の大学，研究機関等への派遣，訪問する活動を直接の支援対象とした。本年度の実績は 4 件の事業に対し 495,000 円を支給した。詳細は以下のとおりである。

担当教員	授業科目等	渡航先（大学）	日程	参加学生数	支給額
太田和宏	国際社会環境論	フィリピン・サンベーダ大学	8 月 26 日～ 9 月 3 日 （8 日間）	5 名 （学部生 5 名）	225,000 円
加藤佳子	健康発達研究法 特別研究 1	インドネシア・ジャカルタ大学	7 月 3 日～ 7 月 6 日 （4 日間）	2 名 （学部生 2 名）	90,000 円
加藤佳子	健康発達研究法	オーストリア・グラーツ大学	9 月 4 日～ 10 月 5 日 （32 日間）	3 名 （学部生 2 名，院生 1 名）	90,000 円
鳥居深雪	卒業研究 特別研究1	イギリス・特別支援学校	3 月 15 日～ 3 月 21 日 （7 日間）	4 名 （学部生 1 名，院生 1 名，研究生 2 名）	90,000 円

1.3.1.2. 博士論文提出に係る手続きの厳格化

文部科学省「国立大学法人神戸大学の平成 24 年度に係る業務の実績に関する評価結果」を受け，部局の対応として，平成 25 年 3 月教授会の審議結果に基づき課程博士論文の提出に係る手続きを大幅に見直し，厳格化を図った（2 月教授会）。

1.3.2. 研究

1.3.2.1. 共同研究シーズの創出支援

本研究科が独自に運用する「研究推進支援経費」「プロジェクト経費」「シンポジウム経費」をとおして，研究科の理念と目標に沿って複数の教員が実施する萌芽的な分野横断型学際研究を支援した。

本年度は，「研究推進支援経費」2 件（総額 100 万円），「プロジェクト経費」5 件（総額 305 万円），「シンポジウム経費」2 件（総額 49 万円）を採択し，共同研究シーズの創出を促進した。なお，これらの共同研究のうち，2 件が平成 25 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）1 件，（C）1 件）に採択されている。

1.3.2.2. 組織的な研究推進体制の整備

本研究科で進められる研究を組織的に活性化させていくため，研究推進委員会に係る規程を見直し，研究科長，副研究科長，専攻長，学科長から構成され研究に関してマネジメント機能を強力に発揮できる委員会とした（2 月教授会）。

1.3.3. 外部との連携

1.3.3.1. 三木市との連携

6 月 27 日，神戸大学は三木市との間で連携協定を締結し，地域の課題に迅速かつ適切に対応し，活力ある個性豊かな地域社会の形成，発展をめざすとともに，大学の教育，研究に寄与することとした。本研究科もこの事業に参加し，それ以前より進めている三木市との連携をより強化し，渡部昭男教授をはじめ数多くの教員の協力により「確かな学力向上プロジェクト（教育の充実）」に係る取り組みを積極的に進めている。

1.3.3.2. 「人間・発達・環境」意見交換会

他大学との連携をとおして「人間発達」に関わる認識の共有をめざし，12 月 11 日，愛知県立大学大学院人間発達学研究科の坪井由実研究科長と望月彰教授を招き，「『人間・発達・環境』に関する意見交換会」を開催した。

本研究科渡部昭男教授より，「人間発達」に係る理論と「人間・発達・環境」に係る全国関連研究科の概要についてご説明をいただいたあと，坪井研究科長から，愛知県立大学の人間発達学研究科のキーコンセプトにつき詳細なご報告をいただいた。その後，参加者と共に，「人間発達」学に係る教育研究体制のあり方につき検討を行いながら，将来に向けた両研究科の連携可能性を探る議論を行った。

1.3.4 組織運営

1.3.4.1. 組織運営体制の整備

拡大し複雑化する大学運営に迅速かつ柔軟に対応しながら，同時に教員の多忙化を少しでも軽減することを目的に，本学部・研究科に置かれた各種委員会に係る諸規定を見直した。本年度は，3 委員会（将来計画委員会，環境管理委員会，機種選定委員会）を廃止するともに，自己評価委員会，研究推進委員会，情報メディア委員会，キャリアサポートセンター等に係る規程を一部改正することで，組織の整備を行った（2 月及び 3 月教授会）。詳細は「2.1 学部・大学院運営組織」を参照。

1.3.4.2. 教員の上位昇給者選考に係る手続きの見直し

神戸大学「アクションプラン 2013」に含まれた「メリハリある教員評価の実行」を実施するにあたり，「特別昇給の選考基準に関する従来からの申合せ」（平成 17 年 2 月 9 日教授会承認）を刷新し，あわせて「教員上位昇給候補者審査委員会内規」を制定した（1 月教授会）。

（神戸大学大学院人間発達環境学研究科長・発達科学部長　岡田章宏）

2. 学部・大学院運営

2.1. 学部・大学院運営組織

神戸大学大学院人間発達環境学研究科及び神戸大学発達科学部は，以下の組織により運営されている。既述のとおり，平成 26 年 2 月 21 日及び 3 月 19 日開催の教授会において，平成 26 年度の運営に向けてこれら運営組織の見直しを行った。ここには，改善点も簡単に付記しておく。

＜教授会＞

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授会，神戸大学発達科学部教授会，神戸大学大学院総合人間科学研究科教授会

以下に委員会等の組織を列記する。その際，大学院に関係する組織については，その前に付される研究科名「神戸大学大学院人間発達環境学研究科」を省略し，学部に関係する組織については，「神戸大学」を省略し「発達科学部」を付した。

＜管理運営＞

学部・大学院運営委員会，人事委員会，予算委員会，中期計画推進委員会，自己評価委員会，将来計画委員会，学舎検討委員会，環境管理委員会，交流ルーム運営委員会，機種選定委員会，安全衛生委員会，ハラスメント防止委員会，学科・専攻運営会議

〔改善点〕

- 上記委員会のうち，将来計画委員会，環境管理委員会，機種選定委員会を廃止し，後二者の所掌事務を，安全衛生委員会及び学舎検討委員会，予算委員会に移管した。
- 自己評価委員会につき，従来の規程におかれた「常任委員会」を廃止し，本委員会の構成を「研究科長」「副研究科長」「教授会から選出された教員　各講座（連携講座を除く。）から各 1 名」にするとともに，所掌事務を簡素化した。また，委員長は「教授会から選出された教員」から互選することとした。

＜研究＞

研究推進委員会，研究倫理審査委員会

〔改善点〕

- 研究推進委員会につき，研究の組織的な活性化を図るため，本委員会の構成を「研究科長」「副研究科長」「専攻長」「学科長」にするとともに，所掌事務を見直し，研究に係るマネジメント機能を発揮できるようにした。それにともない，「研究紀要規程」に定められた研究紀要編集委員会を，委員長及び講座等から選出された教員 4 名で構成されるものとして再編成した。

＜教務・学生＞

教務委員会，学生委員会，博物館学芸員資格専門委員会，インターンシップ委員会，発達科学部教員養成機関審査委員会，「発達科学への招待」運営委員会

＜入試＞

入学試験委員会，発達科学部社会人入試専門委員会，発達科学部編入学試験専門委員会，発達科学部 AO 入試実施委員会，発達科学部人間表現学科実技検査入試検討委員会，学生委員会（入学者の募集及び選考に関わる事務）

＜国際交流＞

国際交流委員会，学術交流専門部会，留学生専門部会，学術 WEEKS ワーキンググループ

＜広報＞

情報メディア委員会，オープンキャンパス・ワーキンググループ，学部等案内作成ワーキンググループ

〔改善点〕

- 情報メディア委員会につき，委員長を「教授会の議を経て研究科長が委嘱する」こととした。

＜附属施設等＞

図書委員会，実習観察園運営委員会，キャリアサポートセンター運営委員会，発達支援インスティテュート運営委員会，心理教育相談室運営委員会，ヒューマン・コミュニティ創成研究センター運営委員会，のびやかスペースあーち運営委員会，社会貢献室，サイエンスショップ運営委員会

〔改善点〕

- キャリアサポートセンター運営委員会につき，その構成を「センター長」「副センター長」のほか，「センター担当教員」「教務委員会委員長」「学生委員会委員長」「情報メディア委員会委員長」等とした。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長　岡田章宏）

2.2. 将来計画

2.2.1. 拡大将来計画委員会

平成 25 年 4 月教授会において将来計画委員 6 名を改選し，これに研究科長 1 名，副研究科長 2 名，専攻長 2 名，及び学科長 3 名を加えた拡大将来計画委員会が，昨年度に引き続き設置された（委員長：岡田章宏研究科長，副委員長：岡田修一副研究科長，委員：青木茂樹副研究科長，鳥居深雪教授，津田英二准教授，前田正登教授，梅宮弘光教授，伊藤真之教授，太田和宏准教授，森岡正芳教授，平山洋介教授，稲垣成哲教授，平川和文教授，小髙直樹教授）

今年度，委員会は 9 回開催され，平成 25 年 11 月 26 日に策定された「国立大学改革プラン」を念頭に，研究科の現状や今後の研究科の課題等について議論を行った。

以下の表は，委員会開催日と委員会での報告事項および検討課題をまとめたものである。

回	開催日	報告事項および検討課題
1	平成 25 年 4 月 26 日	1）国立大学改革，2）学部・研究科に向けた動き（今年度前半）－ ①ミッション再定義 ②大学機関別認証評価・選択評価，3）学部・研究科における教育研究の発展に向けた課題（案）－ ①教育の質保障 ②グローバル化 ③人間発達専攻における計画に基づいた実施 ④人間環境学専攻における実質的な「改革」の計画と実施 ⑤発達支援インスティテュートの課題等
2	平成 25 年 5 月 31 日	1）大学をめぐる動向（全国的な動向，神戸大学の動向），2）人間発達専攻における「改革」（森岡正芳先生），3）人間環境学専攻における「改革」（平山洋介先生）
3	平成 25 年 6 月 28 日	1）　学部・研究科の状況と課題 － ①グローバル化 ②対話型少人数教育，アクティブ・ラーニング ③「人間発達総合研究Ⅰ・Ⅱ」「研究道場」，人間環境学専攻の定員充足 ④科研の申請・採択，組織的な共同研究の重要性
4	平成 25 年 7 月 26 日	1）研究科のミッションの再定義に係る進捗状況，2）学部・研究科の現状と課題 － ①基礎研究 ②学部と大学院の教育体制
5	平成 25 年 8 月 30 日	1）研究科のミッションの再定義に係る進捗状況，2）学部・研究科の現状と課題 － ①研究大学における研究科としての対応
6	平成 25 年 10 月 25 日	1）ミッションの再定義に関する文部科学省との意見交換，2）神戸大学における学士課程教育改革，3）「サイエンスショップの現状と将来展望」（伊藤真之先生）
7	平成 25 年 11 月 22 日	1）ミッションの再定義，2）研究科の中期計画に対する本部ヒアリング，3）神戸大学教育改革の現状，4）「HC センターの現状と将来展望」（津田英二先生），5）発達支援インスティテュートの機能強化・拡充（研究面の強化），ESD に関わる課題
8	平成 26 年 1 月 24 日	1）ミッションの再定義，2）概算要求，3）国立大学改革，4）発達科学研究とは，5）今後の将来計画委員会のあり方等
9	平成 26 年 3 月 7 日	1）ミッションの再定義，2）今年度の総括，3）発達支援インスティテュートの機能強化・拡充，4）次年度の将来計画委員会

以上，今年度の拡大将来計画委員会は主にミッションの再定義と神戸大学における機能強化の進捗状況を見据えながら議論が行われた。これらの議論を通して，発達科学部および人間発達環境学研究科の強みや特色を伸ばし，その社会的役割を果たしていくためには，今後一層の組織的な教育・研究の推進と発達支援インスティテュートの機能強化を図ることが確認された。

なお，本委員会は，平成 22 年 4 月 1 日に研究科改組に係る具体的な検討を行うために設置されたが，その目的は概ね達成されたことを踏まえ，平成 26 年 3 月をもって解散した。

（将来計画委員会副委員長　岡田修一）

2.3. 管理運営

2.3.1. 人事委員会

人事委員会は毎月定例の会議を開催し（計 11 回），教員の採用，昇任，サバティカル制度適用教員の選考等に関し，人間発達環境学研究科教授会に発議する原案を検討・作成した。

本年度の実績は以下のとおり。

- 教員の採用：7 件（准教授：4 件，講師：3 件）
- 教員の昇任：5 件（教授：4 件，准教授：1 件）
- サバティカル制度適用教員：2 名（平成 26 年度前期：1 名（関典子講師），後期：1 名（蛯名邦禎教授））

なお，新規に採用した教員 7 名のうち 3 名は女性であり（女性教員採用比率 43%），昇任した教員 5 名のうち 1 名が女性であった（女性教員昇任率 20%）。その結果，神戸大学「女性教員採用比率を向上させるための達成目標と措置」が策定された平成 21 年度以降の女性教員採用率は 43%（男性 13 名，女性 10 名）となり，現在の目標値とされる採用比率 30%を十分に達成している。

また，本年度は「女性研究者養成システム改革加速」事業に基づく 1 名の採用人事の方針を決定した（12 月委員会・教授会）。採用は来年度になる。

（人事委員会委員長　岡田章宏）

2.3.2. 学部・大学院運営委員会

人間発達環境学研究科の改組に基づき本年度より 2 専攻体制になったことを踏まえ，本委員会は，研究科長，副研究科長，専攻長（2 名，ただし 1 名は学科長を兼ねる），学科長（3 名）の 8 名体制で運営した。

本委員会は，研究科等の管理を円滑に行うために組織及び運営に関し包括的な事項を扱うため，定例会議の他に適宜臨時の会議を開催し，状況に応じて柔軟に対応してきた。検討事項は以下のとおり。

第 1 回（4 月 12 日）	1. 本学部・研究科に関わる 2013 年度の動向（当面する課題）について 2. 表現学科のコース制変更について 3. 博士課程後期課程予備審査委員会委員について 4. 若手教員長期海外派遣制度の実施について 5.「プロジェクト研究」等の公募について　等
第 2 回（5 月 10 日）	1.「アクションプラン 2013」について 2.「ミッションの再定義」について 3. 学位の評価基準案について 4. 予備審査委員会報告の審査基準について　等
第 3 回（6 月 7 日）	1.「ミッションの再定義」について 2. 入試制度の改革（社会人特別選抜／3 年次編入／AO 等）について 3. 学位の評価基準案について　等
第 4 回（7 月 5 日）	1.「学長裁量枠定員の新たな確保」に係る対応方針について 2. 大学機関別認証評価及び選択評価について 3. 財務部による平成 24 年度決算分析について

	4.「大学の世界展開力強化事業」への参画について 5.「紫陽会グローバル人材育成支援基金(仮称)」について　等
臨時(7 月 17 日)	・「人間発達環境学研究科における学長裁量枠定員の拠出に係る取扱いについて(案)」について
臨時(8 月 6 日)	1.「学長裁量枠定員の新たな確保」に係る対応方針について 2.「ミッションの再定義」について　等
第 5 回(9 月 6 日)	1.「学長裁量枠定員の新たな確保」に係る対応方針について 2. 科研の戦略的獲得について 3.「メリハリある教員評価の実行」について　等
第 6 回(10 月 11 日)	1.「ミッションの再定義」について 2.「部局等発戦略分」の獲得について 3.「メリハリある教員評価の実行」について　等
第 7 回(11 月 1 日)	1.「ミッションの再定義」について 2. 神戸大学の教育改革について　等
第 8 回(12 月 6 日)	1. 教員活動評価制度の導入について 2.「神戸大学機能強化改革(案)」について 3.「ミッションの再定義」について 4. 平成 27 年度概算要求について 5. 博士論文提出手続きについて　等
臨時(12 月 13 日)	・博士論文審査委員会の委員の構成について
第 9 回(1 月 10 日)	1. 教員活動評価制度の導入について 2. 博士論文提出手続きについて 3.「ミッションの再定義」について 4.「神戸大学機能強化改革(案)」について　等
第 10 回(1 月 31 日)	1. 教員活動評価制度の導入について 2. 来年度の体制(委員会の改廃)について 3.「神戸大学機能強化改革(案)」について　等
臨時(2 月 19 日)	・「神戸大学機能強化改革(案)」について
第 11 回(2 月 28 日)	1.「神戸大学機能強化改革(案)」について 2. 教員活動評価制度の導入について 3. 博士論文提出手続きについて　等
臨時(3 月 13 日)	・「神戸大学機能強化改革(案)」について
臨時(3 月 17 日)	・「神戸大学機能強化改革(案)」について

(学部・大学院運営委員会委員長　岡田章宏)

2.3.3. 中期計画推進委員会

本年度は，研究科長(委員長・岡田章宏)，副研究科長(岡田修一，青木茂樹)，研究推進委員会委員長(近江戸伸子)，教務委員会委員長(渡部昭男)，学生委員会委員長(梅宮光弘)，国際交流委員会委員長(青木茂樹)，入学試験委員会委員長(青木茂樹)，キャリアサポートセンター長(高橋譲嗣)，情報メディア委員会副委員長(宮田任寿)，自己評価委員会副委員長(前田正登)，事務長(仲田保夫)の構成員に加え，事務長補佐(薦田長秀)・総務係長(専門員・岩見浩二)が出席し，月一回の定例会議を開催した(計 11 回)。

(1)「中期計画の遂行，見直し」を所掌する本委員会では，毎回，研究科長から部局年次計画に関わる全体的な状況が説明され，その後各委員会等から年次計画の進捗状況が報告される。本年度の主な検討事項は以下のとおり。

1.「今後の検討事項等について」
- 平成 26 年度に受審する大学機関別認証評価及び選択評価について
- 「神戸大学ビジョンの実現に向けたアクションプラン 2013」について
- 研究大学強化促進事業による神戸大学の研究大学院大学化について
- 「ミッションの再定義」について
- 世界展開力強化事業について　　等

2. 委員会の年次計画に係る特記事項

● 研究推進委員会

主として研究紀要の編集を行った。研究推進委員会の所掌事務の見直しを行い，本委員会の構成を変更するとともに，研究紀要編集委員会を再編整備した（「2.1. 学部・大学院運営組織」参照）。

● 教務委員会

全学教務委員会の議論を踏まえ，成績評価基準，ゆるやかなナンバリング，CAP 制度の規制，博士課程の学位授与基準，学位論文評価基準等につき本学部・研究科の方向を検討し実施した。また，「教育実習演習（幼小）」を企画・実施した。

● 学生委員会

本年度も大学院生に対する日本学術振興会特別研究員に関するセミナーを開催し申請を促した。また，本部局におけるラーニングコモンズの実現可能性を検討し情報を収集した。修学の基盤となる倫理体制確立と修学風土増進のために，学生生活ガイダンスの内容を見直した。

● 国際交流委員会

西オーストラリア大学（オーストラリア）及び浙江大学（中国）との間に新たな学術交流協定を締結し，カロリンスカ研究所（スウェーデン）及びオレゴン州立大学（アメリカ）等との協定締結に向けた検討を行った。

● 入学試験委員会

博士課程前期課程の入試において，英語科目の外部試験の利用を検討した。

● キャリアサポートセンター

民間企業志望者，教職志望者，公務員志望者のそれぞれに実践的なセミナーを多彩に開催し，あわせて，キャリアカウンセラーによる個別のカウンセリングを恒常的に実施した。また，キャリア教育に関する FD を実施し，学部構成員でキャリア支援の現状を共有した。

● 情報メディア委員会

学部・研究科のウェブサイトをリニューアルし，アクセサビリティも向上させた。また，オープンキャンパスを 2 日間実施し（約 2500 人参加），また大学院志願者向けオープンらぼを本格的に実施した。

● 自己評価委員会

学部学生及び大学院生の全員を対象に，学習成果アンケートを実施し，教育実施体制を点検した。また，本学の教育成果を確認するため，就職先インタビューを行った。ピアレビュー対象科目につき債券投資，本年度の対象科目についてピアレビューを実施した。

(2) 本年度より部局年次計画の進捗状況を本部に報告する手続きが緩和され，年 2 回の「第二期中期目標・中計画管理表」の提出を求められることはなくなったが，本研究科では年次計画の着実な実施を確保するため，部局独自の取り組みとして，各委員会等に同管理表の作成をお願いし，本委員会において相互にチェックした。

（中期計画推進委員会委員長　岡田章宏）

2.3.4. 自己評価委員会

本年度は，12 回の委員会を開催し，下記の諸課題に取り組んだ。

(1) 平成 26 年度大学機関別認証評価のための自己点検・評価

平成 26 年度に神戸大学が受ける大学機関別認証評価に向け，発達科学部・人間発達環境学研究科の部局評価シートを作成するとともに，各基準に基づいて本学部・研究科の評価・点検を行った（9 月）。

(2) 学習成果アンケートの実施

神戸大学が受ける大学機関別認証評価に向けた資料作成のために，教育の目的や養成しようとする人材像に照らし，学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について，学習の達成度や満足度を学生に評価してもらった（7月）。その結果，総合的，全体的に，学部・研究科ともに，学習目標に対する達成度およびそれに対する満足度が高いことが確認され，一定の学習成果を得ることができていると判断した。

(3) 就職先機関インタビューの実施

大学教育推進機構の中期目標に向けた取り組みで本学の教育成果を確認するために，発達科学部卒業生や人間発達環境学研究科修了生の就職先機関として，株式会社アップ及び株式会社西松屋チェーンにインタビュー調査を行った（7～8 月）。その結果，本学卒業生・修了生には，グループ作りがうまく職場でのリーダーシップを取ることができる人が多い等の評価もあり，それぞれの就職機関で率先的に活動していることが窺えた。

(4) ピアレビュー

学部・研究科・学科共通科目を中心に対象科目を選定し，前期 4 科目，後期 7 科目の授業科目において，ピアレビューを実施した（7 月，12～1 月）。また，次年度以降の対象授業科目の選定について検討した。

(5) Voice Box

Voice Box に 3 件の投稿があり，これらに対して Web にて回答するとともに，それらの点を含めた学生の教育環境について点検し改善を図った。

(6) ファカルティ・ディベロプメント

9 回のファカルティ・ディベロプメントを研究科教授会開催にあわせて実施し，教育の改善に役立てた。（9 回の内容詳細は，『資料集』を参照）

(7) 「教育の質向上のための評価指標」による自己点検・評価

「「教育の質向上のための評価指標」による自己点検・評価票」に基づいて，本学部・研究科における教育について点検・評価を行った（2 月）。

(8) 平成 25 年度年次報告書の作成

平成 25 年度の本学部・研究科における教育・研究活動を集約し，年次報告書としてまとめた。

（自己評価委員会副委員長　前田正登）

2.3.5. 安全衛生委員会

(1) 平成 25 年委員

坂本美紀准教授，髙見和至准教授（委員長），山本道子講師（9 月 30 日退職），塚脇淳教授（10 月 1 日～）大串健一准教授，岩佐卓也准教授，仲田保夫事務長，岩見浩二専門員（総務係長），小倉生栄附属図書館人間科学情報サービス係長

(2) 委員会の開催

毎月 1 回第 4 金曜日 13 時 30 分から開催した。

(3) 定期点検

委員による学舎内共用部点検を，本年度内に 8 回実施した。

(4) 委員会の概要

①点検事項報告とその対策の検討
②その他改善を要する件の検討
③全学安全衛生委員会の報告
④その他

(5) 本年度の実施事項

①平成 25 年 6～9 月に，学舎内の共用スペースに設置され，一部放置されていた物品について，所有者の特定を行い，所有者が不明な物品については処分を行った。
②平成 25 年度第 7 回安全衛生委員会（六甲台地区事業場：10 月 25 日）にて，衛生管理者等の巡視結果についての報告を行った。（対象施設：人間発達環境学研究科　A棟 1・2 階，人間科学図書館）

③安全管理マニュアルの冊子および電子ファイルでの配布を行った。
④自衛消防訓練（平成 26 年 1 月 10 日）

(6) 課題

①共用部分に陳列されている物品並びに不用品について，緊急時非難の障害にならないように移管または処分する必要がある。
②安全管理マニュアルの冊子と電子ファイルの効果的な使用方法を検討し，学生への周知徹底を図る。
③本研究科の学舎は順次改築がなされている状況にあるので，改築が終了した棟の安全衛生設備の付置を徹底する必要がある。

（安全衛生委員会委員長　髙見和至）

2.4. 予算

2.4.1.予算に関する特記事項

(1) 本年度よりサイエンスショップの人件費については管理的経費として扱うことに変更した。

(2) 予算追加配分

本年度は科研費等間接経費の増加等を財源として予算追加配分が可能となった。
①C,D 棟改修に伴う移転費の補填を行った。
②倉庫（薬品庫）の屋根の一部が損壊したため補修工事を行った。
③教員研究費の追加配分については，昨年度に引き続き外部資金獲得者に対しインセンティブ配分を行った。

(3) 平成 26 年度当初予算配分

平成 26 年度当初予算配分案作成にあたり次の3点を考慮した。
①教員研究費がここ数年激減していることを鑑み，管理運営経費の執行状況等を考慮し，教員研究費を平成 25 年度と同額を維持できるようにする。
②E 棟改修工事に伴う移転等に係る経費の不足が見込まれるため，不足分を当初配分にて予算措置する。
③シンポジウム経費，プロジェクト研究，学術 Weeks 経費は平成 25 年度に減額を行ったが，平成 26 年度は従来どおりの配分額とする。

2.4.2.予算関係の審議等の状況

(1) 平成 24 年度決算

平成 25 年 5 月 14 日の予算委員会で審議し，5 月 17 日の教授会において承認された。

(2) 平成 25 年度当初予算再配分

平成 25 年 3 月 19 日の教授会に置いて承認された平成 25 年度当初予算について平成 25 年 5 月 1 日現在での各専攻，学科，コース等の学生実員数に基づいて学生当経費の再配分の修正を行い，5 月 14 日の予算委員会にて審議し，5 月 17 日の教授会において承認された。

(3) 平成 25 年度予算追加配分

予算追加配分について，平成 25 年 12 月 13 日の予算委員会にて審議し，12 月 20 日の教授会において承認された。

(4) 平成 26 年度当初予算配分

平成 26 年度当初予算配分案は平成 26 年 3 月 11 日の予算委員会にて審議し，3 月 11 日の教授会において承認された。なお，学生当経費は平成 26 年 5 月 1 日の学生実員数に基づいて修正を加え 5 月開催の教授会にて審議することとした。

（予算委員会委員長　高橋　真）

2.4.3. 外部資金獲得状況（教員及び学生）

学部資金の獲得状況については，その詳細を資料編（特に「11-3-1～4」参照）に掲載しているため，ここでは特徴的な点を指摘するにとどめる。

平成 25 年度科学研究費補助金の獲得は，60 件（新規：16 件），総額 1 億 1,177 万円であった。件数及び総額については，この間順調に増えてきており，今年度も昨年度の水準を上回っている。内訳は，基盤研究(A)：3 件，基盤研究(B)：10 件，基盤研究(C)：29 件，挑戦的萌芽研究：14 件，若手研究(B)：4 件，である。

また，日本学術振興会特別研究員については，DC：10 名（新規：7 名），PD1 名（新規：0 名）が本年度採用されている。DC の新規採用者が 7 名という数字は特筆すべきであり，学生委員会を中心に申請のための説明会を継続的に開催した効果が現れたものと考えられる（「5.1.2 学振特別研究員申請支援」参照）。

受託研究については，10 件，総額 5,652 万円となっており，総額においてかつてない高い金額となっている。特に若手の活躍が目立っている。学内プロジェクト研究費については，地域連携推進室からの補助金が 2 種類 5 件，震災復興支援・災害科学研究推進室からの補助金が 3 件，その他が 2 件で，総額 1,120 万円となっている。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長　岡田章宏）

2.5. 広報及び情報公開

2.5.1. パンフレット，ウェブサイト等

(1) 日本語版ウェブサイトの改装とウェブ上の広報活動

学部・研究科ウェブサイト（http://www.h.kobe-u.ac.jp）は 2011 年度に導入された高機能 CMS（コンテンツ管理システム）によって運用されており，すべての情報を一元的に管理・公開し，アクセサビリティ，作業の効率性，安全性の向上を図っている。2013 年度においては，ウェブサイトのデザイン面の大幅な改良を行った。また，研究科においては 4 専攻（心身発達専攻，教育・学習専攻，人間行動専攻，人間表現専攻）の改組，学部においては人間表現学科が 1 コース化され，これらに伴う学部・研究科ウェブサイトの改装を行った。研究科の学生・教員の学術交流などの国際的事業の取り組みに関する情報，「外部評価報告書」，「神戸大学発達科学部・神戸大学大学院人間発達環境学研究科ファクトブック」などの掲載も行った。その他，研究科が主催する学術 Weeks の一環として開催されたシンポジウムやキャリアサポートセンターが主催する様々なセミナーの情報を多数公開し，学科や専攻を超えた学術交流を支援するため，各コースなどが主催する卒業論文・修士論文発表会プログラムも公開した。

(2) 2015 年度学部・研究科案内（パンフレット）の作成

2015 年度学部・研究科案内（パンフレット）は約 130 ページで構成され，学部・研究科や各学科・専攻の特色をはじめ，各コースでの詳細な教育研究情報などを掲載した。教員，学生，OB・OG 総勢約 70 名からのメッセージを掲載するなど，学部・研究科の受験生に向けの情報を充実させた。学部・研究科案内の編集作業は，各専攻から選抜された合計 5 名のメンバーによるワーキンググループ（高橋真（委員長），林創，川地亜弥子，増本康平，谷正人）で行われた。

（情報メディア委員会副委員長　宮田任寿）

2.5.2. 発達科学部 オープンキャンパス

(1) 概要

実施日時：2013 年 8 月 7 日（水）13 時 00 分～16 時 30 分
9 日（木）13 時 00 分～14 時 30 分

実施場所：発達科学部学舎（B202 教室，ほか）

参加者数：参加者数は，発達科学部の 1 日あたりの参加募集定員 1200 人に対し次のとおりであった。

1 日目　生徒：948 人　付添：261 人　計：1209 人
2 日目　生徒：946 人　付添：223 人　計：1169 人
2 日間総計　：2519 人

対象者：主として兵庫県・大阪府・京都府・奈良県・滋賀県・和歌山県下高校生を対象とする。付き添い者については，控室が充分に確保できないため，極力控えてもらうことを要請した。

実施内容：各コース説明，模擬授業，模擬セミナー，作品展示，学科展示，サイエンスショップ展示　キャリアサポートセンター展示，ほか

施設見学：人間科学図書館（入館ゲート内は不可），発達ホール，キャリアサポートセンター，カフェ・アゴラ（飲

食可能）

(2) 実施組織の構成

実施組織は教員組織として「オープンキャンパス・ワーキンググループ」「オープンキャンパス・コース実施委員」，担当事務係として教務学生係，学生組織として「オープンキャンパス学生委員会」からなる。これらとは別に，当日の運営に際して，コースごとに補助学生を若干名雇い上げている。

a) 「オープンキャンパス・ワーキンググループ」は教務学生係と連携してオープンキャンパスの実施計画（「実施計画書」）及び緊急時マニュアルを作成し，全体的運営に関する業務を所掌する。
主査：高田義弘　委員：山本道子，相澤直樹，岩佐卓也

b) 「オープンキャンパス・コース実施委員」は，コース企画の運営に関する業務を所掌する。
坂本美紀（心理発達論） 北野幸子（子ども発達論） 山下晃一（学校教育論） 吉永潤（教育科学論） 伊藤篤（発達支援論） 中村晴信（健康発達論） 近藤徳彦（行動発達論） 山口泰雄（身体行動論） 田畑暁生・田村文生（人間表現論） 寺門靖高（自然環境論） 佐藤真行（生活環境論） 橋本直人（社会環境論） 桑村雅隆（数理情報環境論）

c) 「オープンキャンパス学生委員会」（各コース1名選出）は，「オープンキャンパス・ワーキンググループ」の監督のもと，当日までの準備作業及び当日のオープンキャンパス・ワーキンググループ業務を補佐する。
学部学生：13 名　大学院学生：3 名

d) 担当事務係：教務学生係（村井利子）

e) 協力：情報メディア委員会（研究科HP広報ページの設置） 山口泰雄研究室（アンケート監修及び集計）自然環境論コース（非常時の氷手配対応）

(3) 準備日程

4 月中旬：オープンキャンパス・コース実施委員，オープンキャンパス学生委員の選出，各コース実施計画の照会

5 月中旬：第 1 回拡大オープンキャンパス・ワーキンググループ委員会開催（学生企画の検討，ほか）

6 月初旬：各コース実施計画のとりまとめ。企画内容の本部への通知

7 月初旬：第 2 回拡大オープンキャンパス・ワーキンググループ委員会開催（補助学生雇い上げ手続き，危機管理・安全対策の周知）

8 月 6 日：直前準備業務（配布資料等の準備　掲示物掲出，ほか）

(4) 会場構成及び要員配置

会場の基本動線は，正門からB棟ピロティに誘導し，同所に設置した受け付けを経由してB棟1階ホールに入り，そこから各会場に分散するものとした。

B棟ピロティ：受け付け（参加票シール貼付，資料配付，飲料〈500ml ペットボトル1本〉配布）教務学生係，オープンキャンパス・ワーキンググループ，オープンキャンパス学生委員会

B棟1階ホール：ロビー空間（会場案内図の掲出　休憩用椅子・テーブル，アンケート回収）オープンキャンパス・ワーキンググループ委員（常駐），オープンキャンパス学生委員

コース等別会場

B202，B206：心理発達論　B212（子ども発達論） B210（教育科学論） B108（学校教育論） F256（健康発達論，行動発達論，身体行動論） F254，F260（人間行動学科合同展示） F264（人間表現学科） F252（人間表現学科質問コーナー） B104（自然環境論） B208（数理情報環境論） B103（生活環境論） B106（社会環境論） A120（発達支援論） E251（サイエンスショップ） B201（キャリアサポートセンター）

控室：Dルーム　学生食堂　カフェ・アゴラ　F251

オープンキャンパス実施本部：非常勤講師控室及び教務学生係事務室

(5) 配布資料

次の資料を特製手提げバッグに入れ，受け付けにおいて飲料とともに配布した。

「神戸大学発達科学部オープンキャンパス 2013 プログラム概要」「同　会場案内図」（避難経路図）

「2013 神戸大学発達科学部オープンキャンパス」（オープンキャンパス学生委員会作成の 12 ページ立てパンフレット）。

「2013 神戸大学発達科学部オープンキャンパス」はオープンキャンパス学生委員会の自主企画として作成されたもので学科別に学生生活や授業内容を紹介したものである。掲載写真中に写っている人物については全員に「肖像権，著作権，個人情報に関する同意書[在学生用]」により同意を取った。印刷原稿が完成した段階で，オープンキャンパス・ワーキンググループ及び研究科長による校閲を経て印刷発注された。

(6) 危機管理・安全対策

緊急（病人等の発生，不審者発見，事故・事件発生）時の対応について「緊急時マニュアル（非常電話配置マップを含む）」「キャンパス内AED配置マップ」「保健管理センターだより（心臓突然死！防ごう基礎疾患の早期発見で）」に基づいて確認した。

AEDの使用についてはオープンキャンパス・ワーキンググループ主査が事前に保健管理センター医師のレクチャーを受け，推薦のあった映像資料（AEDメーカーHP掲載の動画）を第 2 回拡大オープンキャンパス・ワーキンググループ委員会で視聴した。

開催中は，各コース企画の開始時刻を中心に，オープンキャンパス・ワーキンググループ及びオープンキャンパス学生委員が教室会場の定員超過に留意しながら，巡回コースを定めて巡回した。

看護が必要な事態が生じた場合は保健管理センターとの連携で行うとし，救護室は用意したが看護師の配置はしていない。

神戸市交通局に対してオープンキャンパス実施を伝え，増便等の対応を求めた。

(7) アンケートの実施と参加者調査結果

参加者の属性とオープンキャンパスに対する量的評価及び質的評価を明らかにするためにアンケートを実施した。配布数は 1958 票，回収数は両日で合計 1398 件，回収率は 71.4%であった。

回収データは単純集計及びクロス集計を行い，自由記述に関しては参加コースごとに，満足群・不満群。要望群に分類・整理した。

集計結果は「オープンキャンパス参加者調査 2013」として取りまとめた。

(8) 参加者の評価概要

両日を通し，事故等なく無事に終了した。参加者の反応の詳細は前述の「オープンキャンパス参加者調査 2013」に譲るが，満足群に分類される自由記述が他に比して圧倒的に多く，概ね好評を得たと判断できる。

（発達科学部オープンキャンパス WG 委員長　高田義弘）

2.5.3. 人間発達環境学研究科 オープン・らぼ

(1) 概要

実施日時：2013 年 6 月 29 日（土）13 時 00 分～17 時頃

実施場所：発達科学部学舎（B202 教室，ほか）

目的：人間発達環境学研究科の教育や研究に関する情報提供

対象者：人間発達環境学研究科への受験を希望している方（神戸大学発達科学部在学生以外）

参加者総数（申込者総数）：54 名（69 名）

(2) 実施体制

オープンキャンパス委員会

協力：情報メディア委員会（研究科HPに開催告知ページの設置）

(3) 実施方法及び内容

広報：5 月初旬より研究科HPに告知を掲載した。

参加申し込み方法：

・申し込みはメールでのみ受け付けることとし，専用アドレスを設定した。

・申し込み時に，氏名，連絡用メールアドレスのほか，現在の所属，指導を希望する教員氏名（2 名まで），希望教員未定の場合は話を聞いてみたい専攻あるいは研究分野を記してもらうこととした。

・申し込みメールに記された個人情報は目的以外には使用せず，適切に管理する旨を明記した。

参加申し込み期間：2013 年 5 月 24 日（金）～6 月 8 日（土）

内容:

1)全体説明

1-1)人間発達環境学研究科の理念と特色(岡田章宏研究科長)

1-2)国際学術交流協定と留学(青木茂樹国際交流委員会委員長)

2)専攻別説明

2-1)専攻/コースの説明(各専攻長または代理)

2-2)入試に関する説明(各専攻長または代理)

3)研究室訪問

3-1)指導希望教員との個別面談

3-2)研究室在学生等との交流

3-3)施設見学

(4) 配布資料

「オープンらぼ 2013 プログラム」

「学部・研究科パンフレット『神戸大学発達科学部　神戸大学大学院人間発達環境学研究科 2013』」

「リーフレット〈留学のススメ〉」「研究科リーフレット〈2014 神戸大学大学院人間発達環境学研究科〉」

(5) 参加状況詳細

参加申込総数:69 名　参加者合計数:54 名　当日欠席者:15 名

(6) 教員二人と面談を希望するものが多く,教員には時間調整のために多大な時間を使って頂き,また当日出張等により面談できない場合には,後日個別に面談時間を設けて頂き,非常に協力的に運営に関わって頂いた。全体を通して,所期の目的である「人間発達環境学研究科の教育や研究に関する情報提供」が相互的なコミュニケーションのなかで達成できたと考えられる。

(人間発達環境学研究科 オープン・らぼ WG 委員長　高田義弘)

2.5.4. ホームカミングデイ

神戸大学は平成 18 年度より卒業生に母校を訪ねていただき,新たにスタートを切った神戸大学を知って頂くという企画が始まった。今年は第 8 回を迎え,10 月 26 日(土)に開催された。

今年度は昭和 33 年,43 年,48 年,53 年,63 年,平成 13 年～20 年,24 年の卒業生に案内状を送付し,延べ 55 名の出席があった。午前 10 時 30 分から六甲台講堂で全体企画が行われた後,午後 13 時より学部企画が発達科学部で行われた。

発達科学部では午後 14 時にキャンパスツアーを行い,図書館,体育館,D ルームなどをご覧頂き,変わりつつある発達科学部の状況を見ていただいたあと,以下の催しを行った。

1) ようこそ発達科学部へ
　発達科学部長,紫陽会会長挨拶　14:45-15;00(大会議室)

2)記念講演会 (大会議室)　15:00-16:00 (大会議室)
　「神戸大学発達科学部発信のフィールド・オブ・ドリームス:『マスターズ甲子園』」
　　長ヶ原誠氏(人間発達環境学研究科准教授,マスターズ甲子園 2013 実行委員会委員長)

3) 紫陽会賞授賞式　16:00-17:00　(大会議室)

4) 全体懇談会・懇親会(参加費:3000 円)　16:30-19:00 (発達科学部生協食堂)

5) 併設企画　神戸大学よさこいチーム山美鼓演舞　17:15－16:30 (発達科学部生協食堂)

今年度は「神戸大学発達科学部発信のフィールド・オブ・ドリームス:『マスターズ甲子園』」と題して,長ヶ原誠(人間発達環境学研究科准教授,マスターズ甲子園 2013 実行委員会委員長)にご講演頂いた。また,第 6 回から行われている紫陽会会員(卒業生)と準会員(在校生)に贈られる紫陽会賞の受賞式も行われ,山岸八郎氏(フジッコ(株)会長),マスターズ甲子園実行委員会,神戸大学タッチフット部「Rooks」の3団体にクリスタルトロフィーと金一封が贈られた。

全体懇親会の中では，昨年に引き続き，神戸大学よさこいチーム山美鼓の演舞が行われた。演舞の後は学生諸君も懇親会に加わり，すばらしい交流の場が持てた。

（第 8 回発達科学部ホームカミングデイ実行委員長　岡部恭幸）

2.6. 国際交流活動

2.6.1. 学術交流協定

神戸大学との間で大学間協定がすでに締結されている大学ではあるが，中国の浙江大学およびオーストラリアの西オーストラリア大学との間で，学術交流を推進するための協定および覚書を結んだ。浙江大学地球科学専攻と本研究科人間環境学専攻との間では，地学分野での学術交流協定（本研究科のコンタクトパーソンは寺門靖高教授）を結び，西オーストラリア大学の The School of Sport Science, Exercise and Health と人間発達環境学研究科との間では学術交流に関する覚書（本研究科のコンタクトパーソンは近藤徳彦教授）を交わした。また，工学研究科が主導したリトアニアのヴィリニュス・ゲディミナス工科大学との図形科学分野での部局間協定に協定部局として加わった。

（副研究科長・副学部長・国際交流委員長　青木茂樹）

2.6.2. 留学生

本年度，本研究科で学んだ留学生は 91 名，概要（性別・国籍別・学年別・専攻別・国費／私費別）は別表の通りである。

(1) 交流協定校との留学生の交換

受入：華東師範大学 2 名

派遣：華東師範大学 1 名，ナザレ大学 1 名，オーフス大学 2 名，
ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)1 名

(2) 来年度の派遣留学生募集・決定

10 月 11 日（金曜日）に留学説明会を開催し，交換留学生制度を有する大学の紹介，留学先での勉学や生活，応募手続きなどについて説明を行った。全学から 10 名の参加があった。11 月 8 日に面接を実施し，7 名の応募者のうち，5 名の推薦を決定した（発達科学部 3 名，国際文化学部 2 名）。派遣先はオーフス大学 5 名。

(3) 来年度の受け入れ留学生（決定分）

すでに確定している受入留学生は，華東師範大学 2 名，オーフス大学1名。

(4) 来年度の本研究科留学生（決定分）

全学協定：グラーツ大学 1 名，クイーンズランド大学 1 名。

国際文化学部協定校：ハンブルグ大学 2 名。

(5) 留学生懇親会

6 月 28 日（金），C 棟講義室にて，本学部・研究家の留学生を対象とした懇親会を開催した。46 名（留学生 21 名，チューター4 名，事務職員 11 名，留学生専門部会委員 4 名，国際交流委員会 1 名，指導教員 4 名，研究科長）の参加を得て，親睦を深めた。教員による音楽演奏や，チューター3 名による，音楽と絵と舞踊のコラボレーションが演じられ，本研究科の特色を生かした演目により盛り上がった。

(6) 留学生見学旅行

11 月 16 日（土），京都の清水寺，二年坂，金閣寺，嵐山見学を実施した。17 名（留学生 13 名，チューター1 名，教員 1 名，事務職員 2 名）の参加があり，京都の観光を通して日本の理解を深めた。

(7) チューター説明会

昨年度から廃止し，窓口で随時説明することで丁寧に対応した。

(8) 派遣留学生報告書の閲覧

教務学生係にて，過去の交換留学生の報告書をファイルにまとめ，学生を対象に閲覧を継続した。

(9) 来年度に向けて

留学生が直面している課題のひとつとして，就職支援の不足がある。受入・派遣ともに一般学生と異なる条件下となることが多く，情報や取り組みなど，留学生に特化したものが必要となる。また留学中も，留学生独特の悩みなどを抱えることも多く，留学生たちは相談したり話し合える場を求めている。そのため来年度は月 1 回程度のお茶会や，留学生の相談を受け付ける心の健康相談の活用などを行う。さらに，今年度は交流協定校であるオーフス大学から派遣を停止されるという事態が生じた問題がある。たとえ交流協定を結んでいたとしても，この 10 年間事務レベルでの交流がなく，顔の見える関係を結べていなかったのが問題であった。もっと情報交換をするとか，実際に協定校に出向いて交流を図らないと，受入留学生の増加は望めないということがわかってきた。来年度は，担当教員の派遣を考えている。

		前期	後期	計
性別	女性	57	60	66
	男性	21	24	25
		78	84	91

		前期	後期	計
国籍	中国	69	77	82
	韓国	3	2	3
	台湾	2	2	2
	ウクライナ	1	1	1
	キリバス	1	1	1
	キューバ	1	1	1
	ノルウェー	1	0	1
		78	84	91

		前期	後期	計
学年	D3	3	3	3
	D2	2	2	2
	D1	3	3	3
	M2	22	21	22
	M1	23	23	23
	特別研究学生	2	2	2
	研究科研究生	14	16	19
	特別聴講学生	1	0	1
	教育研修性	0	2	2
	学部研究生	8	12	14
		78	84	91

		前期	後期	計
専攻	心身発達	9	10	12
	教育・学習	22	23	27
	人間表現	8	9	9
	人間行動	2	2	2
	人間環境学	37	40	41
計		78	84	91

		前期	後期	計
国費/私費	国費	6	6	6
	私費	72	78	85
計		78	84	91

（留学生専門部会長　吉田圭吾）

2.6.3. 「英語による授業」設置準備

大学のグローバル化に対応して，今後，英語で行われる授業を増やしていくことが期待されている。実態としては，必ずしも英語の授業に対するニーズが顕在化していないものの，ESD（持続可能な開発のための教育）が地球規模での実践的な学際的交流を求めるものであることから，まず，大学院に開設された ESD サブコースの授業科目のうち，ESD 研究（ESD study）を，すべて英語で行うこととした。

教員 10 名が各専門に応じて英語でレクチャーを行い，参加院生（8 名：うち 4 名は留学生）が英語で質問する，授業後のコメントも英語で記入し，最後のレポートも英語で行う，というフル英語の授業を実施した。教員・院生共に試行錯誤の繰り返しであったが，参加院生からは，「英語でのコミュニケーションの面白さを体感できた」との感想を得た。

今回は試行的であったため履修院生が少なかったが，次年度は，全学に本授業の存在をアピールし，履修院生の拡大とともに，英語による授業の効果・意義を測ってゆく予定である。

（松岡広路）

2.6.4. 学生・教員の海外派遣

デンマークのオーフス大学との間では，2000 年 8 月に大学間協定および学生交流細則を締結し，その翌年から留学生派遣を開始した。学生の希望が多く集まり，2009 年からは毎年複数名の派遣を続けて来た。今年度も 2014 年度派遣生の選考を済ませて内定者が確定していたが，デンマークの国情の変化により，派遣と受入のバランスの取れていない学生交換プログラムの見直しがなされ，これまでのアンバランスが解消されるまでは，神戸大学からの派遣の受け入れは一時的に停止されることとなった。この結果，神戸大学側で内定していた学生が留学の変更を余儀なくされる結果となった。

- 交換留学

  2012 年 8 月～2013 年 6 月　デンマーク オーフス大学
  2012 年 8 月～2013 年 6 月　デンマーク オーフス大学
  2012 年 9 月～2013 年 6 月　オーストリア ヨハネスケプラー大学
  2013 年 8 月～2014 年 6 月　デンマーク オーフス大学
  2013 年 8 月～2014 年 6 月　デンマーク オーフス大学
  2013 年 8 月～2014 年 6 月　中国 華東師範大学
  2013 年 9 月～2014 年 6 月　韓国 ナザレ大学校
  2013 年 9 月～2014 年 6 月　イギリス ロンドン大学東洋アフリカ研究学院※
  2014 年 1 月～2014 年 6 月　デンマーク オーフス大学

  ※は全学交流細則に基づく派遣先

- 学生の国際学会での発表（「神戸大学基金」および「人間発達環境学研究科国際交流運営資金」による助成分）

  2012 年 6 月　〔神〕　スペイン バルセロナ
  18th Annual Congress of the European College of Sport Science
  2012 年 7 月　〔神〕　スウェーデン ストックホルム

The 13th European Congress of Psychology (ECP 2013)
2012 年 7 月　〔人〕　中国　北京
The 13th World Congress of Sport Psychology
2012 年 7 月　〔人〕　中国　北京
The 13th World Congress of Sport Psychology
2012 年 9 月　〔神〕　イギリス レディング
Joint Annual Conference of the BPS Developmental and Cognitive
（〔神〕は「神戸大学基金」，〔人〕は「人間発達環境学研究科国際交流資金」による助成）

- 教員の海外派遣（教員個人の研究活動にとじたものは含まず）

2013 年 7 月　加藤佳子教授
インドネシア プルサダ大学
本部局学生と現地学生との交流
2011 年 8 月　太田和宏教授
フィリピン サンベーダ大学
スタディ・ツアー，サンベーダ大学との学生共同研究プロジェクト
2013 年 8,9 月　加藤佳子教授
オーストリア グラーツ大学，グラーツ医科大学，スウェーデン カロリンスカ医科大学
学術交流のための打ち合わせ
2011 年 11 月　太田和宏准教授
フィリピン サンベーダ大学
スタディ・ツアー，「貧困家庭向け条件付き現金給付プログラム」実態調査
2014 年 3 月　津田英二准教授，赤木和重准教授
韓国 ナザレ大学
スタディ・ツアー，交流協定に基づく教員間グローバル人材育成交流研修
2014 年 3 月　伊藤真之教授
アメリカ オレゴン大学
教育上の交流・連携に関する協議・調査
2014 年 3 月　平川和文教授，近藤徳彦教授，秋元忍准教授
オーストラリア 西オーストラリア大学
グローバル教育に関わる打ち合わせ

（副研究科長・副学部長・国際交流委員長　青木茂樹）

2.6.5. 海外研究者の受け入れ

期日	氏名	所属・職	受入者
2012/9/19～ 2013/7/18	Trever Hagen	イギリス エクセター大学・博士（日本学術振興会 外国人特別研究員）	大田 美佐子
2013/3/15～ 8/14	泉原 美佐	イギリス ブリストル大学・Reader	平山 洋介
5/16	Lo Sing Kai	香港 香港教育学院・研究生院院長	岡田 章宏
3/1～8/27	張 延梅	中国 海南大学継続教育学院副院長	末本 誠
5/7～7/20	Adami Alessandra	イタリア ジュネーブ大学・博士研究員	近藤 徳彦
5/16	Lo Sing Kai	香港 香港教育学院・研究生院院長	岡田 章宏
5/16	So Winnie Wing Mui	香港 香港教育学院・研究生院副院長	岡田 章宏
5/16	Poon Sin Yi	香港 香港教育学院・助理教務長	岡田 章宏
5/31	Allan Cladera	フィリピン サンベーダ大学・教授	太田 和宏

6/17	林 志宣	韓国 延世大学校・教授	大田 美佐子
7/6～10/5	Li Zilong	中国 浙江大学・教授	寺門 靖高
7/23～9/19	James Imamura	アメリカ オレゴン大学・教授	伊藤 真之
8/1～2014/7/31	Jeffrey A. Thornton	アメリカ International Environmental Management Services Ltd. ・ Managing Director	佐藤 真行
8/12～8/14	Park Jin-Kyung	韓国 関東大学校・教授	山口 泰雄
8/23	Nancy Imamura	アメリカ オレゴン州 Yujin Gakuen	伊藤 真之
10/29～11/4	Tim Ackland	オーストラリア 西オーストラリア大学・教授	近藤 徳彦
10/29～11/4	Daniel Green	オーストラリア 西オーストラリア大学・教授	近藤 徳彦
12/4～12/7	Siriporn Wajjwalku	タイ タマサート大学・准教授	朴木 佳緒留
12/21	金 鐘忍	韓国 ナザレ大学リハビリテーション自立学科長	赤木和重・津田英二
12/21	金 明子	韓国 ナザレ大学・大学院生	赤木和重・津田英二
12/21	文 龍洙	韓国 ソウル市立知的障害者福祉館長	赤木和重・津田英二
12/28～ 2014/1/28	Nigel Anthony Taylor	オーストラリア ウロンゴン大学・准教授	近藤 徳彦
1/25～2/7	Ursula Athentaedt	オーストリア グラーツ大学・准教授	伊藤篤・加藤佳子
1/25～2/7	Anja Ischebeck	オーストリア グラーツ大学・准教授	伊藤篤・加藤佳子
2/7	Eva Mutner	オーストリア グラーツ医科大学・准教授	伊藤篤・加藤佳子
1/29～2/28	張 太雄	韓国 江原大学・大学院生	高見 泰興
1/31～2/1	Ch. Niewiadomski	フランス リール第 3 大学・教授	末本誠・森岡正芳
2/28～3/3	麓 浩子	香港 Yew Chung Community College・講師	北野 幸子

（国際交流委員会委員長 青木茂樹）

2.6.6. スタディ・ツアー

(1) 韓国スタディ・ツアー

2013 年度の韓国スタディ・ツアーは，3 月 5 日～7 日に実施した。博士後期課程学生 4 名，博士前期課程研究生 1 名の計 5 名が参加し，教員 2 名が引率した。内容は，韓国ナザレ大学における障害学生と非障害学生の共同生活，共同学習の実態を学び，韓国の大学生や教職員と意見交換するといったものであった。韓国ナザレ大学は，全学生の 7%に障害があり，社会福祉分野で唯一特性化大学として認定を受けている。今回は特に，障害学生と非障害学生が同室で相互支援をしながら暮らす寄宿舎に焦点を当て，共同生活をしている障害学生，非障害学生にインタビュー等を行った。また，障害学生が学ぶ授業の様子を参観し，学生や教員にインタビューを行った。この訪問の実現のために，事前，事後に数回ずつのふりかえりを行った。

（准教授 津田英二）

(2) サンベーダ大学との学生共同研究プロジェクト

8 月 25 日から 9 月 2 日にかけて，社会環境論コースの 3，4 回生 5 名がフィリピン，マニラを訪れサンベーダ大学教養学部学生との共同研究プログラムを実施した。「2015 年アセアン共同体発足と観光産業」をテーマとして調査，討論を行い，共同レポート作成をした。学生主体で，研究テーマの設定，情報の収集と整理，研究報告の構成

等を連日行う傍ら，関連する講義（「開発経済論」「産業論」）を聴講し理解を深めた。最終日には，神戸・サンベーダ両大学学生による合同報告会を行い，両国の学生にとって文化背景の違いを越えた相互理解だけでなく，アジアの協同のあり方を考えるよい機会となった。この成果は，サンベーダ大学より，*To Assess The Lebell of Readiness of the Tourism Industory of Japan and Phillipine in Relation to the Commencemt of AEC 2015* として刊行された。なお本プロジェクトは今年度から始まった「紫陽会グローバル人材育成基金」の助成を一部受けて実際された。

（准教授　太田和宏）

(3) フィリピンにおける「貧困家庭向け条件付き現金給付プログラム」実態調査

2013 年 11 月 12 日から 11 月 19 日にかけて，国際開発論を履修する学生院生 14 名（うち留学生 2 名）でフィリピンを訪問し，貧困に関する現地調査を実施した。フィリピン政府が実施する「貧困家庭向け条件付き現金給付プログラム」Pantawid Pamilyang Pilipino Program（4Ps）の実態について，政府機関である国家経済開発庁 NEDA，社会福祉開発庁 DSWD のほか，マニラ都市貧困地域住民，さらには南カマリネス州のコミュニティ，NGO を訪問し，聞き取り調査を行った。事前準備段階では，政策に関する論文を行動苦するだけでなく，現地で要求される外国語（主として英語）でのコミュニケーション能力を高めるために，各自の学習を義務付けるとともに，英語での討論もとりいれた。現在その成果を論文としてまとめる作業を行っている。なお本プロジェクトは ESD 推進関連予算からの助成を一部受けて行われた。

（准教授　太田和宏）

2.7. 環境設備

2.7.1. 教育・学習環境の整備

(1) 障害学生支援個別受講システムの導入

B202, B206 教室に障害学生支援個別受講システムを導入し，対人関係に障害を持った学生が安心して講義を受講できるようにした。

(2) スクリーン・大型プリンター等の更新

経年劣化した B202 教室のスクリーン一式，B206 教室の椅子及び教員印刷室の印刷機を更新するとともに，ポスター発表用に大型プリンターを導入した。

(3) 呼吸代謝モニターシステムの更新

授業で使用する呼吸代謝モニターシステムを設備更新費により更新した。

(4) 子育て学生支援室の設置

子育て学生を支援するため，A棟1階の休養室を子育て学生支援室を兼ねる部屋とした。

(5) 紫陽会グローバル人材育成支援基金による国際交流支援

同窓会による「紫陽会グローバル人材育成支援基金」の設立を受け，学生の海外での様々な交流活動を支援した。

（事務長　仲田保夫）

(6) 無線 LAN・電子掲示板システム・学内情報端末の整備，ICT 利用支援

本学部・研究科で利用できる無線 LAN は，神戸大学情報基盤センターが管理する全学用無線 LAN と，本研究科が独自に管理する無線 LAN である。2012 年度までに，全学用無線 LAN は，次の地点周辺で利用可能となっている。

A 棟 - 1 階 D-Room（発達ホール）／2 階 図書館・各会議室／3 階 西側 A347 前廊下／4 階 東側 A417 前廊下／6 階 東側 A614 前廊下

B 棟 - 1 階 各教室／2 階 各教室

C 棟 - 1 階 階段ホール周辺

D 棟 - 1 階 中心部（南東部）／2 階 中心部（南部分）

F 棟 - 2 階 各教室・中会議室 D／4 階 F458 前廊下
G 棟 - 4 階 廊下中央
食堂 - 南側
体育館
プールおよびその周辺

また，本研究科が独自に管理する無線 LAN は，A 棟 1 階～7 階の一部で利用可能となっている。

2013 年度においては，無線 LAN 環境をさらに拡充するため，全学用無線 LAN のアクセスポイントを大会議室（A 棟 2 階），A 棟 7 階 東側と西側の 3 ヶ所に，本研究科独自の無線 LAN のアクセスポイントを C 棟 1 階 C101 教室に新設した。また，情報教育設備室にスタッフが常駐し，学生や教職員向けに，無線 LAN を含むコンピュータ・ネットワーク利用に対する技術支援を充実させた。

本研究科では，（学部・研究科ウェブサイト上で公開している）イベント・お知らせ等の情報を学生・教職員向けに幅広く周知する目的で，2012 年度までに電子掲示板を 4 台（A 棟 1 階エレベータ前，A 棟 2 階教務学生係前，D-Room，図書館内）に設置している。2013 年度においては，この電子掲示板システム用の管理ソフトウェアを更新し，より的確な情報をより見やすく表示する環境を整備した。

在校生や来訪者などが，神戸大学および本学部・研究科に関するウェブ情報へ手軽にアクセスするため，2009 年に学内情報端末（通称「きおすくん」）2 台（A 棟 1 階エレベータ前，A 棟 2 階教務学生係前）を設置している。2013 年度においては，これら 2 台の端末のリプレースを行い，より使いやすい環境を整備した。

（情報メディア委員会副委員長 宮田任寿）

(7) 図書館整備

本研究科・学部に附設された人間科学図書館では，例年と同様，平成 24 年度にも学生用資料の整備・充実に努め，平成 25 年度以降の学部生・院生の利用に備えた。その結果は，以下の表に示すとおりである。貸出率，回転率は高い値を示していることから，選定された資料（図書）が良く利用されていることが推測され，本図書館が学部生・院生の学習にとって大切な役割を果たしている。

表 平成 24 年度学生用資料選定結果：区分ごとの購入実績及び貸出統計

（貸出統計は平成 25 年 1 月～12 月のデータ）

区　分	予算額	購入実績		A	B	C	D (%)	E (%)
		冊数	金額					
専攻推薦図書	5,400,000	1,391	5,699,173	1,328	679	1,684	51.1	126.8
学生希望図書	220,000	113	304,703	107	82	263	76.6	245.8
継続図書	250,000	107	305,809	61	25	52	41.0	85.3
シラバス掲載図書	200,000	33	133,354	32	15	57	46.9	178.1
検定教科書	200,000	293	132,221	293	192	390	65.5	133.1
学生用図書	57,800	22	111,221	16	13	33	81.3	206.3
グローバル図書※	267,265	125	267,265	125	92	388	73.6	310.4
合　計	6,595,065	2,084	6,953,746	1,962	1,098	2,867	56.0	146.1

【注】A:貸出可能冊数 B:貸出図書数 C:貸出延回数 D:貸出率（B/A）E:回転率（C/A）

※グローバル図書とは，H24 年度神戸大学が文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に採択され，事業において関連図書を各館室で選書し配架している。当館でも「グローバルコーナー」を設置し，利用しやすい環境を作って利用者に提供している。

平成 25 年度には，メール会議も含めて 5 回の委員会を開催した。専攻（学科）等に対する学生用推薦図書の依頼，検定教科書等の発注など，例年通りの取組に関する協議を行うほか，学生用購読用雑誌の見直し，重複図

書の廃棄と有効活用について協議を行った。

（図書委員会委員長　井上真理）

2.7.2. 研究・生活環境の整備

(1) 無線LANの整備

全学の無線LANが使用できるようA棟，C棟，及びD棟の一部で設置工事を行った。

(2) ドラフトチャンバーの点検

ドラフトチャンバーを全て点検し，必要な修理を行った。

(3) 研究室の整備等

外部資金獲得者に対し，より研究環境を改善するための設備及び新規採用者の研究室の必要設備を整備するとともにF棟の環境が悪化している実験室の改修工事を行った。

(4) 網戸の設置

昨年度に引き続き，夏季の研究室等の暑気対策として希望のあったところの全てに網戸を設置した。

（事務長　仲田保夫）

2.7.3. 交流ルーム・アゴラ

A 棟 6 階の交流ルーム（カフェ・アゴラ）は学生の交流スペースとして開設 6 年目になり，3 月末に営業許可の更新を行い承認された。カフェ・アゴラは，学内厚生施設であるとともに，障害者雇用や実習の実践の場でもある。昨年度に引き続き，食品衛生責任者の資格を持つ仲田事務長が店長を務めた。脳性麻痺のあるマスター，従業員として知的障害のある者 2 名，身体障害のある者 1 名，他スタッフ 2 名のサポートのもとに知的障害を持つ実習生 3 名を受け入れた。今年は，12 月にマスターが長期病休のため，従業員の一人がマスターを代行したが，支障なくアゴラの運営は行われた。

(1) 本年度の活動状況

1) 行事との連携

学外に対してカフェ・アゴラの活動の趣旨と内容を紹介する目的で，下記の機会にカフェを開店あるいは活用した。いずれも好評で利用者の本施設における活動への理解が深まった。

① 保護者会

昨年度から始まったコーヒーサービスを今年も行い，15 名の保護者にコーヒー紅茶を提供した。

② オープンキャンパス

8 月 7，8 両日の開催に合わせて，カフェ・アゴラを開店した。店舗以外に隣接する大学院生研究室を開放し客席数を増やした。マスター，スタッフ，実習生に加え今年は社会環境論の太田ゼミ生の協力を得，アルバイトとして入っていただき，さらにボランティアの応援を得て人手を補った。太田ゼミの提案で，フェアトレード商品であるマンゴージュースの素を使い，マンゴーソーダを新メニューとして加え，例年通りのカレーと飲料とともに提供した。太田ゼミ生たちのフェアトレード商品の積極的な宣伝活動もあり，2 日間で飲料：学生 259 名，一般 116 名，カレー128 名と利用者は大幅に増加した。6階からの展望を楽しむとともに，夏の暑さをしのぐ憩いの場となった。同時に実習生の活動と本学部の一面が理解され，好評であった。

③ 日韓交流シンポジウムレセプション

レセプションの開場としてアゴラ店内と隣接する院生研究室を使用し，飲み物と食事を提供した。約 30 名の参加があり，海外の方にも大学におけるアゴラの意味を知っていただく機会となった。

2) 喫茶のサービス提供と利用状況

4 月から 2 月末までの 11 ヵ月間の飲料注文数は一般が 725（631），学生 836（900），食べ物 3378（2238）であり，食べ物の注文数が約 1.5 倍増加した。これは新規メニューが増えたことによると思われる。

3) 展示活動

① 交流ルーム委員会企画

・楽譜展　田村文生作品「百頭女」 前年度～4/30

・「アゴラの仲間たち展」5/14～11/1

② 博物館実習の企画として場所を提供

博物館学芸員資格専門委員会より学内実習先としてカフェ・アゴラを使用したいとの申し出があり許可した。

・田中美佳個展　切り絵作品「leave@collage」2 /3~2/7

4) 音楽活動

今年度より従業員の 1 名が音楽活動をしており，カフェ・アゴラでも音楽活動を企画することになった。5 月より，ギターとキーボードを 11 月からは音響機材も常設。5 月 1 月にはライブ演奏，また 10 月より第 4 水曜日にシンガーソングライターのライブを定期開催。これをきっかけに学外からのお客様もこられ，アゴラの存在を知っていただく機会となった。

5) 予算と売り上げ

人件費は障害者雇用分を本部経費から，その他を研究科計費から充当した。食材などの材料費については学部予算からの配分に加え，その年度のアゴラでの収益の 8 割が大学より戻され加算されている。今年度 2 月末までの 11 か月分の収益は約 99 万で昨年並みで，人件費分を除くと大幅な黒字である。

(2) 今後の課題と活動予定

営業許可更新を行い，来年度より2期目に入り，一層の内容の充実をはかっていきたい。

実習生の 1 名は，アゴラでの実習を終え，就職活動に取り組み始めた。このようにここでの実習生が，社会へ出ていくためのスキルを学んでくれる活動を充実させていきたい。

来年度早々に，消費税の増税にともない商品の値上げを行うが，利用度，売り上げにどのように影響するか見守っていきたい。

（交流ルーム運営委員会委員　佐々木倫子）

2.8. 教員研修

2.8.1. FD

本年度も教授会の開催にあわせて FD を実施し，無理なく多くの教員が参加し議論を行うことができた。以下に本年度に実施したテーマを記しておく。

- 4 月:「個人情報の危険度及びパソコン等セキュリティ対策」(情報システム委員会　長坂耕作准教授)
- 6 月:「若手教員長期海外派遣制度海外派遣教員報告会(秋元忍准教授)
- 9 月:「発達科学部キャリアサポートセンターの活動について」(キャリアサポートセンター　宮村聡子)
- 11 月:「オープン連携創造本部について」(理事(産官学社会連携・広報担当)　内田一徳教授)
- 12 月:「国立大学改革プラン」(副研究科長　岡田修一教授)
- 1 月:「神戸大学基金について」(理事(産官学社会連携・広報担当)　内田一徳教授　他 2 名)
- 2 月:「日米連携フェア 2014 について」(国際交流推進機構米州交流室長　賀谷伸幸教授　他 1 名)

年度後半は，審議すべき議題が多く時間的な制約があるなかで，本部からの要請に応じて設定されため，部局として独自性をもった FD の開催が難しくなった。今日の具体的状況下で教員の資質向上を図るという本来的目的を実現するため，より計画的な運営が必要と考える。

（人間発達環境学研究科長・発達科学部長　岡田章宏）

2.8.2. 初任者研修

毎年，情報メディア委員会では，着任した教員に対して ICT に関連する研修会を行っており，2013 年度は 11 月に開催した。神戸大学における情報セキュリティポリシーと個人情報保護に関する説明をはじめ，部局が独自に提供する ICT 関係のサービス(IP アドレス管理システム，無線 LAN，学生へのメール配信システム，技術サポートなど)，神戸大学が提供する ICT 関係のサービス(KUID，教務情報システム，会計業務システム，WeblyGo など)，その他，学外 ASP サービス利用の注意点などについて説明を行った。

（情報メディア委員会副委員長　宮田任寿）

3. 入試

3.1. 一般選抜入試

3.1.1. 入学試験委員会

本学部・研究科の入学試験全体を所管する入学試験委員会は，研究科長，副研究科長，専攻長，学生委員会委員長の計 9 名で構成し，平成 25 年度の委員長を副研究科長の青木茂樹が務めた。

今年度の審議概要（日程と議題）は以下のとおり。

・第 1 回（4 月 15 日）
1. 平成26年度大学院募集要項について
2. 第3年次編入学試験について

・第 2 回（5 月 14 日）
1. 平成26年度神戸大学入学者選抜要項（案）について
2. 平成26年度国費外国人留学生（外国政府派遣留学生を含む。）及び私費外国人留学生学部入学者の選考方法等について
3. 平成26年度博士課程前期課程人間発達専攻1年履修コース募集要項（案）について

・臨時（5 月 15 日）
1. 平成26年度博士課程前期課程人間発達専攻1年履修コース募集要項（案）について

・持ち回り（7 月 16 日）
1. 平成26年度博士課程前期課程入学試験に係る個別の入学資格（出願資格事前）審査について

・第 3 回（8 月 28 日）
1. 平成26年度博士課程後期課程人間環境学専攻（第Ⅰ期）入学試験・進学者選考試験合格者の判定について

・第 4 回（10 月 2 日）
1. 平成26年度博士課程前期課程入学試験合格者の判定について
2. 平成26年度大学院・学部（第3年次編入学試験，社会人特別試験及び私費外国人留学生特別試験）の入試情報開示基準について
3. 平成27年度入試における旧教育課程履修者に対する経過措置（大学入試センター試験利用教科・科目）について

・持ち回り（11 月 11 日）
1. 平成27年度入試における旧教育課程履修者に対する経過措置（個別学力検査）について

・第 5 回（12 月 4 日）
1. 平成27年度入学者に係る入学試験日程について
2. 大学院前期課程入試の英語の試験について

・第 6 回（1 月 16 日）
1. 平成26年度博士課程前期課程人間発達専攻1年履修コース入学試験合格者の判定について
2. 平成25年度発達科学部入学者選抜に係る原則について
3. 平成26年度入学者に係る入学試験日程について

・第 7 回（3 月 5 日）
1. 平成26年度博士課程後期課程入学試験・進学者選考試験合格者の判定

3.1.2. 一般選抜入試に係る総括と課題

今年度の発達科学部及び人間発達環境学研究科の一般選抜入試に関する業務は，学生委員会をはじめ関係各位の尽力により大過なく遂行された。入試のあり方については，入学試験委員会を中心に，入学状況等の分析

を踏まえアドミッション・ポリシーとの妥当性を適宜検討してきたが，次の 3 点については，次年度以降も引き続き特に注視すべき課題として記しておく。

1. 平成 26 年度発達科学部入学試験（社会人特別入試，AO 入試を含む）の結果は，入学定員 280 名に対し，志願者数 1,241 名（志願倍率 4.43 倍），受験者数 1,010 名，合格者数 296 名，入学者数 286 名であり，定員充足率は 1.02 倍となった（いずれも学部全体の数字。学科別の詳細は『資料編』を参照）。適正な範囲といえるが，定員超過・定員割れについては厳格な取扱いが指摘されており，今後も注意する必要がある。
2. 第 3 年次編入学試験に関し，前年度より，複数の実施コースより本制度運用に関する要望が寄せられており，入学試験委員会での検討事項となっている。これまでの志願者数の推移などのデータを整理し見直しの議論を始めつつあったが，年度途中から始まった国立大学機能強化改革案の検討の際に，神戸大学全体で入試を統一する案などが議論されるなど学部入試に関する大きな異動が懸念された。一定の志願者が継続していることも鑑みて，改革に伴う入試制度の見通しが定まるまでは従来通りの実施を継続することとした。
3. 大学院の入試については，前期課程の入試において英語試験の外部試験導入の具体的検討を開始し，平成 27 年度に実施する試験からの導入を検討中である。

平成 26 年度人間発達環境学研究科博士課程前期課程の入学試験結果は，人間発達専攻で，入学定員 52 名に対し，志願者数 134 名（志願倍率 2.58 倍），受験者数 122 名，合格者数 55 名，入学者数 48 名であり，定員充足率は 0.92 倍となった。また人間環境学専攻で，入学定員 40 名に対し，志願者数 50 名（志願倍率 1.25 倍），受験者数 45 名，合格者数 43 名，入学者数 41 名で，定員充足率は 1.02 倍であった。外数（定員 4 名）としている人間発達専攻（一年履修コース）の入学者数 4 名を加え，研究科全体として捉えれば，定員 96 名に対し入学者数 93 名，定員充足率は 0.97 倍となった。人間発達専攻において合格後の入学辞退者が 7 名発生したために定員充足率が 1.00 を下回る事態となったが，全体としての入学状況は適性範囲内といえる。

また博士課程後期課程については，人間発達専攻が，入学定員 11 名に対し，志願者数 20 名（志願倍率 1.8 倍），受験者数 20 名，合格者数 12 名，入学者数 12 名であり，定員充足率は 1.09 倍となった。また人間環境学専攻では，定員 6 名に対し，志願者数 8 名（志願倍率 1.33 倍），受験者数 8 名，合格者数 8 名，入学者数 7 名であり，定員充足率は 1.17 倍となった（第Ⅰ期と第Ⅱ期の合計）。研究科全体としては，定員 17 名に対し入学者数 19 名，定員充足率 1.11 倍となっており，許容可能な範囲とはいえ，やや高めの数字となっており，より厳格な定員管理が求められる。

いずれについても，詳細な数字は『資料編』に掲載する。

（入学試験委員会委員長　青木茂樹）

3.2. 特色ある入試

3.2.1. 社会人特別入試

平成 26 年度社会人特別入試は，例年どおり 4 学科で行った。選抜方法は，人間形成学科において課していた小論文を廃止したことにより，全学科で英語と面接（口頭試問）による選抜を行った。募集人員は 14 名（人間形成学科 5 名，人間行動学科 2 名，人間表現学科 2 名，人間環境学科 5 名）であった。出願期間は平成 25 年 8 月 23 日から 8 月 29 日，試験実施は 10 月 5 日，合格発表は 10 月 22 日であった。結果は，志願者数 12 名（志願倍率 0.86 倍），受験者数 12 名，合格者 5 名であった。この欠員分 9 名は，神戸大学入学者選抜試験前期日程において補充した。

3.2.2.　3 年次編入学試験

平成 26 年度 3 年次編入学試験は，昨年度と同様に 4 学科 11 コースと発達支援論コースの 12 コースで実施した。募集人員は 10 名で，選抜方法はこれまでと変更なく，いずれのコースも，英語，専門科目，口頭試問であった。出願期間は平成 25 年 8 月 23 日から 8 月 29 日，試験実施は 10 月 5 日，合格発表は 10 月 22 日であった。

結果は，志願者数 57 名（志願倍率 5.7 倍），受験者数 53 名，合格者は 12 名，入学者 8 名（人間形成学科 2 名，人間行動学科 0 名，人間表現学科 5 名，人間環境学科 1 名，発達支援論コース 0 名）であった。なお，今年度もアドミッション・ポリシーとの適合性，制度のより安定的な運用を確保するため，合格判定の原則を決定する手

続きを確認した。

本入試に対する社会的ニーズは総じて高いと言えるが，コースによって志願者数のばらつきが見られ，そのあり方について引き続き検討することとした。

3.2.3. アドミッション・オフィス入学試験

平成 25 年度 AO 入試は，例年どおり，人間行動学科及び人間環境学科で実施された。

結果は次のとおり。人間行動学科について，募集人員は 12 名に対し，志願者数は 57 名（志願倍率 4.75 倍），第 1 次選考合格者数 24 名，第 2 次選考合格者（最終合格者）数 12 名，入学者数 12 名，また人間環境学科については，募集人員は 5 名に対し，志願者数は 6 名（志願倍率 1.2 倍），第 1 次選考合格者数 3 名，第 2 次選考合格者数 1 名，最終合格者数 1 名，入学者数 1 名，であった。

（入学試験委員会委員長，AO入試実施委員委員長　青木茂樹）
（社会人入試専門委員会委員長，編入学試験専門委員会委員長　梅宮弘光）

4. 教育

4.1. 教育課程

4.1.1. 今年度の特長

平成 25 年度に新たに開始した取組，特記すべき事項等は以下のとおりである。

(1) 「教職実践演習」の実施

教育職員免許法の改正によって，平成 22 年度入学者から「教職実践演習」（2 単位）が必修となった。幼稚園・小学校教諭免許状に関しては発達科学部教務委員会が，中学校・高等学校教諭免許状に関しては全学教職課程専門員会が，責任母体となって準備・開講した。いずれも附属校園の全面的な協力の下に計画・実施され，「神戸大方式」とでも呼ぶべきユニークな展開をみせている。

(2) 学科別・専攻別の DP の策定

学部・研究科のディプロマ・ポリシー（DP／学位授与の方針）に加えて，学科別・専攻別の DP が策定された（平成 26 年度『学生便覧』に掲載）。

(3) 学位論文評価基準の明示

学位評価基準が検討され，以下のように定められた。

【博士論文の審査基準】
人間発達環境学研究科における博士論文の審査は，下記の評価基準に基づいて行う。
1. 研究内容が新しい知見を提供し独創性を有している。
2. 当該専攻分野において専門的かつ学術的な価値を有する。
3. 論文の結論が実証的に裏づけられている。
4. 論旨が一貫して明確であり，論理的に展開されている。
5. 先行研究および資料が適切かつ厳密に取り扱われている。

【修士論文の審査基準】
人間発達環境学研究科における修士論文の審査は，下記の評価基準に基づいて行う。
1. 研究内容が新しい知見を提供している。
2. 当該専攻分野において専門的な価値を有する。
3. 論文の結論が根拠をもって裏づけられている。
4. 論旨が明確であり，論理的に展開されている。
5. 先行研究および資料が適切に取り扱われている。

(4) 博士論文の公表方法の見直しと整備

従来は紙媒体での提出・保管であった博士論文に関して，2013 年 9 月修了の者から，「学位論文を記録した電子媒体（CD-R）」を提出し，原則として神戸大学学術成果リポジトリよりインターネットを通じて公開することとなった。

(5) 課程博士論文の指導体制の見直しと整備

課程博士論文の指導体制に関わって，「課程博士論文提出及び審査の流れ」を見直して整備した。2014 年 2 月 21 日教授会において関連規定が改正され，学年を遡及して即日施行された（平成 26 年度『学生便覧』に掲載）。

(6) 単位制度の実質化に係る CAP 制の運用の見直し

「単位制度の実質化」の趣旨を踏まえて，①4 年間での登録上限「49 単位×4 年間＝196 単位」を守る，②年間の登録上限「49 単位」に近づける工夫を行う，ことが合意された。これを踏まえて，関連規定が改正され，平成 26 年度学部入学者から適用となった（平成 26 年度『学生便覧』に掲載）。

(7) 成績評価基準の明示

学部・研究科に関して，「成績評価基準に関する内規」を制定した（平成 26 年度『学生便覧』に掲載）。

(8) 成績評価に係る申立ての仕組みの整備

学部・研究科に関して，「学生からの成績評価に対する申し立て手続きについて」を制定した（平成 26 年度『学生便覧』に掲載）。

(9) 「4 学期制」及び「ナンバリング」の検討開始

グローバル化を視野にいれる観点から，全学的に「4 学期制」及び「ナンバリング」に関する検討が開始された。本学部では，ゆるやかな形での「ナンバリング」の予備作業を行った。

（教務委員会委員長　渡部昭男）

(10) 大学院 ESD サブコースの開設について

神戸大学の全学部の学生が参加することのできる神戸大学 ESD サブコースの発展的学習プログラムとして，本年度から大学院博士課程前期に ESD サブコースを開設した。学部では ESD の学習を体験しつつ実践力を育成することが目的であったが，大学院では，さらに，国際性・研究性を重視し，グローバルかつローカルな思考・行動のできる ESD 実践者を育成することを目的とする。

基礎科目として「ヒューマン・コミュニティ創成研究」，発展科目として「ESD 研究」（英語授業）および ESD に関する研究論文の執筆を目標とする「ESD 研究演習」がある。ESD 研究演習は，前 2 科目の履修条件があるため，2014 年度から本格的に実施される。

本年度は，やや試行的な色彩もあって本研究科の院生に受講生を限定したが，次年度は全学の院生に門戸を広げ，本研究科の提供する大学院生向け学習プログラムとして発展させる予定である。

（松岡広路）

4.1.2. 学部，研究科共通科目

(1) 発達科学への招待

1. 授業計画と実際

入学初年度学生対象の学部共通必修科目「発達科学への招待」は，今年度で開講 9 年目を迎えた。新入生対象の導入教育として，本講義では，新入生に対して，大学での勉学の取り組み方を考えさせるとともに，大学で行われる「研究」に関心を持ってもらうことに重点を置いている。表1・2 に示すように，3 つのモジュールで構成し，モジュール A は「発達科学研究の実践性」，B は「発達科学研究の手法」，C は「発達科学研究の学際性」とした。従来どおり，1 学年 280 名並びに再履修生を学籍の末尾番号により奇数組と偶数組に分け，各モジュール内で授業をローテーションした。

「モジュール A のまとめ」は，今年度は丑丸敦史教授のマネジメントの下，松岡広路教授，吉田圭吾教授，坂本美紀准教授がパネリストとして「大学での学び ― 知識を詰め込む学びから，得た知識を活用して新たな知識を生

み出す学びへうつるためには」をテーマに，例年と同じ討論会形式で行った。まだこの時期，大教室での発言に不慣れな学生からも意見を引き出した。

最終回の授業で開催される，毎年恒例の学生主体の総合討論会も，学生の協力により活発な意見交換が行われた。大テーマは「スクールカウンセリングを考える」であった。従来の「学際性とは」といったテーマと異なり，スクールカウンセリングに特化したのが特徴的であった。立候補したパネリストが提供したテーマは以下の 4 件であった。

- 「スクールカウンセリングの意義」（人間形成学科）
- 「スクールカウンセラーと教師の連携のとり方」（人間表現学科）
- 「生徒にとって相談しやすい環境とは ― 保健室の先生とスクールカウンセラー ―」（人間環境学科）
- 「カウンセリングと学際性」（人間表現学科）

本テーマは，形成学科の専門に関わる内容であるが，形成学科ではない学科の学生がパネリストとして参加したことが，結果的に，学際的に「スクールカウンセリング」を考える展開に繋がったことは収穫であった。スクールカウンセリングの講義を担当した吉田圭吾教授が講評ならびに質疑に回答した。坂本美紀准教授，山本道子講師，蛯名邦禎教授が参観し，討論会の講評をうりぼーネットの掲示板に掲載した。今年度は女子学生の積極的な協力が目立った。

表1　2013 年度「発達科学への招待」前期　金曜日　1限（8:50～10:20）授業スケジュール

回	月/日	担当者(敬称略)【　】内は教室	
1.	4/12	ガイダンス・講演　澤【B202】	
		奇数クラス【F256】	偶数クラス【F264】
		モジュール A	モジュール A
2.	4/19	丑丸	松岡
3.	4/26	坂本	丑丸
4.	5/10	松岡	吉田
5.	5/17	吉田	坂本
6.	5/24	討論（松岡，丑丸，坂本，吉田）【B202】	
		モジュール B	モジュール B
7.	5/31	目黒	阪本
8.	6/ 7	前田	目黒
9.	6/14	阪本	前田
		モジュール C	モジュール C
10.	6/21	田畑	山本
11.	6/28	白杉	江口（ゲスト講師）
12.	7/ 5	江口（ゲスト講師）	田畑
13.	7/12	山本	白杉
14.	7/19	総合討論準備【F256】	総合討論準備【F264】
15.	7/26	総合討論（全教員）【B202】	

表 2　授業担当者の講義内容

ミニ講演　「発達科学部で学ぶとは？ ―繋がる力・繋げる力―」
　澤　宗則（人間環境学科　社会環境論コース　地域社会論）

モジュール A　発達科学研究の実践性

- 「生きるための知識や技能を育てる教育実践　科学的リテラシーを育成する実践と成果評価」
  　坂本美紀（人間形成学科　心理発達論コース　教育心理学）
- 「フィールドワークへの招待」

丑丸敦史(人間環境学科 自然環境論コース 生態学)

・「ESD の課題と展望」

松岡広路(発達支援論コース 社会教育・生涯学習論)

・「スクールカウンセリングの理論と実際」

吉田圭吾(人間形成学科 心理発達論コース 臨床心理学)

・**[合同討論] モジュール A を振り返って**(丑丸, 松岡, 吉田, 坂本)

モジュール B 発達科学研究の手法

・「ナラティブ・アプローチ」

目黒 強(人間形成学科 子ども発達論コース・学校教育論コース 児童文学)

・「実験・調査結果に客観性を」

阪本雄二(人間環境学科 数理情報環境論コース 数理統計学)

・「スポーツにおける動作(技術)の研究方法 ○○○○から□□□まで」

前田正登(人間行動学科 身体行動論コース スポーツバイオメカニクス)

モジュール C 発達科学研究の学際性

・「学際性とメディア論 環境問題を素材にして」

田畑暁生(人間表現学科 表現文化論コース 社会情報学)

・「茶園の窒素溶脱問題の食環境学的アプローチ」

白杉直子(人間環境学科 生活環境論コース 食環境学)

・「表現を人間の感覚から分析する」

山本道子(人間表現学科 臨床・感性表現論コース 感性心理学)

2. 今年度改善・更新した点

運営委員会として, 本科目を ① 学部導入教育, ② 授業内容の理解の深化と発展的学習, ③ 学生主体の参加型授業の場として実質的に機能させるために, 1)～4)の改善を行った。

1) 授業担当者によるテキスト「発達科学への招待 講義ノート」(神戸大学発達科学部「発達科学への招待」運営委員会編, 神戸大学発達科学部発行, 編集協力ならびに印刷 かもがわ出版, 1,200 円, 2013 年 4 月)の編集・発行。テキストは, 授業のスライドや説明文を載せた上, 書き込みができるワークブック形式をとっている。i.予習, ii.授業中の資料やノートとしての活用, iii.復習ならびに授業中に教員が話せなかった内容の補充, iv.将来, 本講義の担当を外れた教員の記述箇所も参考書として使用が可能になるように作成した。入学初年度としてはかなり専門的な内容が盛り込まれている。特に, 本学部の多様な分野の研究者が共存する特色を生かして, モジュール B で中心に据える「研究手法」を, 他のモジュールの教員の章にも意識的に盛り込むようにした。本学部では学部時代から学生が, 研究目的だけでなく, 研究手法にも関心を持つように工夫した。

2) 委員による全担当教員の授業の視聴(ピアレビュー)。ほぼ毎回の授業のほか, ガイダンスや討論会には複数の教員が参加したものもあった。

3) 一昨年度から活用している神戸大学教務システム「うりぼーネットの掲示板」による授業情報の発信をさらに活発に進めた。同掲示板は学生自らアクセスしないと情報を得られないことから, 参加型学習であることの意識を高める工夫としても活用した。授業の予告・授業後の補足情報の提供・討論会準備の呼びかけ・討論会に対する教員の講評・レポート課題と提出要件・レポート提出後の教員の講評など, 導入教育の一環としての伝達事項や, 授業運営を潤滑に進めるための連絡に用いた。主な掲示事例を以下に示す。

① レポート課題と提出要件の掲示。口頭では一切伝えず, 各自が確認するように促した。数名を残して, ほとんどが確認していることが人数から把握できた。自発的に授業情報を獲得する姿勢を身につけることで, 最終回の総合討論会に向けて, 学生参加型の授業づくりの下地を作ることを目的とした。

② 授業の補足。阪本雄二准教授の統計学の講義では, 許可を得て講義を録音し, TA が原稿に記録した。統計学は今後も重要になる旨を伝えると共に, PDF ファイルとしてダウンロードできるように掲示した。8 月中旬の時点で, 全体の 2/3 以上の学生がダウンロードまで行っていた。

③ ゲスト講師の 江口至洋氏（理化学研究所（神戸研究所）の HPCI（High Performance Computing Infrastructure）計算生命科学推進プログラムの副プログラム・ディレクター）の紹介を行った。6 月の暑くなる時期に学外のゲスト講師に授業して頂くことは，学生にとって新鮮で刺激的な授業となった。

④ 最終回の学生主体の「総合討論」とその前の週の「総合討論準備」の司会者や書記，マイク係などを掲示板で募集した。委員長に直接メールで応募するように伝えた。今年度は 1 名より連絡があった。それがきっかけになり，当日も含め，協力を申し出る学生が相当数出てきた。話題提供のパネリスト 4 名も授業中に立候補して，学生主体のシンポジウムが展開された。

⑤ レポート採点後の「2013 年度－「発達科学への招待」レポート講評」を掲載した。前田正登教授，坂本美紀准教授，山本道子講師の講評も掲載した。後期の 10 月 1 日から 2014 年 4 月初旬の掲載になったが，それでも数十名による閲覧が見られた。次年度は，予め，レポートの書き方の注意点を掲示するか，あるいは，講評の時期を早めに予告して，周知することが望ましい。

4) 講義の一部や討論会などの記録を録音などに残した。必要なものについて，大学院生のティーチングアシスタント（TA）によるテープ起こしを行った。

3. 今後の課題

新入生全員が一堂に会して，講義を受けたり，協力しあって，シンポジウムを開催するのは，他学部にはない，特色ある授業と言える。教員は，学生が互いに刺激し合い，持てる能力を発揮する場として本講義を運営していくことが望ましい。そのためには，受け身の授業の中に質疑応答の時間を盛り込んだり，学生参加型の時間をもう少し増やしてもよいかもしれない。事実，従来履修した学生からは，そのような要望が出されることがあった。本講義は，できるだけ多くの教員に関わってもらうことが望ましい。教員が担当を外れた場合の後任を決めるのが次の重要な仕事である。

（「発達科学への招待」運営委員会委員長　白杉直子）

(2) ヒューマン・コミュニティ創成研究

本授業は教員と学生の双方向性を重視した授業とすることを趣旨としてきた。近年，アクティブ・ラーニングが注目されるようになり，本授業がよりどころの一つとしてきた趣旨が“公認”されたかたちになった。

本年度も 3 回のワークショップを組み込み，さらに昨年度より受講生同士のディスカッションの時間を増加させた。授業内容の骨格は昨年度を踏襲したが，本年度には四つのテーマを入れ替えた。新たに入れたテーマは，津田准教授による「何のために障害共生を学ぶのか？」，佐藤准教授による「女性科学者を語る」，長ヶ原准教授による「なぜ『マスターズ甲子園』なのか？」，そして朴木による「何のためにジェンダーを学ぶのか？」である。

人間発達環境学研究科で学ぶ学生に入学当初より，研究の方法論とともに将来目標を再確認してほしいと願ったためである。例年，本研究科の特色である学際研究の意義と課題を考えるため，浅野教授と他の教員または学生のディスカッションを組み入れていたが，「研究科長の話を聞きたい」と言う学生の要望を活かして，本年度には，岡田研究科長と本授業の世話人である朴木との対談に替えた。実際には，毎年，担当していただいた浅野教授と昨年度，一昨年度に浅野教授とのディスカッサント役を務めた博士前期課程 2 年生の加戸さんも授業参加し，討論を深めていただいた。授業担当ではない教員や学生が「飛び入り」のかたちで，授業参画することは本授業では珍しくないが，研究科長も交えて，学生各々が意見を交わしたことは有意義であった。この場を借りて，浅野教授と加戸さんに御礼を申し上げたい。実際の授業スケジュールは以下である。

（1）4／10　ガイダンス
　　授業の主旨，研究科の設立経緯，HC センター，あーちについて
　　「ヒューマン・コミュニティ創成研究」への期待（コーディネーター全員）
（2）4／17 「交流ワークショップ I（大学院に期待すること）津田／朴木
（3）4／24 「ESD の課題と展望」（松岡広路）
（4）5／ 8 「市民と科学：サイエンスショップの取り組み」（伊藤真之×田中成典）
　　5／15　 創立記念日
（5）5／22 「何のためにジェンダーを学ぶのか？」（朴木佳緒留）

(6)5／29 「生物多様性とサステナビリティ」(高見泰興)
(7)6／ 5 「ダンスは何のためにあるか？」(関)
(8)6／12 「音楽は何のためにあるのか？」(若尾裕×吉田圭吾)
(9)6／19 「何のために障害共生を学ぶのか？」(津田英二)
(10)6／26 「女性科学者を語る」(佐藤晴実)
(11)7／ 3 「なぜ『マスターズ甲子園』なのか？」(長ヶ原誠)
(12)7／10 「ヒューマン・コミュニティ創成と学際的研究」(岡田章宏×朴木)
(13)7／17 交流ワークショップⅡ(院生ディスカッション:HC 創成の意味は？)(津田・関)
(14)7／24 交流ワークショップⅢ(まとめのディスカッション)津田／朴木
(15)7／31 まとめ

受講生の感想は以下である。

・「ダンスは何のためにあるか？」について

「(前略)世界で貧困や医療不足があることは知っていたけれど，自分たちの周りのことではないので，日常生活の中では感じなかったです。今回，「国境なき医師団」のPBを見て，「国の境目が生死の境目であってはならない」という言葉に感動しました。支援される必要がある人々に，現地に行って行う支援と音楽やダンスがさまざまな形で(行う)支援は，すべて支援者の心とつながっていると思います。そしてアーツで伝える力は国境がないと感じました。(後略)」(留学生SI)

「関先生の「国境なき医師団」のプロモーションビデオのダンスに圧倒されました。生半可な言葉では表現できない美しさと緊張感と迫力にあふれていました。(中略)人間の乳児も触れられることによって成長発達が促進されます。身体性を重要視することは現在の私の研究課題の一部である愛着や養護性にとっても重要になり，つながるものがあるように感じました。私自身の身体性についても，もっと目を向けていこうと思います」(TM)

・「女性科学者を語る」について

「理系にすすむことや大学院に進学することを認めてくれた先生の周りの人たちは，とても理解があるように感じました。私は女だらけの保育の世界で学部を過ごしました。(中略)男女が平等になることをうたわれてはいますが，何より実際のモデルとして存在することは学生の視野の広がりに大きな意味をもつように感じます。世間一般の当たり前にとらわれることなく，私自身もしたいことに積極的に取り組んでいきたいと思います。」(FR)

「(前略)女性としてすばらしい仕事と生活両立できて，うらやましくて尊敬してます。子育てしながら研究も進んでいて，しかもいろんな賞をいただくことは非常にすばらしいです。高学歴の女性は結婚難しいとよく言われ，今の研究室の女子も全員，彼氏いない状態です。どうでもいいと考えていたのですが，佐藤先生のことを見て，もっと頑張らなくてはと思いました。」(留学生O)

本授業は，毎回，受講生に授業感想を書き，提出するよう求めている。その感想によれば，授業は毎回，「おおむね好評」とうけとめることができる。ところが，本年度は研究科改組とともに専攻共通科目が設置されたため，そのあおりを受けて受講生が減少した。研究科共通科目と専攻共通科目の内容的検討が必要と思われる。

本授業のコーディネーターは，関講師，津田准教授，朴木が務めた。

(「ヒューマン・コミュニティ創成研究」世話人 朴木佳緒留)

4.1.3. 学術 WEEKS

学術 WEEKS はその活動を 2008 年にまで遡り，正課外活動の充実による大学院教育の実質化及び人間発達環境学研究科における国際交流の促進を目標にこれまで活動を行ってきた。学術 WEEKS2013 では 10 件の企画を開催することができ，参加者数 1,059 名，外国人招聘者数 21 名(3 カ国)と例年同様，盛大なものとなった。本年度はこれまでの経験と実績を継承し，多彩で新奇性に富んだ学術・国際交流の場を提供すべく，多様な研究

領域に対して支援を行った。また，学術 WEEKS2013 レセプションでは，本年度は新しい試みとして各企画の報告を学生代表者に紹介してもらい，研究科内の学生による学際交流の場を設けた。このレセプションでは，学生の他分野への興味を刺激し，本研究科ならではの場を提供することができた。レセプションの発表から，学生（大学院・学部）が，学術 WEEKS を仲間や教員とともに自らの知的好奇心を大きく広げ，それぞれの学問分野への関心と理解を深める契機としていることが見て取ることができた。また，多くの企画について，学生が立案・運営・実施に深く関わっており，その企画実施のよって正課活動では得られない知識や技能を身につけていた。これもまた学術 WEEKS の大きな成果の一つと言える。

学術 WEEKS2013 の各企画の具体的概要と成果は次の表のとおりである。

	企画タイトル	企画教員等	開催日	開催場所	参加者数
1.	「Site Specific Dance Performance #3【春の祭典】（初演 100 周年記念）	関 典子	10 月 20 日 ＊追加公演 10 月 27 日	兵庫県立美術館 屋外南大階段，神戸ビエンナーレ メリケンパーク会場	542
2.	健康・スポーツ科学分野・国際ジョイントセミナー －西オーストラリア大学と神戸大学－	近藤徳彦	10 月 27-28 日	人間発達環境学研究科	150
3.	シンポジウム 「データサイエンスの広がりと統計モデリング」	阪本雄二	11 月 7 日	人間発達環境学研究科	20
4.	海外で研究を発表する	近江戸伸子	11 月 15 日	人間発達環境学研究科	25
5.	記憶とアイデンティティの深層へ －ライフヒストリーの知－	森岡正芳	11 月 22-23 日	人間発達環境学研究科	37
6.	高校生・私の科学研究発表会 －理科研究！発表したい人集まれ！－	蛯名邦禎 伊藤真之 田中成典	11 月 23 日	人間発達環境学研究科	108
7.	応用「発達科学」としての教育学 教育保育のさらなる科学化をめざして	北野幸子	12 月 14 日	人間発達環境学研究科	131
8.	2013 年度日韓交流学術シンポジウム企画案「発達障害者への学習支援」	津田英二	12 月 21 日	人間発達環境学研究科	32
9.	子ども家庭福祉をめざした子育て支援と社会的性役割観	伊藤 篤 加藤佳子	1 月 28 日 2 月 4 日	人間発達環境学研究科	43
10.	神戸大学発達科学部地域連携アートプロジェクト 音楽棟リニューアルオープン記念イヴェント	田村文生	2 月 9 日	人間発達環境学研究科	85
	学術 WEEKS2012 レセプション	研究科長	12 月 19 日	人間発達環境学研究科	50

（学術 WEEKS2013 ワーキンググループ委員長　丑丸敦史）

4.1.4. 教職教育

(1)「教職実践演習（幼小）」の開講

発達科学部教務委員会が責任母体となって，「教職実践演習（幼小）」を後期に開講した。なお，実施の世話担当教員は人間形成学科の 3 コースが持ちまわる（平成 25 年度：教育科学論⇒子ども発達論⇒心理発達論）。平成 25 年度のシラバスは以下のとおりある。平成 25 年度は金曜 5（ないし 5・6）限に実施したが，平成 26 年度に関しては附属校園と再度調整することとなった。

平成 25 年度　「教職実践演習（幼小）」シラバス

世話担当教員：教育科学論コース／吉永・川地准教授ほか

TA：MC1 院生 3 名

毎回の持参物：履修カルテ、教育実習ノート、ポートフォリオ、印鑑、など

回・セッション	平成 25 年度の日程	テーマ	担当教員と人数	授業構成案
1	10 月 4 日	オリエンテーションとグループ編成	学部教員 附属幼稚園、1 名 （岸本佳子副園長） 附属小学校、1 名 （梅本宜嗣主幹）	
2・3 Ⅰ	10 月 11 日 5＆6 限 2 コマ続き ＊＊＊	教職の使命感や責任感、教育的愛情等	附属小学校、1 名 （花畑一吉副校長）	1h：2h：講話、グループディスカッション等 ＊＊ ※感想・レポートの提出
4・5 Ⅱ	11 月 1 日 5＆6 限 2 コマ続き ＊＊＊	社会性や対人関係能力	附属小学校、1 名 （梅本宜嗣 主幹教諭）	1h：2h：講話、グループディスカッション等 ＊＊ ※感想・レポートの提出
6～8 Ⅲ *11/8 休講	11 月 15 日 22 日 29 日	幼児理解、学級経営等 保育内容等の指導力 まとめ	附属幼稚園、1 名 （岸本佳子副園長）	1h：2h：3h：講話、グループディスカッション等＊＊ ※感想・レポートの提出
9～11 Ⅳ	12 月 13 日 5＆6 限 2 コマ続き ＊＊＊ 20 日	児童理解、学級経営等 教科内容等の指導力 まとめ	附属小学校、1 名 （二井見勝 主幹教諭）	1h：2h：3h：講話、グループディスカッション等＊＊ ※感想・レポートの提出
12 Ⅴ	1 月 10 日	特別支援教育について	附属特支学校、2 名 （佐藤知子教諭、 殿垣亮子教諭）	演習等＊＊ 「動きやすい服装で（スカートは不可）」 ※感想・レポートの提出
13・14 ・15 *1/17・ 31 休講	1 月 24 日 2 月 7 日 5＆6 限 2 コマ続き ＊＊＊	「まとめレポート」に基づく総括ディスカッション	学部教員	※感想・レポート等の集積による省察

＊　11/8 は「六甲祭」準備、1/17 は「センター試験」準備のために全学休講。

＊＊　グループディスカッション、ロールプレイ、模擬授業、事例研究などを行う。

＊＊＊　10/18、10/25、12/6、1/31 は都合により休講。かわりに、10/11、11/1、12/13、2/7 は「5&6 限の二コマ続き」で実施。

(2) 教育実習及び反省会

教育実習の履修者（単位認定者）数は，幼稚園 12(12)，小学校 40(40)，中学校 67(66)，高等学校 34(33)，特別支援学校 13(13)，であった。

なお，平成 26 年 3 月 10 日に「教育実習反省会」を開催した。協議の結果，教育実習の「評価票」を成績評価の「5 段階区分」に揃えることとした。また，大学での関連科目の中に「指導案の書き方」等を入れ込んでほしい，実習生の批評授業に大学側からもっと参加してほしい（特に附属中等学校），等の要望が出された。大学と附属校園との連携強化の工夫として，附属校園の公開研究会や参加可能な研修会などの「年度一覧」を学生・教員に配布し案内する等の案が相談された。

(3) 教員免許状の取得状況及び就職情報

平成 25 年度の教員免許状の取得状況（一括申請分のみ）は，発達科学部・人間発達環境学研究科 217(38)であった（カッコ内は専修免許状）。ちなみに，文学部・人文学研究科　71(19)，国際文化学部・国際文化学研究科

19(4), 経済学部 2(0), 理学部・理学研究科 93(35), 農学部 19(0), 海事科学部 1(1)であった（合計 422(97)）。

平成 25 年度の就職状況に関しては，学部卒業者 301 名中の 34 名（12%）が教員（非常勤を含む）であった。また，研究科修了者 93 名中の 16 名（17%）が教員（大学等，非常勤を含む）であった。

（教務委員会委員長　渡部昭男）

4.1.5. 学芸員養成課程

本年度，博物館学芸員資格専門委員会を 4 回の委員会を開催し，下記の実習を実施した。

(1) 平成 25 年度博物館実習説明会と各実習の実施

① 全体事前指導（7 月 12 日）

3年生を対象として，博物館実習全体のカリキュラムについての説明を行った。

② 見学実習（夏期）

3年生を対象として，博物館・美術館・科学館等での見学実習を実施した。

③ 学内施設における本実習

1) 第1回　25 年 9 月 28 日，10 月 1 日～3 日　（履修者数 11 名）

学内実習施設「あーち」において，講師に脇谷紘先生（版画家・舞台美術家）をお招きし，展示テーマ「バビロン広場の砂浜にて」のもとに，社会福祉法人たんぽぽとの連携で実施した。

2) 第 2 回　26 年 1 月 31 日，2 月 3 日～7 日（履修者数 2 名）

学内施設「アゴラ」において，講師岸本吉弘准教授が担当し，田中美佳個展『leaves@collage』を通じて展示実習を行った。

④ 全体・館園事後指導（11 月 29 日）

4年生を対象として，博物館実習全体の総括を行った。

⑤ 館園実習前事前指導（1 月 24 日）

3年生を対象として，学外実習先の説明ならびに館園実習に向けての諸注意を行った。

(2) 平成 25 年度の博物館実習単位認定

4年生 24 名に対して博物館実習の単位認定を行った。

(3) 本実習に関わる予算

次年度の学内実習に関わる諸経費の確保のため，予算委員会に本委員会経費として要求を行った。

(4) 今後の課題

① 平成 17 年度より始まった「あーち」での本実習は，学内外の教員や講師の協力を得ることによって，自然科学系・芸術系・人文科学系の各分野に関わる実習を実施してきた。実習内容が充実する一方で，近年，履修者数の著しい増減が顕著な傾向となってきた。本年度は履修者数が減少したため，第一回学内実習を例年通り「あーち」で実施したが，第二回目は学内施設「アゴラ」での実施を試みることとなった。来年度は逆に実習生の増加が見込まれるため，今後も履修者数に即した実習内容の企画と運営が重要と考えられる。

② 学芸員課程の見直しにより，平成 24 年度より新カリキュラムのもとで実習が行われている。そのため，発達科学部の現在の実習カリキュラムに即して，従来の博物館実習日誌（全学共通形式）を柔軟に運用していくことが必要と考えられる。

（博物館学芸員資格専門委員会委員長　平芳裕子）

4.1.6. ESD サブコース

ESD（Education for Sustainable Development）をテーマとするこのコースは，2008 年度に 3 学部（発達・文・経済）の取り組みから開講した。2011 年度は農学部，2012 年度は国際文化学部・工学部，2013 年度は医学部保健学科と参画学部が拡大し，7 学部での運営体制となった。昨年度に引き続き（財）三菱 UFJ 環境財団からの支援を受け，寄付講座（冠講座）としての開講ともなった。また，コースの運営組織が全学教務委員会に属する「ESD コース専門委員会」となった。

(1) 履修状況

2013 年度の履修者は下表のとおりである。ESD プラクティショナー認証者は，発達科学部・経済学部・農学部から 7 名（累計 32 名）となった。

授業科目区分	授業科目名	受講学生数 (2012 年)
教養科目	ＥＳＤ基礎－持続可能な社会づくり）	151
	実践農学入門	54
	総合科目Ⅰ（ＥＳＤ論）	50
フィールド演習科目	ＥＳＤ演習Ⅰ（環境発達学）	10
	ＥＳＤ演習Ⅰ（環境人文学）	3
	ＥＳＤ演習Ⅰ（環境経済学）	15
	ＥＳＤ演習Ⅰ（兵庫県農業環境論）	53
	ＥＳＤ演習Ⅰ（初期体験実習）	168
	ＥＳＤ演習Ⅱ（環境発達学）	10
	ＥＳＤ演習Ⅱ（環境人文学）	2
	ＥＳＤ演習Ⅱ（環境経済学）	16
	ＥＳＤ演習Ⅱ（実践農学）	30
	ＥＳＤ演習Ⅱ（IPW 統合演習）	155

(2) 授業の実施概要

ESD 基礎及び ESD 論では，昨年度に引き続き三菱 UFJ 環境財団からの支援を受け，国連大学高等研究所 ESD 担当プログラム・ディレクターや東日本大震災で被害を受けた陸前高田市より八木澤商店会長など，著名な講師を招聘した授業を組み込んだ。また，ESD 論では豊島産廃事件の現場調査，ハンセン病療養所でのボランティア活動や篠山市営農組合等での活動等を組み込み座学とフィールドワークとを連動させた授業を行うことができた。

ESD 演習Ⅰ・Ⅱ（環境発達学）では，サテライト施設「あーち」の活動と少子高齢化や農家の後継ぎ問題など様々な課題を抱える地方都市南あわじ市の持続可能性について検討するフィールドワークを中心とした授業を実施した。

(3) 学生の学び・評価

ESD 基礎では，ガイダンスに 500 人を超える学生が来るようになった。フィールドワークを含む授業のため抽選で 150 人に絞っている。ESD 論は総合科目となっているため抽選にまではなっていないが，次年度には総合教養に移行する計画のため，同様になる可能性がある。

ESD 基礎・ESD 論ともに，毎回の授業終了時に授業受けての「気づき」と「感想・意見」を記入するシートを使って学生の学びや評価を確認している。シートの記述から，「普段何も考えずに生活していること」，「今まで自分の興味あるもの以外は見えてこなかった」，「自分がいかに物事の表面しかみていなかったのか」，「自分の身の回りの当たり前のことに今まで気がつかず，疑問をいだかなかった自分に気づいた」，「自分の中に新たな視野がひろがった」など，自分自身への気づきがさまざまに述べられている。ESD 基礎では小グループでテーマを持って実際にフィールドに出かけ，地域を歩き，グループで検討する過程で様々なことがらに気づいてくるが，振り返りを通してより意識的に自分自身への「気づき」となっている。また，「フィールドワークと言う，自分の目を使って情報を集めるという作業は，話を聞くよりもずっと楽しい，楽しいからこそ力になると」，「自分たちが主体的に考えて動く授業はあまりないので，大変だったけれど楽しかった」との記述がある。ここで述べられているのは，表面的で浅い楽しさでは

なく価値あることに到達することの楽しさである。アクションリサーチ入門としてのフィールドワークを中心とした学習が学生にとって魅力を持って受け入れられていると考えている。

（ESD コース専門委員会委員 高尾千秋）

4.1.7. ゲスト・スピーカー及びティーチング・アシスタント

(1) ゲスト・スピーカー

授業科目の内容をより効果的に学生に教授できるよう，半期 15 コマの授業中に 1 回ないし 2 回程度，ゲスト・スピーカーとして人材を登用している。平成 25 年度は，前期 35 件，後期 45 件の計 80 件が実施された（平成 25 年度配分額 80 万円）。なお，教務学生係に実施報告書が保管されている。

(2) ティーチング・アシスタント

優秀な大学院学生に対し，教育補助業務を行わせ，学部教育におけるきめ細かい指導の実現や大学院学生が将来教員・研究者になるためのトレーニングの機会を提供し，これに対する手当支給により，大学院学生の処遇の改善の一助とするために，ティーチング・アシスタント制度を設けている（平成 25 年度配分額約 530 万円）。なお，総務係に出勤簿や実施報告書（学生用・教員用）が保管されている。

（教務委員会委員長 渡部昭男）

4.1.8. グローバル人材育成推進事業

2012 年度後半に採択されたグローバル人材育成推進事業は，その事業をとおして，国際社会の持続可能な発展を可能にする「問題発見型リーダーシップ」を発揮できるグローバル人材の育成を目標としている。発達科学部では，国際的な視野で，開発・人権・貧困・平和・福祉・倫理・健康等に関わるグローバルな諸問題を発見したうえでグローバルな協力体制を先導する力量をもち，かつ日本社会に対するアイデンティティを有する人材，具体的には，グローバルな視点で課題をとらえ，種々の活動を介して協働的・主体的な学びを組織できる教育力を有し，異文化を尊重するマインドを持つ教育者・ファシリテーター等の育成をめざしている。

2013 年度は年度当初からの取組となり，国際交流サポートルーム（COTIE:Communication Office toward International Exchange）における英語力を含めた国際コミュニケーションのスキルアップ・留学への動機づけの取り組みをはじめとして，海外へのスタディ・ツアー，学術 WEEKS での海外研究者の招聘，学部共通科目「異文化理解」（グローバル専門科目）の開講など1年間を通した取り組みを展開することができた。 こうした機会を通じて，1.3.1.1.でふれた同窓会による「紫陽会グローバル人材育成支援基金」による支援を得た 14 名の学生を含め海外での取り組み・活動を行う学生が増え始めている。

以下に 2013 年 4 月から 2014 年 3 月までの国際交流サポートルームの活動を列記する。

① 2013 年 4 月より 2013 年 3 月末まで
「オンラインディスカッションセミナー定期開催」 週 2～3 回(月・水・金曜日中心)，1回 60 分。
昼休み時間に，発達の学部生・院生を中心に科目履修生，教職員を交えて自由参加で開催。経済学部・法学部・工学部・国際文化学部学生の参加事例あり。2013 年度の実施済セミナーは約 100 回。参加学生数は延べ約 300 人。

② 2013 年 6 月 14，21，28 日および 7 月 5 日(すべて金曜日)
「TOEIC650 点対策講座」 受講学生(選抜) 10 名程度

③ 2013 年 11 月 15，22，29 日および 12 月 6 日(すべて金曜日)
「TOEIC730 点対策講座」 受講学生(選抜) 10 名程度

④ 2014 年 1 月～3 月末
「TOEIC730 点対策 E ラーニング 3 ケ月コース配信 受講学生(選抜) 12 名

⑤ COTIE ゼミナール開催 (原則 毎週金曜日午後 13 時～15 時)
交換留学を希望する学生たち主導の自主的な勉強会 TOEFL 対策，IELTS 対策，留学相談会実施

⑥ 全日本大学生マーケティングコンテスト(アシックスジャパン協賛)に国文・経済・発達学生で編成の 1 グループで参加： 結果＞英語プレゼンテーションスライド審査で落選

⑦ 学生への個別相談実施（不定期，予約優先）英語学習法に関すること，留学計画に関すること，海外インターンシップに関すること，奨学金に関することなど。
⑧ 各種奨学金情報および奨学金付の留学公募情報の提供

（神戸大学グローバル教育推進委員会委員　青木茂樹）

4.2. 各学科等の教育

4.2.1. 人間形成学科

(1) 運営

人間形成学科は，心理発達論コース，子ども発達論コース，教育科学論コース，学校教育論コースにより構成されている。日常的な運営は，主にコース単位で実施している。学科全体の予算，教育，入試等の議案やコース間の役割分担等については，学科長とコース主任による学科運営会議において適宜連絡・協議し，調整を図りながら運営してきた。

(2) 予算

予算は大学院を単位として配分され，それぞれの対応するコースの運営に当てられている。ただし，学校教育論コースについては，子ども発達論と教育科学論より若干の共通経費を捻出し，運営をしている。なお，学科共通経費は計上していない。

(3) 入試

一般入試，社会人入試，第 3 年次編入学試験ともに例年通り行われ，実施運営においてはとくに問題はなかった。ただし，次年度以降の第 3 年次編入学試験及び社会人入試の実施に関する課題が議論されたが，全学の入試改革の動向と歩調を合わせる必要があり，継続審議となった。

(4) 教育

年度当初に人間形成学科の新入生ガイダンスを実施した。また，2 年次からの所属コースの振り分けについては，1 年生の必修科目である授業の折に必要な情報を適宜アナウンスすると同時に，その時点でのコース希望調査を実施したりして周知と準備を徹底した。コース振り分けは，2014 年 2 月 14 日に実施され，全員の所属が確定した。3 年生のゼミ分けでは，各指導教員が3回以上，既ゼミ生と共にゼミでの教育研究活動について面談をする機会を設定し，充実を図った。

教員の授業改善の試みとしては，「道徳教育論」「心理学研究法 1」においてピアレビューを実施した。また，「道徳教育論」「授業システム論」「教育方法学」「情報化社会と教育」「自然教育論」「理科教育方法論」「幼児人間関係指導法」「発達障害心理学2」等の授業にゲスト・スピーカーを招き，講義内容の充実を図った。

卒業研究については，コース単位で構想発表会ないしは中間発表会，最終試験としての最終発表会が実施された。教育科学論コースでは，例年通り，卒業研究において副査制度を導入し，卒業研究の質の保証に取り組んできた。

教育的な課外活動としては，2013 年 12 月 11 日及び 13 日に，子ども発達論コース2年生企画によるシンポジウム「子どもの表現教育・そして子どもの心に語りかける仕事」が開催された。また，2013 年 12 月 14 日には，教育科学論，子ども発達論，心理発達論の三コースの教員が共同して，公開シンポジウム「発達研究と現場実践との共創（コラボレーション）―「子どもの心と発達」をつかむ―」を企画・開催している。さらに，学校教育論コースでは，2013 年 9 月 21-22 日に西播磨天文台において，天体観測体験等の知識と技能の習得を目指した合宿研修を実施した。

個別の教育活動としては，子ども発達論コースにおいては，現文部科学省・厚生労働省諮問機関員，教育委員会指導主事，市福祉課担当者と学生との交流機会等が企画・提供された。また，学生主導による幼稚園教諭，保育士採用試験体験報告会や教育実習報告会，小学校教員養成対策講座等が教員の支援により適宜実施された。教職をめざす学生の勉強会とともに，指導教員に同行しての幼稚園・保育所・小学校における園・校内研修への参加や見学も昨年に引き続き実施された。その中で特筆すべきものとしては，舞鶴市「プロジェクト型保育推進授業」の支援を受け，現地での公開保育，研修会，講演会等への参加機会の提供を挙げることができる。さらに，グローバルキャリア人材育成事業の一環としての講演会等が実施されている。これらは，いずれも学部生・院生の共同

による実施された活動であった。

(5) 広報

オープンキャンパスにおいて，学科及び各コースの紹介に努めた。4 つのコースはそれぞれに工夫を凝らして，模擬授業，ワークショップ，展示，在学生による説明・進学相談など多彩な取り組みを実施した。

（人間形成学科長 稲垣成哲）

4.2.2. 人間行動学科

(1) 組織・運営

人間行動学科の教員は，昨年度に 2 名が定年退官し 18 名である。構成は，教授 10 名，准教授 8 名である。その内 4 名が前年度での退官・退職等で欠員であったが，今年度 10 月に新たに 3 名（准教授 1 名，講師 2 名）が着任した。次年度新たに 1 名（准教授）が着任する。教育上の履修コースは，健康発達論（教員 5 名），行動発達論（教員 5 名），身体行動論（教員 8 名）の3つのコースから成る。学科定員は 1 学年 50 名である。入試は，一般選抜入試（前期日程：36 名），社会人特別選抜入試（2 名），3年次編入学入試（学部として若干名），およびAO入試身体運動受験（12 名）によって選抜される。

学科の運営は，学科運営会議と学科会議により行われる。学科運営会議は学科長と各履修コース主任の計 4 名で構成される。学科会議は 18 名の学科構成員で構成される。学科運営会議は学科長が招集し，人事および学科に係る諸課題について審議する。学科会議は学科に係るすべての事項を審議し，学科としての意思決定をする。本年度は6回の学科会議が開催された。主な審議内容は，オープンキャンパスについて，学科社会人入試合否判定について，AO 入試第一次選考学科合否判定について，学科DP案について，学科共通科目の変更について，単位の実質化（CAP 制）について，次年度入学試験日程（案）について，AO 入試最終合否判定，であった。

(2) 予算

予算は大学院の専攻単位で配分されるので，学科としての予算配分はない。学科の予算に関しては，大学院人間発達専攻からだ系の予算の記載を参照願いたい。

(3) 入試

本学科の学生は，一般選抜前期日程入試，社会人特別選抜入試，3年次編入学入試およびアドミッション・オフィス（AO）入試により選抜される。一般選抜前期日程入試は大学入試センター試験（5 科目 7 教科）と神戸大学の個別学力検査試験により，社会人特別選抜入試は外国語，面接・口述試験により，3年次編入学入試（行動発達論コースと身体行動論コースが実施）は外国語，専門科目，面接・口述試験により選抜される。

AO 入試の主旨は次のとおりである。人間行動学科のキーワードは身体・行動（運動）・健康・発達で，これらのキーワードと人間の発達について教育・研究を行っている。このようなキーワードに係わる能力は，いわゆる主要入試科目の筆記試験だけでは十分評価できない。そこで本学科では AO 入試を実施し，人間の行動・運動・健康・スポーツに興味・関心があり，且つリーダーシップと基本的な学力を有する学生を選抜することを心掛けている。AO 入試では，第一次選考（書類審査，身体運動に関する能力の検査1（筆記）），第二次選考（身体運動に関する能力の検査2（実技，個人・集団面接））およびセンター試験を課し，総合して合否を判定している。今年度の倍率は 4.5 倍であった。前期日程入試の倍率は 3.6 倍であった。

(4) 教育

人間行動学科の教育・指導体制は次の如くである。1 年次は全学共通授業科目，学部共通科目および学科共通科目を受講し，発達科学部人間行動学科の学生としての基礎を学ぶ。2 年次は「健康発達論コース」，「行動発達論コース」，「身体行動論コース」のいずれかの履修コースに所属し，学科共通専門およびコース専門科目を学ぶ。3・4 年次は各履修コースの中の教官にゼミ配属され，興味・関心のあるテーマについて専門的知識，調査・研究方法の習得および卒業研究を進めることになる。すなわち，1・2 年次においては，人間行動学科の教育研究内容を総合的に理解させる。2・3 年次生になると専門とする履修コースの学問を深める。3・4 年次生になると専門科目に演習および実験・実習科目が加わり，より専門的な教育研究へと進む。そして 4 年次になると卒業研究を中心に勉学を深めていくカリキュラム体制である。

各学年における学生指導は，1 年次生は学科長が，2年次生はコース主任が，3・4 年次生はゼミ教員が中心と

なって指導にあたっている。学生の教育研究活動が円滑かつ効果的に進むよう，下記の行事を実施している。

● 新入生研修会

入学時に実施したアンケート調査結果をまとめると，今年度の新入生が

◎人間行動学科で学びたいことは，

人間の行動について(3)，スポーツについて(6)，運動・スポーツの楽しみ(3)，スポーツ科学関係(3)，スポーツ心理学(9)，スポーツ医学，筋肉のしくみ，スポーツマネジメント，スポーツが社会にもたらす影響スポーツバイオメカにクス(4)，スポーツ工学，運動生理学，効率の良いトレーニング方法，スポーツの細かい技術論，効率的な身体能力の向上方法，身体の発達(2)，長距離のこと，人間の心理と行動がどのようになっているか学ぶ，専門的にはまだ決まっていないが，人間の心理等について多角的に学びたい，スポーツの理論とメカニズム，そして，身体と心の関係について学びたいです，人間について，成長と心の関係，いろんな年齢，価値観がある中で，生理学・心理学・社会学まど様々な視点から“人間の行動”の面から共通する部分を抜き出し，学んでいきたい，人の一生にかかわること，理系だったので文系に力を入れ，視野を広げたい，自分の体の動きを研究したい，そして部活動に活かしたい，幼少期の運動遊びと将来の運動能力のつながり，ケガしにくい体づくり，人間の身体の健康について，　全体的に見ると，新入生の学びたいことと人間行動学科の教育研究内容には大きなズレはないように思われる。

◎大学生活でやりたいことは，

いろんな人，もの，ことと触れ合って，最も客観的な視点から物事をとらえられるようになりたい。たくさんの分野を経験していきたい。専門的な知識とともに様々な語学を学び海外でも活躍できるようにする。勉強，部活，いろいろ頑張りたい(10)。部活・勉強とバイトの両立(6)，部活，海外留学(2)，自転車乗りたい，スポーツを極める(7)，ボランティア(2)，プレゼン能力，英語力を高めたい，できるものぜんぶ，出来るだけ沢山の人と知り合い，対話する。恋と青春，何事にも積極的に行動していきたい，教員免許を取る(2)，知識を増やすこと，野球を頑張りたい。また，知識をしっかり深めて人の役に立てる人になりたい。研究に熱心に打ち込み，部活動に励みたい。たくさんのことに挑戦したい，何事も一人ですることばかりなので，勉強をはじめ人として成長したい。Enjoy，将棋の全国優勝，六甲山へ行きたい，陸上競技で今度こそ全国ベスト8！，サークルや部活に参加して友好関係を広める，いろいろなつながりを大切にしたい。

◎現時点での卒業後の進路希望は，

スポーツトレーナー(5)，スポーツ企業(5)，アシックス(2)，スポーツに係わるメディア系(5)，スポーツ関係の仕事(2)，日本バレーボール協会，子どもの発達支援，国際機関，消防，音楽，スクールカウンセラー，体育教師(5)，教員(5)，大学職員，研究員，大学院進学(4)，就職(3)，未定(13)

の如くであった。

● 履修コース分け

今年度は 1 年次生の履修コース選択の判断材料の提供として，11 月に各教官を訪問して自由に質問できる機会を設けた。しかし，ほとんどの学生が教員に会い質問することはなかった。2 年次からの履修コース分けは，1 年次の 12 月から翌年 1 月にかけて行なっている。この作業は学科長が行う。各コースへの振り分け定員は，教員数を考慮して健康発達論コースおよび行動発達論コースは 15 名，身体行動論コースは 27 名である。振り分け方法は，学生の希望をできるだけ優先するように心掛けている。まず学生に第一希望から第三希望までの希望調査を行う。その結果，第一希望がいずれのコースの定員内で収まれば，全員第一希望の履修コースに割り振られる。もしいずれかのコースで定員以上の第一希望があった場合は，一定期間を置き再度履修コース希望調査を行う。この履修希望調査を 3 回まで行うことにより，学生の判断で履修コースの振り分けが行われるよう心掛けている。もし 3 回の希望調査で決まらなかった場合は，1年次の学科共通科目の成績を得点化し，得点順に定員まで振り分ける。

このように十分時間をかけ，学生が納得できる履修コースの振り分けに心掛けている。今年度は第 3 回目の希望調査でも履修コースを決定することは出来ず，定員オーバーのコースにおいては成績順によって決定することになった。最終的な履修コース分け結果は，健康発達論コース 9 名，行動発達論コース 15 名，身体行動論コース 27 名となった。

● ゼミ配属

3 年次のゼミ配属の方法は，各履修コースによって若干異なるが，基本的には各ゼミの配属学生数の上限を 3～4 名とし，学生同士で話し合ってゼミ配属を決定している。もし学生間でうまく振り分けられない場合は教員が介入することにより，各教員に満遍なく振り分けられるように努めている。

● 卒業研究指導

卒業研究指導の流れも履修コースにより若干異なるが，基本的には3年次後期からゼミ指導教員のもと，卒業研究テーマが決定される。そして 4 年次 9 月に卒業研究中間発表会にて進捗状況を口頭発表し，教員，院生・学生からの質問・アドバイスを受ける。そして 4 年次 12 月末に卒業論文を提出する。履修コースでは各卒論の主査（指導教員）と副査を決め，審査に入る。年が明け 1 月に，主査・副査のもと，口頭試問が行われる。そして，口頭試問で指摘された箇所を加筆・修正した後，2 月の卒業研究発表会でプレゼンテーションをする。それを受けて教員が最終合否判定をする。以上が卒業研究指導の流れである。

人間行動学科としては，プレゼンテーション能力の指導にも力を入れており，毎年質の高い卒業研究が行われていると評価している。学生にとっても卒業研究のプロセスは，ある課題に対して確かな見方・考え方を習得できる学びとなっている。

● 卒業生の進路

平成 25 年度人間行動学科卒業生の進路の外力は以下の如くである。

大阪ガス，日本生命，阪急電鉄，ハウス食品，NTT 西日本，日立ソリューション，花王，サンゲツ，商社（2），銀行，IT 産業関係，ツルヤゴルフ，ミズノ，ルネサンススポーツ，大学院（3），小中高校教員（6），留学，海外青年協力隊

例年多くは一般企業に就職していく。他に教員・公務員，そして大学院進学である。

(5) 研究

研究活動に関しては，大学院総合人間科学研究科人間発達専攻からだ系講座とこころ系講座の研究に関する記載を参照願いたい。

(6) 広報

人間行動学科の広報活動としては，大学のホームページと学部パンフレットが常時見ることができる広報である。他にはオープンキャンパスと AO 入試のパンフレットを作成している。他に直接的な広報活動ではないが，学生の課外活動での活躍や教員の地域貢献・社会連携の活動も学科の広報に貢献しているものと思われる。

● オープンキャンパス

8 月 7 日と 8 日の 2 日間，学部として高校生への大学説明会（オープンキャンパス）を実施した。オープンキャンパスの内容は，学科の概要・特色の説明，各履修コースの概要・特色の説明，入試の説明，質疑応答，そして各コースの活動内容の展示（測定機器。卒論，研究発表ポスター等）である。今年度は人間行動学科の説明会場には約 250 名の参加者があった。参加者は，大阪・兵庫・京都等近畿圏の高校生が多いが，都道府県としては宮城県から熊本県までの参加者であった。参加者には学科独自のアンケート調査を行い，出身高，学年，希望履修コース等を調査し，オープンキャンパスでのQ＆A情報とともに，広報の資料としている。

● AO 入試リーフレットの作成

AO 入試実施当初から，AO 入試リーフレットと学生募集要項を全国の高校等に郵送し，広報に努めている。送付対象は首都圏以南から選出した高等学校 1000 校程度と予備校である。その成果か AO 入試受験生は関東地区から九州と広い範囲にわたっている。

● 学生の活躍

人間行動学科は体育・スポーツ科学も教育・研究の大きな対象としている分野上，課外活動で活躍している学生も多い。例えば人間行動学科の学生が中心となって活躍している課外活動女子タッチフットボール部は今年度学生リーグ第 2 位，男子ラクロス部が全国学生選手権第 2 位，また陸上競技女子 400mで兵庫県国体選手として出場等，輝かしい成績を残している。

（人間行動学科長 平川和文）

4.2.3. 人間表現学科

(1) 運営

人間表現学科には，表現文化論コース，表現創造論コース，臨床・感性表現論コースの 3 つの履修コースが置かれ，日常的な運営は基本的に各コースごとに行われている。学科全体に関わる総務，教務・学生，会計，入試等の議案，また学部全体に関わる議案については，原則月一回の定例学科会議もしくは必要に応じて適宜開かれる臨時学科会議において検討あるいは審議，決定される。平成 25 年度は，定例学科会議が 9 回，臨時学科会議が 4 回開催された。

臨床・感性表現論コースは当初 5 名の教員により運営されていたが，その後，定年退職による自然減が 1 名（定員削減のため未補充），さらに定年退職および産休・育休（後に自己都合退職）による欠員が 2 名生じたため，実質的に教員 2 名によるコース運営がここ数年間に続いていた。このために，とくに学生の研究指導を中心とする当該コースの運営に大きな支障をきたし，平成 25 年度は，このことへの対応が急務であった。（教育の項参照）

このことを受けて，平成 25 年度は，定年退職および産休・育休による欠員 2 名の補充人事（公募採用）を慎重かつ計画的に進め，欠員のあった「音楽療法」と「感性研究」の各領域において 1 名ずつ計 2 名の後任が確定した。人間表現学科は平成 26 年度から 1 学科 1 コース（人間表現論コース）に移行し，新任 2 名を含めた総勢 14 名の教員による学科（コース）運営がスタートする。なお，2 年次以上の学生に対しては，表現創造論コース（5 名），表現文化論コース（5 名），臨床・感性表現論コース（4 名）の教員体制が継続される。

(2) 予算

予算は大学院人間発達専攻表現系講座に配分されたので，学科としての配分はない。大学院表現系講座に共通経費として配分された「教育経費 282.3 万円」のうちの 200 万円を大学院表現系講座および学部人間表現学科の共通経費とし，一体的に運用した。

学部関連予算で特記すべき事項は，担当者が欠員のまま未開講の状態であった音楽療法関連の学部授業科目のうち 2 コマについて，部局をめぐる昨今の厳しい財政状況を踏まえ，非常勤任用経費を学科共通経費から拠出せざるを得なかったことである。その他，C 棟耐震工事の関連で，大学院前期課程入試の専門科目（プレゼンテーション）および学部編入学試験の専門科目（実技選択）の会場を変更したことに伴う，楽器運搬・調律費等の特別経費が発生した。

大学院においては，平成 25 年度から，従来の「コミュニティアート」および「表現文化論」の 2 コースが人間発達専攻表現系講座に一本化された。また学部においては，平成 26 年度から，従来の「表現文化論」，「表現創造論」，「臨床・感性表現論」の 3 コースが人間表現論コースに一本化される。平成 26 年度以降は，これらの再編が意味のあるものとなるよう，共通経費の有効かつ効果的な執行が望まれる。

(3) 入試

平成 26 年度人間表現学科の入学試験の結果は，社会人特別選抜合格者 2 名，前期日程合格者 33 名（音楽受験 12 名，美術受験 9 名，身体表現受験 4 名，学科受験 8 名の計 33 名），後期日程合格者 6 名（学部共通小論文）であり，ここ数年，大きな変動は見られない。なお，編入学試験合格者は，表現文化論コース 1 名，表現創造論コース 2 名，臨床・感性表現論コース 2 名である。

平成 26 年度から，表現学科はこれまでの 3 コースを統合して 1 コース（人間表現論コース）となる。これに伴い，従来の専門科目群を，学科共通科目群と個別専門科目群の大きく 2 つのカテゴリーに区分し，必要に応じて科目名称も変更することとなった。平成 26 年度に人間表現学科への入学を志す受験生に無用な混乱を与えないよう，オープンキャンパスや公式ウェブサイトを通じて（新）人間表現学科の関する以下のような情報の発信・広報を行った。

第一に人間表現学科の入学定員（募集定員）はこれまでと変わらないこと。第二に，受験コースに関して，一般選抜の受験区分は従来通り，前期日程については「音楽受験」，「美術受験」，「身体表現受験」，「学科受験」の各受験コース，また後期日程については「学部共通小論文試験」とすること。第三に，教育内容に関して，展開されている従来の授業科目を，表現形式の違いを超えた「文化・芸術に関する横断的科目群」と個別の表現形式に即した「文化・芸術に関する専門科目群」に再編し，理論と実践の両面から学際的かつ多面的に学習できるようにすることで，教育内容がより一層充実したものとなること。第四に，学生の指導体制に関して，1 コースに統合することで，多様な学生のニーズに機動的かつ柔軟に対応できる指導体制が可能となること等である。平成 26 年度人間表現学科の一般選抜に関して，外部の受験予定者から数件照会があったが，大きな混乱もなく，入試は無事終了した。

平成 26 年度は，現在の 4 受験コース（前期日程），学部共通小論文（後期日程）のもとで入学した最初の学生

が 4 年生になる年度である。この入試体制の妥当性についての検証が必要であろう。

(4) 教育

各種ガイダンスの実施：入学時ガイダンスをはじめとして，各学年の年初ガイダンス，履修コースガイダンス，ゼミ分けガイダンス等，年次進行の節目節目において各種ガイダンスを実施している。

希望履修コースの偏り：平成 26 年度の新 2 年生（42 名）の進学先履修コースの内訳は，表現創造論コース 18 名，表現文化論コース 12 名，臨床・感性表現論コース 12 名である。希望コースの傾向は例年と大きな変化はなく，表現文化論コースへの希望者が依然として少ない。当該コースへの進学者のほとんどが第三希望であり，進学後の学習意欲の低下が危惧される。前期日程入試の受験コースに「学科受験」を設けた目的の一つは，実技検査のハードルを緩和させることによって受験生の母集団を多様化させ，文化論研究に強い関心を抱く学生の受験生を増加させることにあった。来年度から 1 コースに移行することで希望履修コースの偏りは顕在化しなくなるが，本質的な問題は残されたままであり，入試方法との関連で再検証し，何らかの対策を講じることが必要であろう。

臨床・感性表現論コースの指導体制：運営の項で記載したように，臨床・感性表現論コースでは実質的に教員 2 名によるコース運営がここ数年間に続いていたために，とくに学生の研究指導の面で大きな支障をきたしていた。そのため，当該コースの学生の卒研指導に関しては，他コースの教員の全面的な協力を仰ぐなど，学科全体としてサポートする体制をとった。また学生の研究テーマにより，発達支援論の先生にもご協力頂いた。

学科教育理念の実質化に向けて：表現学科における教育目標の一つは，音楽や美術・デザイン，身体表現といった個別の表現領域を横断するような視点を養うことを通じて，個別の領域に捉われない新たな表現の創出を担う人材の育成を目指すというものである。この目標の実現に向けて，発達科学部の第二バージョンの改組時において，上述の 3 履修コース（表現文化論コース，表現創造論コース，臨床・感性表現論コース）を設定した経緯がある。しかし，このような学科の教育理念とは裏腹に，学生のなかには個別の表現領域に極端に偏った履修行動をとる者が一定程度存在する。教員免許状取得のための履修要件といった酌むべき事情はあるものの，今後，学科の将来を構想するなかで，学科構成員の専門領域の再配分を含めて，効果的な対応策を検討すべきであろう。

早期キャリア教育の実施：学科 1 年生を対象とし，就職を含めた広い意味での将来のキャリアについて入学後の早い段階から考えさせることを目的に，学科共通必修科目の枠を利用して，キャリアサポートセンター主催のキャリアセミナーを受講させた。学生にとっては，将来のキャリアとの関連から今後の履修計画を考えるうえでよい機会になった。来年度以降も引き続き実施したい。

● 在籍学生の状況：

平成 25 年度当初の人間表現学科所属学生数は，在籍学生 191 名（男 32，女 159），休学生 9 名（男 4，女 5）で，平成 26 年度当初（見込）の人間表現学科所属学生数（見込）は，在籍学生 189 名（男 161，女 28），休学生 10 名（男 5，女 5）となっており，この傾向は数年来変わらない。学科の学生定員が 160 名であることから，常に 20～30 名ほどの留年生（休学生は 10 名前後）を抱えていることになる。在籍学生の動向を把握し，履修指導を含めた早期の対応が必要であろう。

● 教育上の取組み：

創作・パフォーマンス系教員においては，／壁画プロジェクト『モトコーを歩こう』への参加（2 壁面）／港で出合う芸術祭・神戸ビエンナーレ大学作品展「-bow・ぼう・望-」への出展／創卒業制作展「knot」の開催（大阪海岸通ギャラリーCASO）／表現創造演習公演会「生」の開催（発達科学部 B 棟 1 階）／神戸ビエンナーレ 2013（兵庫県立美術館と神戸大学発達科学部の相互協力協定事業 「Site Specific Dance Performance #3『春の祭典』」）への参加／「音楽の旅 I 」（和泉市久保惣美術館久保惣 Ei ホール）への出演など，学内外のさまざまな展覧会や演奏会，プロジェクト・イベントへの積極的な参加を組み込んでいる点に特徴がある。

他方，理論系教員においては，／課題やレポートを活用した学生の理解度向上のための授業改善の取組み／フェニックスホール「ヒストリカル・コンサート-ショパンと親友たち」(2013 年 12 月 7 日)を題材とした音楽批評に関わる実践的教育／学部 1，2 年生を対象とした卒業研究プレゼンテーション実習／経済学研究科主催の教員向け研修「クイーンズランド大学の教員による英語での授業研修」への参加（2014 年 3 月 10 日～14 日）／授業「ファッション文化論1」における（服飾資料の収集・展示・公開・保存に関する）講演会の開催（石関亮氏：京都服飾文化研究財団学芸員）など，学生のソフトスキルを高める実践的教育やゲストスピーカ（学外専門家）の登用などに特徴が見られる。

(5) 研究

研究活動に関しては，人間表現専攻の研究に関する項を参照されたい。

(6) 広報

前述したように，平成 26 年度から，表現学科はこれまでの 3 コースを統合して 1 コース（人間表現論コース）となるのに伴い，その概要をオープンキャンパスや公式ウェブサイトを通じて対外的に情報発信するよう心がけた。平成 26 年度は，さまざまなチャネルを通じて，表現学科のさらなる広報に務めたい。

(7) 受賞

ここ数年，創作・パフォーマンス系ゼミ所属の学部学生による活躍が顕著である。平成 25 年度の受賞はダンス部門 3 件，絵画部門 1 件，彫刻部門1件の合計 5 件である。（以下一覧）

・「アーティスティック・ムーヴメント・イン・トヤマ 2013」特別賞
・「座・高円寺ダンスアワード 2014」入選
・「横浜ダンスコレクション EX2014」コンペティションⅡ 奨励賞（新人振付家部門）
・第 39 回こうべ市民美術展・神戸労働者福祉協議会賞受賞（彫刻部門）
・壁画プロジェクト『モトコーを歩こう』仮想店舗人気投票入賞（3 位）

（人間表現学科長 小高直樹）

4.2.4. 人間環境学科

(1) 運営

学科に関する意思決定は，例年どおり，人間環境学科・専攻運営会議において行った。本運営会議は，学科長と各コースの主任の計 5 名から構成される。今年度は，定例会議 16 回を開催し，予算配分，人事，入試，教育等に関わる重要案件を審議・決定した。なお，本年度途中より，学科長が議事録を作成し，コース主任に配布することとした。

(2) 予算

学科共通経費は用意していない。

(3) 入試

特記事項なし。

(4) 教育

4 月 4 日，103 名の新1年生を迎え，ガイダンスを行った。例年と同じ内容で，学科やコースの特色，カリキュラム，1年後のコース配属の基準等を説明した。学籍番号により学生を 4 グループに分け，各コースから選出された担当教員 4 名により履修相談やコース進路相談等を行う指導体制をとった。

また同日，新2年生に向けてコース配属のためのガイダンスを行った。今年度のコース別配属人数は，以下のとおり。自然環境論コース：33 名，数理情報環境論コース：18 名，生活環境論コース：25 名，社会環境論コース：26 名。

本学科では，学科共通の教育をどのように進めるべきかを検討してきた。その一環として，1年生の必修共通科目である「人間環境学概論」に関して，内容をワーキンググループで見直し，来年度より新しい構成で実施することとなった。

(5) 広報

高校生に対する大学説明会（オープンキャンパス）が 8 月 7 日及び 8 日に実施された。各コースの説明会等を行った。

（人間環境学専攻長 平山洋介）

4.2.5. 発達支援論コース

(1)「プロジェクト連動型のコース」

本コースは，人間発達環境学研究科及び発達科学部の実践性を特徴とするヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下，「HC センター」と略）の研究プロジェクトと連動している。学生は，「子ども・家庭支援部門」「障害共生

支援部門」「ジェンダー研究・学習支援部門」「労働・成人教育支援部門」「ボランティア社会・学習支援部門」の 5 部門の実践的研究に携わりながら，地域・行政・企業・NPO との協働的研究の実際を学び，現代的研究の原理と方法を修得する。

2013 年度は，昨年同様，各部門の継続的なプロジェクトだけではなく，HC センター主催の「東日本大震災復興支援プロジェクト」や HC センターが核となって実施されている「ESD サブコース」の運営に多くの学生が参加し，まちづくりや ESD を組織化する方法論を現場から学ぶ機会を得た。「HC センターの最先端の実践的研究に触れながら学びを深める」という本コースの特徴を象徴するものとなった。

(2) 多様な専門性との「出会いの場」

3 年次に学部のあらゆるコースから進学可能な本コースは，学生集団自体が多様性・異質性を特徴とする。2013 年度の進学者は 12 人で，2 年次の所属は，心理発達論（1 名），学校教育論（1 名），身体行動論（3 名），数理情報環境論（3 名），生活環境論（1 名），社会環境論（1 名）表現発達論（1 名）で，編入学者は 1 名であった。4 年生と合わせると，学部生は 31 名（2012 年度は 29 名）であった。本コースでは，基本的に学部生の大学院進学あるいは大学院生と共に学ぶスタイルを推奨しており，大学院在籍者を含めると 50 名強の，実に「多様な専門性をもった学習共同体」となっている。

本年度の大学院在籍者は，博士課程（前期）10 名（M1：4 名，M2：6 名），同課程（1 年制履修コース）6 名，博士課程（後期）6 名（D1 ：2 名，D2：2 名，D3：2 名）であった。

(3) 「教師と生徒の共同作業」としての学習プログラムづくり

本コースは，旧所属のカリキュラムに束縛されることなく，研究テーマに応じて自由に学習プログラムを作り上げることができるという特徴がある。学生の問題意識・関心と最新の学問的イッシューが交差しえるように，教員と学生が共同して学習プログラムを作成する。教員と学生の関係性を対話的に再構築するという課題を乗り越えながら，学生は「自らの学習過程を自ら創造する」という体験を通して，学習支援の本質を理解することが企図されている。

このコースは，いまだ新しいコースであるため，模索が続いているが，7 年目を迎え，少しずつ成果も見えはじめてきた。卒業論文や修士論文は，そのような学習と研究の集約といえよう。卒論と修論に取り上げられた内容は，下記の通りである。

「子どもの家庭内で形成される性別役割意識と将来の性役割観の関係について」
「いじめ対応における教師・親・子どもの 3 者連携に関する研究」
「障害者との関わりの中で生まれる支援者の変容と関係性の変容―『悠々ジョブ』活動を通して―」
「ひきこもりの実態とひきこもりに対する社会の認識に関する研究」
「共働き世帯における立会い出産経験が父親の家事・育児参加に与える影響に関する研究」
「現代の若者の「居場所」の危機について ―人間関係にみる若者の貧困問題―」
「学校の統廃合による地域住民への影響－学校の意味を探る―」
「中学校のキャリア教育における職業体験学習の在り方に関する研究―自己有用感・自己効力感の高まりと感動体験に着目して―」
「博物館の教育機能に関する考察 ―博物館ボランティアの語りから―」
「都市型消防団再生のためのジェンダー平等戦略―K 市 N 区を事例として」
「共に働く」現場の葛藤－障害学の視点から－」
「中国における留学帰国者のエンパワメントプロセスに関する研究 -逆カルチャーショックに注目して-」
「リスク社会における防災教育の在り方―震災語り部ボランティアのライフヒストリーに基づく当事者意識の形成に関する研究」
「中国における小学生の放課後の居場所に関する研究」
「介護福祉士のデスエンパワメント状況克服の過程―意識化の所在に注目して―」
「精神保健福祉分野で働く女性援助職の自己決定～キャリア形成に視座を置いて～」
「赤ちゃん人形を使った青年の養護性・親準備性の学習に関する研究」
「女子学生のキャリア教育におけるカウンセリング型授業の効果と課題」
「通信制・単位制高校生のためのハイブリット・スクールの意義と可能性」

(4) 多様な社会領域での「ヒューマンキャピタル・ソーシャルキャピタル創成者」

2013 年度学部卒業生(4 年生)の主な進路は，博士課程(前期)進学，公務員，教員，酒造会社，ホテル，商社，警察関係などで，博士課程(前期)修了者は，後期課程進学，行政職員，特別支援学校教員などとなっている。

発達科学部・人間発達環境学研究科の全体的な傾向同様，本コースの卒業生・修了生も，多様な社会領域に進出している。しかし，学部・領域横断的かつ実践主義的な本コースで学んだ彼らには，実践者として，とりわけ，現実社会の輻輳した問題を解決に導く「ヒューマンキャピタル(人的資本)・ソーシャルキャピタル(社会関係資本)」をより豊かにしていく実践者として，各領域で活躍してもらうことを期待するものである。

(発達支援論コース主任　松岡広路)

4.3. 各専攻の教育

4.3.1. 人間発達専攻

(1) 運営

2013 年 4 月より発足した人間発達専攻は，前期課程学生　67 名　後期課程学生　12 名を迎えた。教員は 4 つの系講座(こころ系，からだ系，表現系，学び系)に所属し，専攻の運営は基本的に系講座を中心に行われている。人間発達専攻運営会議を組織し，月 1 回の定例会議のほか，適宜臨時の会議を開いて専攻の運営に関わる重要案件を検討している。運営会議は，専攻長と 4 つの系講座主任および人間形成学科長の計 6 名から構成され，人事，予算，入試，指導教員体制，共通科目運営等に関わる審議を行った。

(2) 人事

専攻内人事の手続きについては各系講座で，人事の基本方針を検討し原案を作成する。運営会議では，人事案件の立ち上げに関して検討を行う。それをもとに専攻長は，人事選考委員会の立ち上げについて，人事委員会に諮る。以上の手続きに従って，運営会議は各系講座から立ち上がった人事案件について検討を行った。

(3) 予算

専攻の共通経費はとくに組まれていない。講座予算については，直接各系講座に振り分けられる手続きで行う。

(4) 入試

博士課程前期課程及び後期課程の入試は，専門領域に応じて受験区分を設け，各系講座が主体となって実施した。専攻運営会議では，各講座での実施体制について調整確認を行った。前期課程入試について，英語を共通問題にしていく方向性について継続的に審議している。

(5) 教育

- 人間発達専攻 DP について

  各系講座からの案をもとに運営会議で検討した。専攻でのまとめを学部大学院運営委員会に提案した。

- 人間発達専攻共通科目の運営について

  運営会議では，人間発達専攻共通科目(人間発達総合研究Ⅰ及びⅡ)の授業について，共通科目運営委員会と適宜連絡を取り合い，遂行状況について，意見交換を行った。人間発達総合研究Ⅰおよび人間発達相関研究は前期課程の共通科目，人間発達総合研究Ⅱは後期課程の共通科目として，新専攻で新たに設置されたものである。人間発達総合研究Ⅰおよび人間発達相関研究の運営を充実させるため，共通科目運営委員会が組織されている。この委員会は人間発達専攻各系講座より 1 名ずつ委員を担当し，2013 年度は増本康平准教授が委員長である。

  人間発達総合研究Ⅰおよび人間発達相関研究では，受講生のアンケートや評価を積極的に行い，改善点を抽出し，次年度のシラバスに反映する作業を行った。その検討事項は，学部大学院運営委員会においても，遂次検討事項として提案した。また各系で担当を行う人間発達研究についても，遂次意見交換を行った。

  人間発達総合研究Ⅱは，後期課程の初年度生が受講するものである。各系講座主任が運営に関与しながら，人間発達専攻長が取りまとめを行った。2013 年度は受講者の多彩な専門領域を活かし，相互交流を促進するために，発表形式の場を持つことを基本に遂行した。プレゼンテーション力・コミュニケーション力等実践能力育成講習会への参加も積極的に促した。

  また 11 月を中心に実施される学術 WEEKS の機会を利用し，院生が主体的に課題に取り組む工夫を試みた。英語での発表の機会を得，国際的な場でのプレゼンテーション力を伸ばす経験になった。また，シンポジウ

ムの運営を通して国際交流の経験を深めることも可能となった。

- 副指導教員体制について

人間発達専攻では，専攻内の多様な専門性を教育指導において活かすことを目的に，主任指導に加えて，副指導教員を 2 名立て，その一人は主任指導教員の所属する講座外の系講座から福指導教員を立てることを基本に，前期課程学生の指導体制を充実させている。これによって学際的で新しい研究領域が開発されることが期待される。

- 研究道場の運営について

研究道場は教員が共同で先端的研究を進める研究会に学生が参加し，実践的な研究力量を身につけ，研究者として早期に自立できる素養を習得することを目的とし，人間発達専攻において発足したものである。2013 年度は，研究科において取り組まれている領域横断的プロジェクトをもとに説明会を行い，各プロジェクトへの院生からの参画者を募った。

2013 年度は「教育基礎研究道場」に 13 名(前期課程 12 名　後期課程 1 名)，「アクティブ・エイジングに根ざした多世代共生型コミュニティの創成」プロジェクトに 3 名(前期課程 2 名　後期課程 1 名)，「ライフヒストリーによる心理・教育支援」プロジェクトに 1 名(前期課程 1 名)の登録があった。

(6) 研究

人間発達専攻の発足に伴い，学際的なプロジェクトの企画遂行を積極的に行っている。11 月を中心に実施される学術 WEEKS を中心に，国際シンポジウムが組まれた。その他 2014 年 1-2 月には第 5 回日仏ライフヒストリー研究会や日韓学術交流(芸術・芸術教育論)が，実施されている。

そのほか研究の特記事項は，旧専攻の各報告を参照のこと。

（人間発達専攻長　森岡正芳）

4.3.2. こころ系講座(旧心身発達専攻)

(1) 運営

こころ系講座には 2 つの分野があり，心理発達論に関する研究分野に 11 名，健康発達論に関する研究分野に 5 名の教員が所属している。教員の所属である博士課程前期課程には，履修コースとして心理発達基礎論コース，臨床心理学コース，健康発達論コースの 3 つが設けられている。こころ系講座の運営は，基本的にこれらのコースを単位として行われているが，予算配分や人事，大学院入試などについては，適宜こころ系講座会議を開催し協議・調整を行っている。

なお，心理発達基礎論と臨床心理学の 2 コースは学部における心理発達論コース及び博士課程後期課程の心理発達論教育研究分野が共通なので，日常のコース運営についての会議は共同で行っている。

(2) 予算

特にこころ系全体に係る講座共通経費は設けていない。なお，心理発達基礎論と臨床心理学の 2 コースについては，予算はすべて一本化されて執行されている。

(3) 入試

2013 年度 4 月の専攻改組に伴い，博士課程前期課程の入試は受験区分をこころ系A(従来の心理発達基礎論コース)，こころ系B(従来の健康発達論コース)，臨床心理学コースの 3 区分に設定して行っている。2013 年 9 月の入試における志願者数は例年とほぼ変わらず，臨床心理学コースが突出して多かった(志願者数 62 名；定員の約 6 倍)。博士課程後期課程の入試はこころ系A，こころ系Bの 2 区分に設定して行った。2014 年度入試倍率は 1.3 倍であった。

(4) 教育

以下のような院生への教育指導の特色が見られた。

- 健康教育の領域では，博士課程の院生指導の一環として，学外研究者と指導教員との共同研究を通して，論文ばかりでなく院生との共著で著書も出版した。
- 発達障害の心理的支援の研究では，論文執筆や学会発表を盛んに行い，英語の雑誌への投稿も精力的に行って採択されている。さらに，心理検査法実習の課外授業として精力的に活動を行っており，北海道大学と

の共同研究，新潟市立幼稚園との共同研究「幼児の実態調査」や，神戸市立幼稚園との共同研究「ユニバーサルな発達障害支援グランドデザイン」など精力的に学部生や院生に実践活動の機会を与え体験的に学習する積極的な教育を行っている。また，イギリス特別支援学校の視察など，国際的な視点に立った教育実践も行っている。

- 疾病予防・健康行動の領域では，夏季休業期間を利用して，中華人民共和国の CDC（疾病予防管理センター）へのインターンシップに参加させて，国際的な調査研究を経験させた。また久留米大学の ADHD 児を対象とした研究プロブラムに修士課程院生を参加させて，研究交流をしながら修士論文をまとめさせた。さらに博士課程の院生が日本生理人類学会の若手の会の役職に就くことで，学会若手組織の運営に関わり，他大学の教員，院生との学術交流を図った。また近畿大学の学齢期の体組成と健康の研究プロジェクトに共同研究者として参加させ，フィールド調査及び論文発表に貢献でした。また積極的に国際学会（欧州肥満学会，欧州心理学会，国際生理人類学会）での筆頭発表を行わせ，教育の国際化を図った。
- 生涯発達心理学の領域では，東日本大震災の心理支援研究に積極的に大学院生を連れて行き，大震災の影響や高校生の不安や苦しみ，将来への気がかりなどに触れさせ，今後の震災支援のあり方について関わりを持たせている。
- 臨床心理学の領域では，心理教育相談室の運営を院生に自主的に行わせることにより，責任感と専門性の体験的な理解をさせ，臨床心理士の資格に向けて多大な教育的な成果を上げている。心理教育相談室は，学外向けの一般の有料心理相談室であり，下は 2 歳から上は 60 代の人まで幅広く生涯発達の問題に対処する能力を培うことができる。年間 20 件以上の新規相談を受理し，臨床心理学コースの院生はひとりあたり少なくても2，3ケースの担当を経験している。電話受付も教育の一環で行い，年に 1 回の心理臨床研修会では，卒業生の臨床心理士との学術交流により，多様な現場における臨床心理士の役割と責任と業務などについて研鑽している。さらに不登校の児童生徒支援として，教育委員会付属の適応教室でのボランティアや引きこもりの不登校児童生徒への心理支援や治療的家庭教師などを通して，不登校児童生徒への支援を経験的に理解できる教育となっている。
- 健康心理学の領域では，全学協定校であるグラーツ大学，部局間協定校であるグラーツ医科大学と健康に関連する生活の質をテーマに置く研究や実践活動，神戸大学工学研究科や保健学研究科との連携，カロリンスカ研究所との学術交流などには，スタディ・ツアーとして学生も参加し国際的学術交流を広げている。これらの教育の成果として国際学会 ICP(International Council of Psychologists)では，学生が留学生の Well-being に関するポスター発表を行った。

(5) 広報

2013 年 6 月 29 日に行われた大学院オープンラボに，こころ系講座としても参加した。心理発達論に関する研究分野は，1 日で終わらず，次週の 7 月 6 日にも設定し教員との面接希望者に対応した。また同年 7 月に行われた河合塾主催の大学院入試案内に臨床心理学コースから昨年に引き続き参加した。

（こころ系講座主任　吉田圭吾）

4.3.3. 学び系講座（旧教育・学習専攻）

(1) 運営

教育・学習専攻は前期課程においては，「子ども発達論」「教育科学論」「発達支援論」の3つの履修コース及び 1 年履修コース，後期課程においては，前述の3つの教育研究分野から構成されている。これらのコースや教育研究分野の運営は，基本的に各コース・教育研究分野を単位として実施されているが，専攻全体に関わる案件については，適宜専攻会議及び専攻運営会議を開催し，協議・調整につとめた。2013 年度については，とくに，新専攻が立ち上がったこともあり，旧専攻の運営会議のメンバーで幾度となく協議，調整を行った。

(2) 予算

予算は，原則的に新専攻における学び系の各教育研究分野に対して，その所属教員数及び学生数に応じて配分された。専攻全体に関わる共通経費は特に設けていない。

(3) 入試

新専攻で行われているため，教育・学習専攻としては行われていない。

(4) 教育

前期課程においては，修士論文の中間審査，最終審査が組織的に実施され，研究指導の充実を図った。後期課程による研究指導は，研究科全体の指導体制に即して例年通り実施された。

教員の授業改善の試みとしては，ゲスト講師招聘が，「科学教育原理特論 I」「科学教育原理特論演習」「教育方法学特論 I 」「教育方法学特論演習」等で行われており，大学院教育の充実に鋭意努力した。また，より専門特化した指導を多層に得られるために，乳幼児教育保育学専門の他大学教授に修論について助言指導を得る機会をゼミにおいて設けた。

人間発達研究としての教育学関連分野において，特に優れた大学教員・研究者を養成するため，教員が共同で進める先端的研究や議論の場に学生が参加し協働する体制として教育基礎研究道場を設置した。2013 年度には，プレ企画を 3 回，研究道場特別講義を 16 回，研究道場論文合評会を 2 回開催した。研究道場特別講義では研究者を 19 名招聘し（プレ企画含む），研究の最前線について講演頂いた。参加する学生（M1）は，研究紀要「教育科学論集」の編集にも従事した。また，修士論文として附属校園等を活用したアクションリサーチによる実証的研究に取り組むとともに，専修免許を取得し，将来教職を目指す博士課程前期課程在籍学生を対象に高度教員養成プログラムを実施した。

授業以外においては，2014 年 9 月に 1 泊 2 日の研究探索合宿を，淡路島において実施した。博士課程後期，前期の研究テーマや学部生のモチーフを，ワークショップ形式で討議し，「発達支援研究に求められる課題」を探究した。また，HC センターで実施されているアクションリサーチ，パパママセミナー，障碍児居場所づくり事業，東日本大震災支援活動に，学生の参加を呼びかけ，支援者の関わり方，支援運動の方向性，および，ESD（持続可能な社会づくりのための教育）の本質について学ぶ機会を提供した。一部授業の枠内で実施した。

その他，2013 年 8 月に国立科学博物館主催「教員のための博物館の日」に開発中の技術を提供，参加し，企画の成功に貢献した。2013 年 12 月に学び系とこころ系の教員が合同で教育実践と発達研究に関する公開シンポジウムを企画，開催した。乳幼児教育保育研究室の同窓会（沙智会）と大学院生，学部生による交流がなされ，市役所行政職，保育職，院生等による卒業後の業務や研究への意見交換会などがなされた。

子ども発達に関する研究分野において，現文部科学省・厚労省関係諮問機関委員，教育委員会指導主事，市福祉課担当者と院生・学部生との交流機会等が企画・提供された。指導教員に同行しての幼稚園・保育所・小学校における園・校内研修への参加や見学も実施された。特に，舞鶴市「プロジェクト型保育推進事業」の旅費助成を受け，現地での公開保育，ドキュメンテーションに関する研修会，保育関連講演等を聴講する機会を得た。神戸市の公開保育や，園内研修に参加する機会を得た。西淀川区から依頼され，乳幼児教育保育ゼミ学生・院生による「子どもは科学者～読み聞かせワークショップ～」が企画，実行された。その成果は，ケーブルテレビにおいて取材放映された。保育に関心のある学生対象に，グローバル人材育成事業の一貫として，「グローバルキャリアあり方についてのご講話いただき，加えてご研究（幼児の創造性の発達），イギリス・アメリカ・HK の現場の保育についてのお話をしていただく会を設けた。なお同講演会には，NHK 大阪からの取材があった。

タイのチュラロンコーン大学から総勢 37 名の訪問を受け，乳幼児教育保育ゼミの学部生・院生が同大学学生・院生と共に，施設見学，昼食会，交流会を行った。(http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/2474)

院生主体の企画に，学び系の院生，学部生が参画し，学術 WEEKS および教育道場合同企画，「応用「発達科学」としての教育学：教育保育のさらなる科学化をめざして」を実施した。
(http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/2389)

今年度の学び系に所属する大学院生の研究業績は以下の通りである。

学会発表	…	18 件
学会発表要旨集・論文集	…	16 件
査読付き論文	…	7 件
査読なし論文	…	5 件
国際会議査読付き	…	12 件
受賞	…	1 件

(5) 広報

本系講座の紹介などは，大学院オープンラボ，専攻 HP 等で行った。

（学び系講座主任 岡部恭幸）

4.3.4. からだ系講座（旧人間行動専攻）

(1) 運営

からだ系講座の教員は，昨年度に1名が定年退職し 13 名である。構成は，教授7名，准教授6名である。その内2名は今年度スタート時は欠員であったが，准教授 1 名が 10 月に着任した。次年度新たに 1 名（准教授）が着任する。教育・研究上のコースとして，行動発達論コース（教員 5 名），身体行動論コース（教員 8 名）の2つのコースがある。系講座の院生定員は前期課程（修士課程）コース 6 名，後期課程コース 2 名である。入試は前期課程入試（9 月）と後期課程入試（3 月）よって選抜される。

系講座の運営は，系講座運営会議と系講座会議により行われる。系講座運営会議は系講座長と両教育・研究コース主任の計 3 名で構成される。系講座会議は 13 名の系講座構成員で構成される。系講座運営会議は系講座長が招集し，人事および専攻に係る諸課題について審議する。系講座会議は系講座に係るすべての事項を審議し系講座としての意思決定をする。本年度は 11 回の系講座会議が開催された。主な審議内容は，前期課程および後期課程学生募集要項について，学位論文の評価基準について，採用人事について，前期課程入試実施について，共通科目運営委員について，教員活動評価制度の導入について，「国立大学改革プラン」「神戸大学機能強化改革（案）」について，平成 27 年度概算要求について，修士論文計画発表会について，後期課程入試実施について，前期課程入試外部英語試験導入について，であった。

(2) 予算

人間発達専攻の予算は，研究経費と教育経費からなる。研究経費は発達科学部・大学院人間発達環境学研究科修士課程研究経費と博士課程研究経費からなる校費，そして各教員の努力による科学研究費・委任経理金等の外部資金獲得経費とからなる。校費としての学部・修士の研究経費は全教員に一律配分され，それに修士および博士課程研究指導経費が各教員の指導院生数に応じて配分される。教育経費は，実験実習費，それぞれの教育研究履修コースに所属する学生数に応じて配分される共通経費から成る。

(3) 入試

入試は，前期課程（修士課程）が 9 月，後期課程が翌年 3 月に実施された。入試の方法は，前期課程は外国語，専門科目 2 科目及び口頭試問，後期課程は，研究業績および博士研究計画の口頭試問である。今年度は前期課程（修士課程）8 名，後期課程（博士課程）1 名の応募があり，前期課程入試は 7 名，後期課程入試は 1 名を合格とした。近年応募者の減少傾向がめだつ。次年度に向けて更なる広報に努める必要がある。

(4) 教育

大学院生への教育研究指導は，基本的には指導教員が中心となり，数名の論文副査教員とともに行われる。カリキュラム的には専攻間の壁は取り外しどの科目でも履修でき，院生自らの興味・関心によりカリキュラムを構成することが出来る。各科目は特論と演習から成り，多くの学生は両方を受講することにより，理論と実践の有機的結合を図っている。

多くの院生は活発に学会活動にも参加している。修士論文・博士論文の内容は充実しており，質の高い教育・研究指導が進められているものと理解している。修了後の進路は，一般企業，教員，進学・留学，研究職と幅広い分野にわたっている。

人間発達専攻からだ系講座の教育研究内容は，行動，スポーツ，発育・発達，加齢，アクティブライフスタイル等，実社会活動と直結する学際的分野であり，理論だけでなく実践活動も極めて重要であるため，講義以外の実践を伴った授業や院生教育も行われている。

(5) 広報

系講座の広報活動としては，基本的には大学のホームページと学部・大学院のパンフレットが常時見ることができる広報である。他にはオープンキャンパスの一環としてオープンラボを行い，受験者が希望する教員を訪問し質問する場を設定している。

(6) 教育研究のプロジェクトと国際交流

からだ系講座または教育研究コースでの人間行動に関するプロジェクト研究として，現在進められているプロジェクト研究の具体的課題として，「各ライフステージにおける健康増進の総合研究」や「子どもの「遊び」動作からみた基礎的運動スキルの獲得と発達に関するプロジェクト研究」，「子どものスポーツタレントの発掘・育成プロジェクト研究」，「アクティブ・エイジングに根ざした多世代共生型コミュニティの創成プロジェクト」が系講座教員が中心となって進めている。

また，昨年度より海外の大学との連携も積極的に進めている。昨年度は 3 月末にオーストラリア（西オーストラリア大学とエディス・コアン大学）に教員 2 名を派遣し，スポーツ・運動・健康科学におけるアカデミックおよび文化的交流の推進について話し合った。その結果，今年度 11 月に西オーストラリア大学から教員 2 名を招聘し，からだ系講座の大学院生の発表も含めて研究交流会をもち，同時に今後両大学アカデミック単位で，教員および学生の交換プログラムを推進することで同意し，西オーストラリア大学体育・スポーツ・健康科学部とからだ系講座の提携が実現した（GENERAL MEMORANDUM OF AGREEMENT BETWEEN THE SCHOOL OF SCIENCE EXERCISE AND HEALTH AT THE UNIVERSITY OF WESTERN AUSTRALIA AND THE GRADUATE SCHOOL OF HUMAN DEVELOPMENT AND ENVIRONMENT AT KOBE UNIVERSITY）。また，今年度 3 月末再度西オーストラリア大学とエディス・コアン大学に教員 3 名を派遣して具体的交流内容等について話し合い，西オーストラリア大学とは次年度から両学部学生の短期交流，教員の継続的交流プログラムの実現で同意した。エディス・コアン大学についても，今後具体的な教育研究交流プログラムの実現を進めていく予定である。

（からだ系講座主任 平川和文）

4.3.5. 表現系講座（旧人間表現専攻）

(1) 運営

旧人間発達環境学研究科人間表現専攻は，「コミュニティアートコース（表現創造論分野）」および「表現文化論コース（表現文化論分野）」の2コース（2教育研究分野）から構成され，運営に関する諸事項（総務，教務・学生，会計，入試等）は，これまですべてコース（分野）ごとに審議・決定・実施されていたが，人間発達環境学研究科の改組によって平成25年度から同研究科人間発達専攻表現系講座として位置づくことになったのを契機に，講座全体の整合性，効率化を図るために，運営に関するすべての議案について表現系講座として一体的に運営することとなった。

表現系講座の教員は，教授5名，准教授6名，講師1名の計12名で，平成26年度からは，「音楽療法」および「感性研究」領域の新任2名を加えた総勢14名体制となる。表現系講座全体に関わる総務，教務・学生，会計，入試等の議案については，原則月1回の定例表現系講座会議もしくは必要に応じて適宜開かれる臨時講座会議において検討あるいは審議・決定される。平成25年度は，定例学科講座会議が9回，臨時講座会議が4回開催された。（なお，表現系講座会議は，学部人間表現学科の学科会議を兼ねている）

(2) 予算

研究経費は一律35万を配分。教育経費（282.3万）は，200万を講座共通経費とし，残りを算定基準（DoctorおよびMasterは実員ベース。学部生は均等配分）により按分して個人に配分した。特記事項として，C棟耐震工事の関連で，大学院前期課程入試の専門科目（プレゼンテーション）の会場を変更したことに伴う，楽器運搬・調律費等の特別経費が発生した。

(3) 入試

平成26年度人間発達専攻表現系（前期課程）の入学試験の結果は，志願者数19名，受験者数19名，合格者11名であった。受験区分は一般10名（内部受験生3名，外部受験生7名＜出身領域は芸術系5名，その他2名＞），社会人3名（出身領域は芸術系1名，その他2名），留学生6名（中国5名，キューバ1名で，出身領域は外国語系4名，芸術系2名）であった。旧人間表現専攻においては，「コミュニティアートコース」と「表現文化論コース」で独立して入試を実施していたのを，人間発達専攻表現系に再編された平成25年度以降は，表現系として入試を一本化して実施したが，二度の実施経験を踏まえ，入試方法について検討すべき課題が浮かび上がってきた。現在改

善に向けて検討中である。

人間発達専攻表現系文化論分野の後期課程合格者は1名（志願者数4名，受験者数4名）である。ここ数年，後期課程志願者が特定の教員に偏って出願する傾向が見られる。研究科における表現系講座の基盤強化のためには，より多くの構成員が後期課程志願者を受け入れられるよう努力すべきであろう。

(4) 教育

旧人間表現専攻は，人間発達環境学研究科の改組によって平成25年度から同研究科人間発達専攻表現系講座として位置づくことになった。また改組の趣旨に沿って，学際性を教育面から保証すべく，複数の人間発達専攻共通科目が設定された。一方，旧人間表現専攻において，改組後の表現系講座における指導体制，とくに複数指導体制の実質化をどう図るかに関して検討を重ねてきた。検討の結果，前期課程1年後期に開講される「人間発達相関研究」の単位取得要件に，前期課程在学中における計4回の（全教員の参加のもとで執り行われる）修士論文中間指導会（年2回。計4回）に参加・発表することを義務付けることとした。このようにして，在学中の節目節目において，学生が複数の教員の指導やアドバイスを受けながら研究が効果的かつ計画的に進行するように工夫している。また，複数指導体制の実質化をさらに推進するために，現在，前期課程1年後期に開講される「人間発達研究（表現系）」の授業方法・形式についても検討している。なお前期課程2年生は（旧）人間表現専攻に所属しているが，1年生と同様の体制で研究指導に当たっている。

人間発達専攻共通科目のうち，「人間発達総合研究Ⅰ（前期課程1年前期）」および「人間発達総合研究Ⅱ（後期課程）」については別項（学部・研究科共通科目）を参照されたい。

特記すべき教育活動：教員個々のレベルだが，英語によるトライアル授業の実践や経済学研究科主催の教員向け研修「クイーンズランド大学の教員による英語での授業研修」への参加など，今後の英語授業展開に向けた研修，実践的試行が行われた。また，指導学生の研究（創作）活動の特記すべき成果 として以下のようなものが挙げられる。

- 博士前期課程学生による査読付論文掲載（感性工学会等2本）
- 博士後期課程学生の研究活動の新聞掲載（『毎日新聞』兵庫版　2014年1月22日朝刊地域面（25面））
- 博士後期課程学生の研究成果の出版（橋本健二／初田香成（編著）『盛り場はヤミ市から生まれた』青弓社，2013年12月）および書評掲載（『神戸新聞』2014年2月）
- 第39回こうべ市民美術展・神戸労働者福祉協議会賞受賞（洋画部門および彫刻部門：大学院生）
- 平成25年度秋篠音楽堂アーティスト賞受賞（大学院生）
- 秋篠音楽堂アーティスト賞受賞記念リサイタル（秋篠音楽堂運営協議会主催 2014.2.15秋篠音楽堂）。
- ソロリサイタル：フランシス・プーランクへのオマージュ～没後50周年によせて」の開催（日本演奏連盟／増山美知子奨励ニューアーティストシリーズ・平成25年度上期助成対象公演 2013.9.1イシハラホール）

(5) 広報

研究科の公式サイトは，ここ数年でデザイン，内容とも充実してきた。表現系の独自サイトを立ち上げるか否かについては，人間発達専攻全体との関わりにおいて現在検討中である。

（表現系講座主任 小高直樹）

4.3.6. 人間環境学専攻

(1) 運営

専攻に関する意思決定は，例年どおり，人間環境学科・専攻運営会議において行った。本運営会議は，学科長と各コースの主任の計5名から構成される。今年度は，定例会議 16 回を開催し，予算配分，人事，入試，教育等に関わる重要案件を審議・決定した。なお，本年度途中より，専攻長が議事録を作成し，コース主任に配布することとした。

今年度の人事として，生活環境論コースと社会環境論コースの昇任人事2件，生活環境論コースの新人人事1件に関する人事選考委員会の設置を人事委員会に提案した。いずれも人事委員会で審議された後，教授会において承認された。

(2)予算

学科共通経費は用意していない。

(3)入試

特記事項なし。

(4) 教育

院生は修士論文・博士論文の作成を中心目標として勉学・研究を進めることから，彼らに対する指導はそれぞれの指導教員に負うところが大きい。その一方，とくに博士前期課程に関しては，専攻共通教育のあり方をどのように考えるべきかが検討課題となっていた。この事案について，ワーキンググループでの検討を進め，来年度より，専攻共通科目「人間環境学相関研究」をスタートさせることになった。

なお，教育の成果として，院生の受賞があった。

尾崎圭太(D2)：Outstanding Presentation Award, International Symposium on EcoTopia Science 2013 (Dec.13-15, 2013), "GRAINE project：Development of the high-sensitivity nuclear emulsion for balloon experiment in 2014"

(5) 広報

大学院に関するオープンキャンパスに相当する「大学院オープン・らぼ」が 6 月 29 日に実施された。受験を検討している参加者が専攻教員と面談し，研究実施の可能性について相談する機会となった。

（人間環境学科長 平山洋介）

5. 進路

5.1. キャリア形成支援

5.1.1. キャリアサポートセンター

キャリアサポートセンターは，学部の 1 年生から大学院生にいたるすべての学生を対象として，学生のキャリア形成を実践的にサポートすることを目的としている。狭義の就職活動の支援はもとより，生涯にわたるキャリア形成を視野に入れた支援活動を提供している。

就職活動中の学生を対象にしてはセミナー・説明会・ワークショップ等の集団的イベント及び個別的なカウンセリングを行い，より広範囲の学生を対象にしては，大学で学ぶことや働くことの意義を自分で考え，自分の人生をどう生きるかという課題と早い段階から真剣に向き合うように働きかけている。

どのような仕事に就くかを決め，自分の希望する職をどのようにして得るのかを考えることは学生にとって大きな転機である。この課題に向き合うとき，当面の目標を越えて，個人が生涯にわたって仕事や社会とどのように関わりつながって生きていくかという長期的な視点に立つように訴えている。

当センターが企画・実施するイベントの多くは人間発達環境学研究科及び発達科学部の学生のみならず学部の 1 年生から大学院生にいたる神戸大学のすべての学生に対して開放されている。

現在当センターは

① 包括的なキャリア形成支援
② 就職支援の拡充
③ 大学院生へのキャリア支援
④ 留学生へのキャリア支援

に重点的に取り組んでいる。以下(1)～(4)において， これらの面における今年度の活動を報告する。最後の(5)において，今年度実施した就職対策セミナーの一覧を載せる。

(1) 包括的なキャリア形成支援

当センターは，希望する職に就くために必要な知識と技能を伝達することを越えて，包括的に長期的な視野から各自の将来の設計に取り組んでもらうべく働きかけている。各自のキャリア設計における包括的・長期的視野の重要性は，全学生・全教職員が共有すべきことであると考えている。

具体的な活動としては，広範囲の 1 年次生を対象とするいくつかの概論的授業科目内でキャリアガイダンスを実施し，教職員を対象とする FD（ファカルティ・ディベロップメント)活動の一環として当センターの活動に関する講演会を開催した。このことにより，上のメッセージをなるだけ多くの学生になるだけ早い段階に伝えることをめざし，キャリアガイダンスの果たす役割に関する教職員間の認識を深めることをめざした。いずれも当センターのキャリアカウンセラーが担当した。

1 年次生を対象とする授業科目内でのキャリアガイダンスでのキャリアガイダンスはここ数年継続して実施している。一昨年度・昨年度はそれぞれ 2 つの授業科目で行った。今年度は規模を大幅に拡張することができた。5 科目において延べ 260 名の学生に実施した。

いくつかのよく知られたキャリア理論（「転機の乗り越え」を軸とするナンシー・K・シュロスバーグの理論，人の一生を「役割の組合せ」という観点から理解しようとするドナルド・E・スーパーの理論，及びジョン・D・クランボルツの「計画された偶発性」理論）の紹介を中心とする内容であった。

カウンセラーが一方的に話をするのではなく，自己分析を試みる，他学生と意見を交換する等の活動を出席学生に促すことにより，学生が能動的に参加してくれるよう配慮した。

学生に提出してもらった感想文から，企業が学生に求める資質に関して企業と学生の意識間に存在するギャップの話，キャリア理論の提供する人間の生き方の大局的なノウハウ等に新鮮な興味を持ってくれた様子がうかがえる。

教職員を対象とする講演会は今回が初めての試みである。まずここ 5 年間のセンターの活動内容及び学生による利用状況の概要を説明し，次に学生には多様な要素を受け入れ物事を総合的に把握しまとめるコーディネート力・マネジメント力を磨いてもらうことが重要であるという趣旨の論を展開し，最後に今後の方向として初年次から授業等を通してキャリアガイダンスを行うこと及び教職員が一体となって取り組むことの重要性を訴えた。教職員との意見交換は今後も継続していきたい。

(2) 就職支援の拡充

民間企業就職希望者，公務員志望者，及び教職志望者に分けて，既に定着しているタイプの実践的な支援活動を精力的に実施した。民間企業就職希望者に対しては，企業の動向に関するセミナー，エントリーシート対策講座，グループディスカッションワークショップ，インターンシップセミナー，卒業生・修了生との座談会，マナー講座，メイク講座等を開催した。公務員志望者に対しては，全般的なガイダンス及び採用試験対策セミナーを開き，教職志望者に対しては，各地の教育委員会による説明会，採用試験対策セミナー，採用試験合格者との座談会等を企画した。

これらに加えて，キャリア形成全般あるいは現在直面している具体的な就職活動について学生が抱える多様なニーズに応えるべく，キャリアカウンセラーによる個別のカウンセリングを恒常的に実施した。

いくつかのイベントについてさらに詳しく報告する。

1) 3 年次生を対象とするガイダンス

間もなく本格的な就職活動を開始する 3 年次生を対象とするガイダンスを昨年度に引き続き 5 月に実施した。昨年度は各学科ごとに計 4 回実施した。より効果的なガイダンスをめざし，今年度は民間企業，公務員，教員と進路タイプ毎に内容を調整し，それぞれ 2 回ずつ実施した。

いずれにおいても

- 当該進路タイプの活動スケジュール
- インターンシップについて
- 神戸大学におけるキャリアサポートの体制
- 今後のセミナー・ガイダンスの案内

など，卒業後の進路選択に関して是非心得ておくべき基本的な内容を解説した。当センターとしては全 3 年次生に伝えたい内容である。できるだけ多くの学生が参加してくれるように各進路タイプとも 2 回ずつ実施し，実施時間も授業との衝突を避けて昼休みに設定した。

2) グループディスカッション研修

一昨年度大阪府立大学と合同で開始したグループディスカッション研修はすっかり定着し，今年度も充実した

研修の機会をを学生に提供することができた。多くの企業が採用活動の一環として実施するグループディスカッションでは，複数の参加者が与えられたテーマについて自由に討議することが求められる。所属大学・学部・専攻も違えば考え方・性格なども異なる様々なバックグラウンドを持つ学生と初めて会って一緒に討議するのであるから，戸惑うのが普通である。前もって模擬体験をしておくことが望ましい。

今年度は当センター独自の研修及び大阪府立大学との合同研修合わせて 8 セッションを実施し，延べ 149 名の参加者を集めた。ほぼ昨年度並みの規模である。一昨年度 4 セッション延べ 57 名の参加者という規模で始まったことを思うと，短期間で大きく成長したと思う。就職活動にすぐに役立つ実践的な内容であり，参加者には非常に好評であった。参加者のコメントの内容から判断して，この研修に対する需要が高いことがわかる。今後も力を入れ発展させていきたい。

3) 教員採用大学推薦制度への対応

教員採用選考に当たり大学推薦制度を導入する教育委員会が増えている。目下のところ，教職志望の学生から熱い注目を集めるといった段階にはまだ到達していないが，志望者にとっては魅力のある制度であるから，制度の存在が広く知られるにつれて応募者数が増加すると見込まれる。早いうちに対応の方針を策定しておくことが望ましい。

神戸大学全体に関わることであるが，当センターでこの件に関する取り組みを開始し，全学のキャリアセンター会議の場へあげた。大学推薦の募集に関する情報の神戸大学内での共有，学生からの問い合わせへの対応，学生の応募の取り扱い，応募者数が推薦可能人数を超えた場合の選考方法等について，方針案の作成から確定まで当センターが積極的に関与した。

(3) 大学院生へのキャリア支援

大学院生・ポスドクへのキャリア支援を充実させることは当センターの重要課題のひとつである。この方面では例年全学のキャリアセンターにより大規模な総論的ガイダンスが実施されている。当センターとしては，より小規模・具体的で小回りの利くセミナーを開催し，全学のガイダンスを補完することをめざした。社会の現場で活躍中の方を講師として招き，大学院を修了することの意義について，具体的な体験に基づく生の声を聴き，きめの細かい質疑応答ができる機会を提供するというところに特色を出すべく努めた。

以下のイベントが該当する。

1) OB･OG セミナー

人間発達環境学研究科前期課程を修了し，兵庫県立高校に数学教員として勤務し始めたばかりの方に講師をお願いした。勤務校における教員としての活動の様子を紹介してもらい，その中で大学院修了の資格と専修免許状を持って教職に就くことの意義について思うところを語ってもらった。教職志望者を対象とするガイダンスという位置づけもあるイベントであったので，教員採用試験にどのように準備して臨んだのかについても興味のある話を聴くことができた。

2) 香辛料メーカーでの研究者の働き方

香辛料の商品開発部門にお勤めの方にお越しいただき，大学院で培った素養を企業において安全で高品質な製品づくりのための研究に活用するという道についてお話しいただいた。スパイスの持つ特有の香味・風味をどのように生かすのかという，非常に具体的な問題設定下の企業活動の紹介であった。この方面の研究につながる分野を専攻している学生にとって，非常に有益な内容であったことと思う。

(4) 留学生へのキャリア支援

留学生のための就活セミナーを実施した。日本における留学生の事情に詳しい講師を外部から招き，日本の企業における留学生の採用の実態，留学生に対する期待等について解説してもらった。留学生を対象とする全学レベルのガイダンスとしては，留学生センターによるセミナーがある。3 の大学院生を対象とするイベントの場合と同様，当センターの企画は，参加者との対話が可能な程度の規模のアットホームな雰囲気での開催を心がけ，全学のセミナーにない味を出すことをめざした。留学生を対象とするイベントを当センターで実施するのは，昨年度に続き 2 回目である。参加者数が昨年度の 6 名から 10 名に増えたことは喜ばしい。今後も地道に努力を続け，定着させていきたい。

(5) 就職対策セミナー

例年通り，狭義の就職活動を支援するための対策セミナーを数多く企画し実施した。教員採用対策セミナー，企業採用対策セミナー，その他のセミナーに分けてこれらの一覧を記す。

平成 25 年度　教員採用対策セミナー一覧

第 1 回	4 月 12 日(金) 13:20－14:50 B104 教室	大阪市教員採用試験説明会 【講師】藤原　和彦　氏(大阪市教育委員会) 参加者 8 名
第 2 回	4 月 12 日(金) 15:10－16:40 B104 教室	大阪府教員採用試験説明会 【講師】吉田　久芳(大阪豊能地区教職員人事協議会) 参加者 16 名
第 3 回	4 月 19 日(金) 13:20～14:50 B104 教室	堺市教員採用試験説明会 【講師】高山　宗寛　氏(堺市教育委員会) 参加者　5 名
第 4 回	4 月 19 日(金) 15:10－17:50 B104 教室	2013 年度　教員採用セミナー　面接試験対策 【講師】野中　正宏氏(東京アカデミー) 参加者 70 名
第 5 回	5 月 10 日(金) 12:20～13:10 B108 教室	横浜市教育委員会 【講師】結城　政信　氏(横浜市教育委員会) 参加者　9 名
第 6 回	5 月 10 日(金) 13:20～14:50 B108 教室	神戸市教員採用試験説明会 【講師】井谷　誠司　氏(神戸市教育委員会) 参加者　26 名
第 7 回	5 月 10 日(金) 15:10－17:50 B108 教室	教育時事対策 【講師】野田　登志子　氏(東京アカデミー) 参加者　68 名
第 8 回	5 月 17 日(金) 13:20～14:50 B104 教室	京都府教員採用試験説明会 【講師】磯和　宏憲　氏　(京都府教育庁) 参加者　8 名
第 9 回	5 月 17 日(金) 15:10－17:50 B108 教室	論作文試験対策 【講師】野中　正宏　氏(東京アカデミー) 参加者　53 名
第 10 回	5 月 24 日(金) 13:20～14:50 B104 教室	公立教諭・私立教諭の違いと採用選考 【講師】 中井　博之　氏　(学校法人共栄学園　理事長) 参加者　18 名
第 11 回	5 月　30 日(木) 13:20～14:50 B104 教室	福井県教育委員会からの説明会＆「保護者からみた先生」 【講師】高橋　克弘　氏・川畑　順一　氏(福井県教育庁学校教育政策課) 参加者　6 名
第 12 回	5 月 31 日(金) 15:10～16:40 B104 教室	洛南高等学校教員採用説明会 【講師】小林　宏樹　氏(洛南高等学校・附属中学校　国語課教諭) 参加者　3 名
第 13 回	6 月 7 日(金) 15:10～16:40 B104 教室	西大和学園高等学校　教員採用説明会 【講師】中岡　義久　氏(西大和学園) 参加者　2 名
第 14 回	6 月 7 日(金) 18:00～19:30 B104 教室	教員 OB セミナー 【講師】増井　貴明　氏(兵庫県神戸高塚高等学校　教諭) 参加者　21 名
第 15 回 (3 年生対象)	6 月 14 日(金) 13:20～14:50 B104 教室	教員採用ガイダンス 私立学校教員をめざすために～私学と公立の違い～ 【講師】光延　栄治　氏　(エデュケーショナルネットワーク　) 参加者　11 名
第 16 回 (3 年生対象)	6 月 14 日(金) 15:10～16:40 B104 教室	教員採用ガイダンス　公立学校教員をめざすために 【講師】伊藤　憲司　氏　(東京アカデミー) 参加者　19 名
第 17 回 (4 年生・M2 対象)	6 月 28 日(金) 13:20～14:50 B104 教室	先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷　章子　氏(紫陽会副会長　親和女子大学　非常勤講師) 参加者　27 名

第 18 回 (4 年生・M2)	7 月 5 日(金) 13:20～14:50 B104 教室	アンコールセミナー　先輩からうかがう面接試験ポイント 【講師】佐谷　章子　氏(紫陽会副会長　親和女子大学　非常勤講師) 参加者 25 名
第 19 回	10 月 11 日(金) 15:10～16:40 B104 教室	公立教員・私立教員の違いと採用選考 【講師】中井　博之　氏(学校法人共栄学園　理事長) 参加者 8 名
第 20 回 (3 年生向)	11 月 1 日(金) 12:20～13:15 B104 教室	横浜市教育委員会からの説明会 【講師】結城　政信　氏, 真田　純　氏(横浜市教育委員会事務局教職員人事部) 参加者　6 名
第 21 回	12 月　13 日(金) 17:00～18:30 B104 教室	教員採用試験の傾向と対策 【講師】伊藤　憲司　氏(東京アカデミー) 参加者　27 名
第 22 回 (3 年生向)	12 月 20 日(金) 12:20～13:10 B104 教室	教員採用説明会私立学校教員について知る～私立と公立の違い～ 【講師】矢萩　由香　氏(エデュケーショナルネットワーク) 参加者　9 名
第 23 回 (3年生対象)	12 月 20 日(金) 13:20～14:50 B104 教室	堺市教育委員会説明会 【講師】堺市教育委員会 参加者　6 名
第 24 回 (3年生対象)	12 月 20 日(金) 15:00～16:00 B104 教室	大阪市教育委員会説明会 【講師】大阪市教育委員会 参加者　5 名
第 25 回	2 月 7 日(金) 13:20～14:50 B212 教室	面接対策ガイダンス 【講師】伊藤　憲司　氏(東京アカデミー) 参加者　46 名

平成 25 年度　企業採用対策セミナー一覧

第 1 回	5 月 24 日(金) 15:10～16:40 B108 教室	インターンシップ情報収集ポイント～インターンシップここだけの話～ 【講師】武田　佳久　氏　(日経ナビ) 参加者　31 名
第 2 回	6 月 7 日(金) 13:20～14:50 F256 教室	就職活動について知る&自己発見講座　～就職活動について知る　～ 【講師】小西　紀子　氏(マイナビ) 参加者　20 名
第 3 回	6 月 7 日(金) 15:10～16:40 F256 教室	就職活動について知る&自己発見講座　－自己発見講座－ 【講師】林田　雄太　氏(リクナビ) 参加者　16 名
第 4 回	6 月 20 日(木) 13:20～14:50 B104 教室	Cyber-Agent　神戸大学学内セミナー　会社説明, インターンシップのご案内 【講師】大塚　一平　氏(Cyber-Agent) 参加者　2 名
第 5 回	6 月 28 日(金) 15:10～16:40 大会議室	インターンシップマナー講座 【講師】宮村　聡子　氏(キャリアサポートセンター) 参加者　16 名
第 6 回	7 月 5 日(金) 15:10～16:40 B201 教室	インターンシップマナー講座 【講師】宮村　聡子　氏(キャリアサポートセンター) 参加者　11 名
第 7 回	7 月 22 日(月) 13:20～14:50 B201 教室	OB・OG セミナー　どうしてこんなにも就活が長引いてしまったんだろう？ 【講師】　西井　開　氏(株式会社グリップインターナショナル) 参加者　7 名
第 8 回 (3 年生対象)	10 月 11 日(金) 13:20～14:50 B104 教室	グループディスカッション講座 【講師】笹記　由紀子　氏(キャリアサポートセンター) 参加者　23 名
第 9 回	10 月 18 日(金) 15:10～16:40 B104 教室	OB・OG セミナー　「企業で働く」ということ 【講師】門田　浩　氏(株式会社　オースビー) 参加者　11 名
第 10 回 (3 年生対象)	10 月 25 日(金) 13:20～14:50 B104 教室	「就職活動スタートアップ講座」～就職活動の流れとポイント～ 【講師】丸本　理恵　氏(マイナビ) 参加者　19 名

第 11 回	10 月 25 日（金） 15:10～16:40 B104 教室	「企業の探し方講座」～あなたの知らない優良企業の探し方～ 【講師】武田 佳久 氏（日経就職ナビ） 参加者 20 名
第 16 回	11 月 15 日（金） 13:20～14:50 B104 教室	直前対策セミナー ～本番直前！就活前半戦略～ 【講師】村田 雄太 氏（株式会社リクルートキャリア） 参加者 51 名
第 17 回	11 月 15 日（金） 15:10～16:40 B104	直前対策セミナー～ES の書き方講座～ 【講師】降矢 一朋 氏（ダイヤモンド・ビッグアンドリード） 参加者 54 名
第 12 回	11 月 19 日（金） 10:40～12:10 B104 教室	留学生の就活セミナー 企業が見る留学生と採用 【講師】松尾 誠二 氏（キャリアドゥ 大阪大学産学連携本部招聘准教授） 参加者 10 名
第 18 回	11 月 22 日（金） 13:20～17:20 B 棟 1F 受付	神大学内 in 発達科学部 業界研究セミナー 大阪めいらく, 関西国際学園, きちり, グッリプインターナショナル, ソフラ, ハイレクッスコーポレーション, フジテック, ミキハウスグループ 参加者 65 名
第 13 回	11 月 22 日（金） 17:30～18:30 B104 教室	直前対策講座 ～企業のリアルな情報を得るために～ 【講師】香田 祐介 氏（マイナビ） 参加者 41 名
第 14 回	11 月 24 日（日） 13:30～15:30 インテリジュエント ラボラトリ	神戸大学・大阪府立大学合同グループディスカッション研修 【講師】湯田平 隆 氏（株式会社ディスコ） 八田 みどり（大阪府立大学），田中 美恵（キャリアサポートセンター） 参加者 12 名
第 15 回	11 月 24 日（日） 16:00～18:00 インテリジュエント ラボラトリ	神戸大学・大阪府立大学合同グループディスカッション研修 【講師】湯田平 隆 氏（株式会社ディスコ） 八田 みどり（大阪府立大学），田中 美恵（キャリアサポートセンター） 参加者 13 名
第 19 回	11 月 30 日（土） 13:00～15:00 B210 教室	OB・OG セミナー 文部科学省で働く先輩から伝えたいこと 【講師】三木 仁史 氏（文部科学省生涯学習政策局 政策課 ） 参加者 3 名
第 20 回	12 月 5 日（木） 12:20～13:10 F264 教室	エントリーシート対策講座 基本編 【講師】丸本 理恵 氏（マイナビ） 参加者 46 名
第 21 回	12 月 5 日（木） 13:20～14:50 F264 教室	エントリーシート対策講座 応用編 【講師】丸本 理恵 氏（マイナビ） 参加者 32 名
第 22 回	12 月 23 日（月） 13:30～15:30 インテリジュエント ラボラトリ	神戸大学・大阪府立大学合同グループディスカッション研修 【講師】八田 みどり（大阪府立大学），田中 美恵（キャリアサポートセンター） 参加者 24 名
第 23 回	12 月 23 日（月） 16:00～18:00 インテリジュエント ラボラトリ	神戸大学・大阪府立大学合同グループディスカッション研修 【講師】八田 みどり（大阪府立大学），田中 美恵（キャリアサポートセンター） 参加者 23 名
第 24 回	1 月 9 日（木） 10:00～12:30 大会議室	就職活動におけるマナー講座 【講師】田中 美恵（キャリアサポートセンター） 参加者 14 名
第 25 回	1 月 9 日（木） 14:00～16:30 大会議室	就職活動におけるマナー講座 【講師】田中 美恵（キャリアサポートセンター） 参加者 17 名
第 26 回	1 月 16 日（木） 13:20～14:50 A 棟 D-Room	キャリア講座 世代をつなぐダイアログ ～世界の中の未来を共に語ろう～ 【講師】里 冶則 氏 参加者 14 名
第 27 回	1 月 29 日（水） 15:00～16:00 発達科学部 CSC	国立大学で働くことを考える！ 【講師】堀井 江梨子 氏（神戸大学本部総務） 参加者 4 名
第 28 回	2 月 4 日（火）	就活メイクセミナー～プロに教わるメイク術～

	14:00～17:00 B104 教室	【講師】杉本 淑江氏（POLA THE BEAUTY ガーデンライフ岡本店） 参加者 10 名
第 29 回	2 月 6 日（木） 12:20～13:10 B104 教室	グループディスカッション実践セミナー 入門編 【講師】湯田平 隆氏（株式会社ディスコ） 参加者 24 名
第 30 回	2 月 6 日（木） 13:20～15:20 B104 教室	グループディスカッション実践セミナー 実践編 【講師】湯田平 隆氏（株式会社ディスコ），田中 美恵（キャリアサポートセンター） 参加者 19 名
第 31 回	2 月 14 日（木） 14:00～16:00 A 棟中会議室	グループディスカッション実践セミナー 実践編 【講師】田中 美恵（キャリアサポートセンター） 参加者 11 名
第 32 回	2 月 20 日（木） 13:00～14:30 B104 教室	OB･OG セミナー 就職先ってどうやって決めたの！？ 【講師】岡 卓典 氏（神戸市役所勤務予定） 参加者 1 名
第 33 回	2 月 24 日（月） 13:00～14:00 A 棟 D-Room	香辛料メーカーでの研究者の働き方 【講師】渡部 昭彦 氏（ヤスマ株式会社商品開発部） 参加者 3 名
第 34 回	3 月 10（月） 14:00～15:30 B104 教室	OB･OG セミナー ～就活も大事だけど～今！外に飛び出そう！ 【講師】谷許 綾子 氏（兵庫県阪神北県民局 宝塚健康福祉事務所） 参加者 8 名

平成 25 年度　公務員対策セミナー一覧

第 1 回	6 月 21 日（金） 13:20～14:50 B101 教室	1･2 年生向け 公務員ガイダンス 【講師】森川 浩志 氏（東京アカデミー） 参加者 9名
第 2 回	6 月 21 日（金） 15:10～16:40 B103 教室	4 年生･M2 向け 公務員対策セミナー（面接） 【講師】森川 浩志 氏（東京アカデミー） 西川 嘉剛 氏，堀井 江梨子 氏（発達科学部総務） 参加者 16 名

平成 25 年度　その他セミナー一覧

第 1 回	5 月 7 日（火） 12:30～13:10 B104 教室	進路オリエンテーション 民間企業 【講師】宮村 聡子（キャリアサポートセンター） 参加者 16 名
第 2 回	5 月 8 日（水） 12:30～13:10 B104 教室	進路オリエンテーション 公務員 【講師】宮村 聡子（キャリアサポートセンター） 参加者 12 名
第 3 回	5 月 9 日（木） 12:30～13:10 B104 教室	進路オリエンテーション 教員 【講師】宮村 聡子（キャリアサポートセンター） 参加者 3 名
第 4 回	5 月 13 日（月） 12:30～13:10 B104 教室	進路オリエンテーション 民間企業 【講師】宮村 聡子（キャリアサポートセンター） 参加者 8 名
第 5 回	5 月 16 日（木） 12:30～13:10 B104 教室	進路オリエンテーション 公務員 【講師】宮村 聡子（キャリアサポートセンター） 参加者 4 名
第 6 回	5 月 17 日（金） 12:30～13:10 B104 教室	進路オリエンテーション 教員 【講師】宮村 聡子（キャリアサポートセンター） 参加者 18 名

（キャリアサポートセンター運営委員会委員長 高橋譲嗣）

5.1.2. 学振特別研究員申請支援

学生委員会の主催により，「学振特別研究員への応募のススメ」と題したセミナーを平成 25 年 4 月 9 日（火）14 時 15 分より開催した。

研究科長・岡田章宏教授の挨拶と激励の言葉に始まり，副研究科長・青木茂樹教授より特別研究員制度の概要についての説明，ついで稲垣成哲教授から審査員経験をふまえた申請書作成やヒアリングなどに関するアドバイスがなされた。その後，人間発達環境学研究科で採用されている特別研究員 2 名（DC2）による経験談や留意点などの紹介がなされた。

説明会には 24 名の学生および 1 名の教員が聴衆として参加した。参加者のモチベーションは非常に高く，活発な質疑応答が行われた。閉会後，本企画をより良いものにするためにアンケートを実施した。アンケート調査に際しては，あらかじめ，所属，学年，氏名，コメント等の記載・公開の可否を問うた。回答は自由記述によった。回収枚数は 18 枚で，そのすべてに感想・コメントが記載されていた。

なお，平成 26 年度特別研究員採用者は DC が 2 名（DC2-2 名，DC1-0 名），研究室移動を伴う PD が 2 名（うち 1 名は採用後に辞退）であった。

- 実施日時・場所

  日　時：平成 25 年 4 月 9 日（火）　14：15～15：50

  場　所：人間発達環境学研究科大会議室参加者：27 名

- 参加者：全 25 名

  博士後期課程：3 年 1 名，1 年 6 名

  博士前期課程：2 年 4 名，1 年 2 名

  学年不詳（学年欄未記入）：5 名（うち留学生 2 名）

  不詳（途中入室・退室）：6 名

  教員：1 名

- プログラム

14：15	開会の辞（梅宮弘光　学生委員長）
14：15-14：18	研究科長挨拶（岡田章宏　研究科長）
14：20-14：35	特別研究員制度の概要（青木茂樹　副研究科長）
14：37-14：52	審査・選考の実際―審査・経験者の立場から　稲垣成哲　教授）
14：52-15：02	質疑応答
15：02-15：17	申請・ヒアリングの実際―応募者の立場から（1） 学術振興会特別研究員　内田圭氏
15：19-15：34	申請・ヒアリングの実際―応募者の立場から（2） 学術振興会特別研究員　山田真世氏
15：34-15：44	質疑応答
15：50 頃	閉会

- アンケート結果（自由記述）

  以下に参加者から寄せられた「コメント・感想」を原文のまま掲載する（括弧内は参加時の学年）。

  - 私自身学振の制度に詳しくなく，今度の説明会は，それを知るよいきっかけになりました。内容は審査する側，審査される側の両側からされていて，理解が深まりました。体験談では，概要はもちろん，細かい how to まで知ることができ，自分が作成する際の参考になりました。（D1）
  - 短時間で応募のポイントをご説明いただきまして，ありがとうございました。詳細についてはHPで確認を再度させていただきます。応募経験者の具体的なプレゼンが大変参考になりました。（D1）
  - 実際に審査した方や，採用された方の具体的なお話が聞けて，すごくためになりました。ありがとうございました。（D1）
  - 申請書類の具体的なアドバイスがあったので理解しやすかったです。（D1）
  - この様な制度について全く知りませんでした。とても分かりやすく説明していただけ，希望が持てる内容でした。プレゼンテーションもよくわかりました。まだ進学したばかりですが，このような研究者志望者を対象とした研修会が時々あると非常に励みになります。発表者の方がとてもイキイキとして素晴らしく，元気が出て，自分の研究の刺激になりました。（D1）
  - 具体例も含めてお話ししていただいたので，非常にわかりやすかったです。次回はPDについても聞けるとう

れしいです。(D1)

- 制度が今年度から変わった点や審査時のチェック点を伺うことができて，申請前にさまざまなことに気をつけなくてはならないと実感した。(D3)
- 実際に採用された方の話がたいへんためになりました。他ではなかなか聞けないような細かい点まで教えていただくことができ，これから書類を書く私にとって，とても助かる内容でした。(M2)
- 非常に参考になりました。ありがとうございました。(M2)
- すぐ前に実際に応募された方からお話を伺えて，とても勉強になりました。面接のお話も両方知れて良かったです。資料を見せて頂けたのも有難かったです。(M2)
- 応募の意義から，具体的な方法まで知ることができ，何も知らない身としては非常に有意義な企画であったと思います。現役採用経験者のお話を聴けたことで，自分の今後のイメージがより具体的になるとともに，励みになりました。研究者を目指す方なら学年を問わず参加すべき企画だと思います。(M1)
- 経験をふまえ，審査の実態を詳しく話してくださったので，非常にわかりやすく，応募に対して具体的なイメージを描くことができました。先生にすすめられて今回の説明会に参加したのですが，学振特別研究員という制度についても全く知らなかったのですが，もし自分がドクターに進むことがあれば応募してみたいと感じました。(M1)
- 私は社会人としてフィールドを持っているからこそ，研究をどう続けていくかという自分のテーマを個人の問題ではなく，広い視野で検討するきっかけになりました。大学での研究生活だけをイメージしてしまいがちな学振の特別研究員ですが，研究を続けたいと考える人には，考え応募する意義があると感じた。何より，自分が思うだけでなく，研究テーマとして言語化，表現するのは大切である。(M，学年不明)
- 学振特別研究員に関する知識はゼロの状態で説明会に参加させていただきましたが，非常に有用な情報ばかりが入手でき，大変参考になりました。本当にありがとうございました。(無記載)
- 実際に審査を経験したことのある方の話を聞くことができ，より自分の研究を専門外の人にも理解できるような申請書作りを心掛けたいと思った。(無記載)
- 大変参考になった。もう少し開催が早いと良いかと思う。(無記載)
- たくさんの話を聞いて，少し自身がついてきました。これから，分野にこだわらず，いろいろな分野の知識を学んで，コツコツして優れる研究者を目指していきたいと思います。(留学生)
- 応募したいと思います。(留学生)

(学生委員会委員長　梅宮弘光)

5.2. 卒業・修了後の進路

平成 25 年度の発達科学部及び大学院人間発達環境学研究科修了生の進路は以下の通りである。なお，産業別就職者数，大学院進学者数などの詳細は『資料編』に記載した。

(1) 平成 25 年度人間発達環境学研究科博士課程後期課程修了生の進路　(単位：人・%)

区　分	a 進学者	a/g 割合	就職者						h その他	f/g 割合	g (a+f+h) 計
			b 企業	c 公務員	d 教員	e その他	f (b+c+d+e) 計	f/g 割合			
心身発達専攻		0.00			1		1	50.00	1	50.00	2
教育・学習専攻		0.00			2		2	50.00	2	50.00	4
人間行動専攻		0.00					0	0.00	2	100.00	2
人間表現専攻		0.00	1				1	100.00		0.00	1
人間環境学専攻		0.00					0	0.00		0.00	0
計	0	0.00	1	0	3	0	4	44.44	5	55.56	9

※その他の内訳：研究補佐員 1　非常勤講師 1　研究生 1　アルバイト 1　不明 1

(2) 平成 25 年度人間発達環境学研究科博士課程前期課程修了生の進路　（単位：人・%）

区　分	a 進学者	a/g 割合	就職者						h その他	f/g 割合	g (a+f+h) 計
			b 企業	c 公務員	d 教員	e その他	f (b+c+d+e) 計	f/g 割合			
心身発達専攻	2	12.50	4	3		1	8	50.00	6	37.50	16
教育・学習専攻	2	10.00	6	1	4		11	55.00	7	35.00	20
人間行動専攻	1	12.50	1	1	2	1	5	62.50	2	25.00	8
人間表現専攻		0.00	2	1			3	42.86	4	57.14	7
人間環境学専攻	5	13.51	15		6		21	56.76	11	29.73	37
		0.00	1		1	1	3	60.00	2	40.00	5
計	10	10.75	29	6	13	2	51	54.84	32	34.41	93

※その他の内訳：就職希望 15 進学希望 1 非常勤講師 4 帰国 3 進学準備 1 非常勤職員 4 研究生 1
教員採用試験受験 1 不明 2

(3) 平成 25 年度発達科学部卒業生の進路　（単位：人・%）

区　分	a 進学者	a/g 割合	就職者						h その他	f/g 割合	g (a+f+h) 計
			b 企業	c 公務員	d 教員	e その他	f (b+c+d+e) 計	f/g 割合			
人間形成学科	15	16.67	33	9	19		61	67.78	14	15.56	90
人間行動学科	3	5.77	38		2	1	41	78.85	8	15.38	52
人間表現学科	3	6.67	30	1	1	1	33	73.33	9	20.00	45
人間環境学科	31	27.19	57	10	8		75	65.79	8	7.02	114
計	52	17.28	158	20	30	2	210	69.77	39	12.96	301

※その他の内訳：非常勤講師 3 非常勤講師登録 2 講師登録 1 公務員受験 5 就職活動継続 9 教員採用受験 2 研究生 1
進学希望 3 大学入学 1 留学 2 青年海外協力隊 1 家事手伝い 1 不明 8

（学生委員会委員長　梅宮弘光）

6. 研究

6.1 今年度の特長

6.1.1 研究動向

(1) 本研究科教員の研究活動

本研究科における過去5年間の研究活動の実績は，下表のとおり，概ね順調に推移してきている。特に平成25年度の活動（平成26年5月段階でKUID等をもとに調査）は，「論文」「著書等」「研究発表等」「科学研究費事業への申請件数」のいずれにおいても，前年度の水準を上回っており，総じて本研究科の研究活動は活性化しているといえる。

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平均
論文	204	186	220	206	218	206.8
著書等	87	65	72	38	73	67
研究発表等	333	244	290	287	311	293
科学研究費助成事業への申請件数（継続を含む）	115	97	103	119	128	112.4
特許出願件数	0	1	0	1	1	0.6

(2) 本研究科の共同研究

こうした個々の研究活動とは別に，研究科として推進する組織的共同研究もまた，これまで以上に活発な活動を展開している。詳細は後述にゆだねるが，ここでは大まかな動きのみ紹介しておく。

1. プロジェクト研究

平成24年度より比較的大型の外部資金を得て本研究科教員を中心に共同で実施されつつあるプロジェクト研究は，本年度においても，その活動を積極的に拡大し，着実にその成果をあげつつある。

科学研究費補助金（A）「多世代共生型コミュニティの創成に資するアクティブ・エイジング支援プログラムの開発」を受けて進められる「多世代共生型コミュニティの創成研究」は，鶴甲地区の住民の生活実態を詳細に把握しながら，「健康」「社会参加」「安全」に関わる諸課題を具体的に発見し，解決に向けた活動を広く展開している。その成果の一部は既に国内外の学会で報告さると同時に，いくつかの論考として発表されている。また，後述のとおり，本研究を基盤にした他部局との連携も模索されている。なお，神戸市灘区からは，この活動のもつ社会的影響力を期待し助成金が交付されている。

同様に科学研究費補助金（A）「生活史法による臨床物語論の構築と公共化」を受けて進められる「ESDの基盤としてのライフヒストリーによる心理・教育支援」も，医学や教育にまたがる領域において顕在化する社会的諸問題の理解と解決にむけた心理社会支援プログラムを開発するため，本年度もまた開発国内外の研究者との共同研究を積極的に進めながら，その成果を国際シンポジウム等をとおして広く発信している。

（独）新エネルギー・産業技術総合開発機構の戦略的次世代バイオマスエネルギー利用技術開発事業として採択された「藻類バイオ燃料事業に関する共同開発」は，高速増殖型ボトリオコッカス藻「榎本藻」からのオイル生産の実用化をとおしてバイオマスエネルギー利用技術にかかるベンチャー創成型産学共同プログラムを開発するものであるが，本年度においては，航空機向けバイオ燃料の量産に向けた社会的期待がますます高まっている。

高度教員養成プログラムは，知識基盤社会をリードする高度な能力を備えた教員の養成という現代的課題の解決に資するため，附属校園を活用したアクションリサーチ等実証的研究をとおして修士レベルでの高度教員養成プログラムを開発するもので，平成24年度文部科学省特別経費を受けて開始された。本年度も，優れた研究者を招聘したセミナーを多数開催し研究内容を深化させると同時に，国内外の諸学会での報告を積極的に行いその成果の発信を行った。

2. 共同研究シーズの支援

本研究科では，研究科理念の実現と目標の達成に向け複数の教員が共同で実施する分野横断型学際研究を支援するため，「研究推進支援経費」「プロジェクト研究」「シンポジウム」という三つの支援経費を用意し，共同研究シーズの創出を促進している。本年度も，下記のとおり選定し，それぞれの共同研究の実施を支援した。

○「研究推進支援経費」

① 研究課題：マスターズ甲子園 2004－2013 プロジェクト実践による効果分析
研究代表者：長ヶ原誠
共同研究者：高田義弘，増本康平
決定額：500,000 円

② 研究課題：大量退職・大量採用時代における熟練教師から初任者教師への理科授業実践知識・技術の伝承モデル
研究代表者：山口悦司
共同研究者：増本康平，坂本美紀
決定額：500,000 円

○「プロジェクト研究」

① 研究課題：ESD の基盤としてのライフヒストリーによる心理・教育支援
研究代表者：末本誠
共同研究者：森岡正芳，渡部昭男，松岡広路，津田英二，伊藤篤，吉田圭吾，鳥居深雪，赤木和重
決定額：500,000 円

② 研究課題：環境ストレスと疾病リストを客観的に評価するシステムの開発
研究代表者：江原靖人
共同研究者：中村晴信，近江戸伸子，福田博也，齋藤恵逸，佐藤春実，脇田慎一，永井秀典
決定額：900,000 円

③ 研究課題：都市域における人と生物多様化のつながり
研究代表者：丑丸敦史
共同研究者：佐藤真行，山崎健，伊藤篤，高見泰興，源利文，伊藤真之
決定額：700,000 円

④ 研究課題：生活安全指標 Human Life Security Index の考案：質の高い生活を実現する人間環境の総合的研究とその指標化
研究代表者：井上真理
共同研究者：浅野慎一，岩佐卓也，稲葉太一，太田和宏，澤宗則，橋本直人，平山洋介，中川和道，加藤佳子，勅使河原君江
決定額：550,000 円

⑤ 研究課題：持続可能な発展に向けた市民による科学理解の深化に向けた基礎研究－確率論的推論理解を中心にして－
研究代表者：蛯名邦禎
共同研究者：田畑智博，岡部恭幸，坂本美紀
決定額：400,000 円

○「シンポジウム」

① 研究課題：グローバル社会における表現教育の困難性と今日的可能性を探る：授業を構造的に積み重ね，子どもの心に語りかける教育スペシャリストの挑戦
研究代表者：鈴木幹雄
共同研究者：塚脇淳，前田豊稔
決定額：250,000 円

② 研究課題：神戸大学大学院人間発達環境学研究科主催公開シンポジウム－発達研究の展望（その3） 発

達研究と現場実践との共創－「子ども」の心と発達をつかむ－
研究代表者：渡部昭男
共同研究者：木下孝司，川地亜弥子，赤木和重
決定額：240,000 円

(3) 他研究科との連携

①平成 25 年度博士課程教育リーディングプログラムへの申請

本研究科は，平成 25 年度博士課程リーディング申請プログラム「持続的循環に基づくものづくりのためのプロダクトマネージャー育成プログラム」（複合領域型 （横断的テーマ））に参加したが（参加研究科：工学研究科，農学研究科，人間発達環境学研究科），残念ながら不採択となった。

②神戸大学「アクションプラン 2013」に基づく「学長裁量枠定員【部局等発戦略分】プロジェクト」への申請（「1.2.1 アクションプラン 2013」参照）

本研究科はこの申請に向けて，下記のとおり 7 件のプロジェクトで他研究科と連携した（◎が代表部局）。

1) プロジェクト名：アーバン・ウェルビーイング研究プロジェクト
提案部局等名：◎人間発達環境学研究科，保健学研究科，システム情報学研究科

2) プロジェクト名：大学の研究力基盤としての学知の収集・蓄積・発信のためのミュージアム形成プロジェクト
提案部局等名：◎人文学研究科，国際文化学研究科，人間発達環境学研究科，附属図書館，情報基盤センター

3) プロジェクト名：附属練習船の研究・教育活用のための海の拠点プロジェクト
提案部局等名：◎海事科学研究科，内海域環境教育研究センター，人間発達環境学研究科

4) プロジェクト名：環境・エネルギー材料の界面科学教育・研究・地域連携プロジェクト
提案部局等名：◎工学研究科，理学研究科，人間発達環境学研究科，産学連携本部

5) プロジェクト名：ライフサイエンスイノベーション
提案部局等名：◎工学研究科，医学研究科，農学研究科，人間発達環境学研究科，国際文化学研究科

6) プロジェクト名：コミュニティにおけるボトムアップ型地域防災による安全・安心な都市・地域の創造
提案部局等名：◎都市安全研究センター，保健学研究科，人間発達環境学研究科，国際協力研究科

7) プロジェクト名：女性研究者支援加速プログラム実施プロジェクト
提案部局等名：◎男女共同参画推進室，理学研究科，工学研究科，農学研究科，海事科学研究科，人間発達環境学研究科，システム情報学研究科，自然科学系先端融合研究環

（人間発達環境学研究科長　岡田章宏）

6.1.2. 研究推進委員会

平成 25 年度，研究推進委員会は，4回の会議（引き継ぎ会議およびメール会議を含む）を開催した。会議ならびに業務内容のほとんどを，定期的に原稿募集・査読依頼・編集している「神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要」の刊行に関連する事項に費やした。

平成 25 年度に研究推進委員会が編集・刊行した研究紀要の概要は以下の通りである。

・2013 年 9 月 30 日，神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要第 7 巻第 1 号を発行した。研究論文 16 編（査読あり），研究報告 4 編（査読なし）を掲載した。

・2014 年 3 月 31 日，神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要第 7 巻第 2 号を発行予定である。研究論文 9 編（査読あり），研究報告 9 編（査読なし）を掲載した。

それに加えて，6 月に研究科における「研究推進支援経費」「プロジェクト研究経費」「シンポジウム経費」の選定を行った。

なお，次年度からは，紀要に関する業務全般は紀要編集委員会に引き継がれる予定である（「2.1 学部・大学院運営組織」参照）。

（研究推進委員会委員長　近江戸伸子）

6.1.3. 研究倫理審査委員会

本年度は 24 件の新規申請があり，すべてが承認された。

本年度の特徴として，申請に際し事前に委員会に相談するケースが増えたため，再申請もなく，全件承認された。また，申請件数は毎年度 20 件を超える程度で推移しており，本年度も同様であったが，本年度もこれまでに申請のなかった研究者からも申請があった。近年，研究倫理に対する厳正さが問われる状況となっている中，本研究科においては研究倫理に対する理解がさらに深まっていると思われる。

（研究倫理審査委員会委員長　中村晴信）

6.2. プロジェクト研究

6.2.1. 多世代共生型コミュニティの創成研究

本プロジェクトの目的は，分野を横断した研究者グループが自治体，住民と協働し，世代を超えた人々の参画のもと，健康を維持し，かつ社会参加ができる，安全な生活の場としての新しいコミュニティの創成を目指し，「健康」「社会参加」「安全」の 3 つの側面における支援プログラムを開発し，併せて支援プログラムの効果を検証することである。

本年度は，以下の表に示した活動を実施するとともに，鶴甲地区の 60 歳以上のすべての住民を対象にした日常生活と地域生活に関するアンケート調査を実施した。

開催日	プログラム名	プログラム概要
平成 25 年 6 月 16 日	第 2 回タウンミーティング 「防災とメンタルケア」	1）神戸市消防局灘消防署・崎山武彦氏，齋藤誠一先生の講演 2）「防災に関わる心構え等」に関する参加者との意見交換
平成 25 年 8 月 4 日	第 3 回タウンミーティング 「地域における人と人とのつながり」	1）保健学研究科・野田和惠先生，神戸市灘区社会福祉協議会・河野潔氏，松岡広路先生の講演 2）「まちづくり」に関する参加者との意見交換
平成 25 年 11 月 17 日	第 1 回アカデミックサロン 「開講式」	1）研究科長からの開講挨拶 2）頌栄保育学院院長・酒井哲雄先生の基調講演「日々を明るく，楽しく」 3）今後のアカデミックサロンに関する参加者との意見交換
平成 25 年 12 月 8 日	第 2 回アカデミックサロン 「健康ふれあいフェア」	1）平川和文先生の講演 2）健康および歩行チェック，健康体操などの体験，健康や栄養，靴の選び方の相談
平成 25 年 12 月 15 日	第 3 回アカデミックサロン 「ヒックス粒子について　―おもさ(質量)はなぜあるのか？―」	1）理学研究科・原敏雄先生の講演 2）質疑応答
平成 26 年 2 月 16 日	第 4 回アカデミックサロン 芸術フェスタ「ブラームスはお好き」	1）声楽アンサンブル 2）独唱，ピアノ演奏 3）音楽とダンスの共演 4）参加者の参加による踊りと合唱
平成 26 年 3 月 2 日	第 5 回アカデミックサロン 振り込め詐欺「あなたは大丈夫？」	1）桜美林大学 加齢・発達 研究所連携研究員の堀内裕子先生の講演 2）質疑応答
平成 26 年	第 6 回アカデミックサロン	1）古谷真樹先生の講演

3 月 16 日	「3月 18 日は春の睡眠の日　～短い昼寝と軽い運動でぐっすりねむろう！」	2) 質疑応答

本プロジェクトでは，昨年度に引き続き，2 回のタウンミーティングを開催し，住民の声を聞きながら，鶴甲地区が抱える「健康」「社会参加」「安全」に関わる課題を発見し，その解決に資するアカデミックサロンを開講した。アカデミックサロンの参加者の多くが高齢者であるものの，プログラム（アカデミックサロン）のテーマによっては大学生や小学生の参加もみられ，参加者の同志のコミュニケーションを図れる雰囲気も醸成されてきたと思われる。本プロジェクトの目的達成に向け，次年度のプログラムを展開する予定である。

（副研究科長　岡田修一）

6.2.2. ESD の基盤としてのライフヒストリーによる心理・教育支援

研究グループは ESD 研究の一環として，その実践理論的基盤となるライフヒストリーについて，これまでに 4 回の国際シンポジウムを企画し実施してきた。ライフヒストリーは，人生の出来事を聞き取り，個人史を記述する実践が個人の自己形成に意味を持つことを重視する，実践＝研究的方法である。この国際シンポジウムでは，本邦ではかつて未紹介であったフランスのライフヒストリー（histoire de vie）の基本的な観点と，社会教育，環境教育，教育臨床における実践を討議してきた。これらのシンポジウムを通じて，ライフヒストリーがいかにして自己の固有の時間を超え，世代を繋ぎ未来生成的なものになっていくかが議論され，持続可能な社会づくりを目指すうえで，いかに個人の自己形成が可能かを明らかにする原理的な意味が明らかにされてきた。

ライフヒストリーは出来事の線形的編年体ではなく，重層的，構造的にとらえるための原理や方法論を探る。本プロジェクトは臨床的視点をライフヒストリーに統合することによって，方法として具体化し重層的な記述方法を磨くことが目標である。実践方法としてのライフヒストリーは，当事者の視点に立った支援の道筋を描くことができる。この特徴は，本研究科における ESD の実践＝研究の支持基盤の広がりにリンクする。

(1) 本研究科における共通の研究的基盤の広がりの確認と相互交流

ナラティヴおよびライフヒストリー研究は，近年，各学問分野で関心を集めており，それは本研究科においても見られる事柄である。これは ESD 研究を含む，本研究科における課題を共有しつつ行われる学際的な研究発展の条件といえる。欧米では，この種の研究が活発に展開している。しかしながら日本の現状では，各研究領域が縦割りになり，課題の共有や研究の相互交流は不十分である。この傾向は本研究科においても同様に見られることから，本プロジェクト研究においてはナラティヴ，ライフヒストリーを共通の方法論とするメンバーによる交流の場づくりを目指し，合同の研究会を開いた。また臨床心理学を専攻する大学院生向けに，成人教育領域での研究方法としてのライフヒストリー研究の位置づけを講義する取り組みをした。

(2) 学術 WEEKS2013 への参加

本プロジェクト研究として，学術 WEEKS2013 に参加した。この取り組みは上記のフランス語圏から専門家を招致した国際シンポジウムの 5 回目にあたるものであり，今回はフランスからリール第 3 大学の Niewiadomski 教授をお迎えし，二つの基調報告『精神的健康領域における臨床ナラティヴの貢献』及び『社会的不平等と臨床ナラティヴ：アルコール依存者たちへの伴走』がなされた(2014 年 1 月 31 日-2 月 1 日)。また学内外から多数の研究者が集まり，津田英二『ナラティヴが意味を持つ場の創出へ：障害の問題の社会的共有に向けて』の発題を含め，活発な議論を行った。「伴走」の実践に関わる基調報告の射程距離は幅広く，さまざまな領域での対人支援に関連する議論があった。

（研究代表者：末本誠，森岡正芳）

6.2.3. 高度教員養成プログラム

(1) 目的

高度教員養成プログラムは，平成 24 年度文部科学省特別経費「高度な専門職業人の養成や教員養成機能の

充実」，事業名「大学院修士課程における高度教員養成プログラムの開発 −21 世紀型知識基盤社会をリードできる教員の養成を通して−」を発展的に継承したものとして，平成 25 年度に実施されたものである。正式名称は，「大学院前期課程における参画型実践研究を基盤とする高度教員養成プログラム」であった。知識基盤社会をリードできる高度な能力を備えた教員の養成は極めて重要な課題であり，その解決に資するため，附属校園等を活用したアクションリサーチによる実証的研究とコースワークに基づいた修士課程レベルにおける高度教員養成プログラムの開発を目的とした。

(2) 実施体制と参加者

実施体制は，人間発達環境学研究科，発達科学部，附属学校部であり，参加学生は，人間発達環境学研究科の博士課程前期課程に在籍し，修士論文として，附属校園を活用したアクションリサーチによる実証的研究に取り組むとともに，将来教職を目指すものとした。

(3) プログラムの内容

プログラムの内容は，内外の優れた研究者を招聘した高度教員養成セミナー7 回への参加を基本としながら，学生がそれぞれの研究関心に即して，アクションリサーチを展開し，その成果を内外の学術学会に発表することであった。

以下には，7 名の参加学生によるアクションリサーチの研究テーマを列挙している。なお，( )内は，連携先である。

・幼小連携に関する保育実践研究－音楽表現を中心に－ （京都府幼稚園）
・幼児の数概念の発達に関する研究 （神戸大学附属幼稚園など）
・理科教育施設としての動物園における飼育展示観察支援のデザイン研究 （旭山市旭山動物園）
・科学的探究における問いの生成を支援する小学校理科授業のデザイン研究 （神戸大学附属住吉小学校）
・コンテンポラリー・ダンスを取り入れた表現運動の授業構成と授業評価 （神戸大学附属住吉小学校）
・小学校児童を対象とした走動作の評価方法作成と分析 （奈良県王寺町立王寺小学校など）
・「親育ち」の視点における子育て支援の関わりと効果について （神戸大学附属幼稚園）

(4) 修了認定

上記のプログラムへの参加要件を満たした学生には，修了認定書を発行した。本年度は，7 名の参加者全員が修了認定された。

(5) 研究発表等業績

本プログラムからの支援を受けて，国際会議，国内学会等に発表された主要なものは以下の通りであった。

中橋葵(2014)「幼児期における数概念の発達-概念的サビタイジング能力に着目して-」，近畿数学教育学会第 55 回春季例会，兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス(2014/2/22)

藤掛絢子・北野幸子 (2013) 「コーナー遊びに関する保育実践研究−音楽表現を中心に−」『日本保育学会第 66 回大会発表要旨集』725，中村学園大学,中村学園大学短期大学部(2013/5/11,12)

藤掛絢子・北野幸子 (2013) 「好きな遊び場面を起点とした保育実践開発研究−音理解から表現へ−」『日本乳幼児教育学会第 23 回大会研究発表論文集』320-321，千葉大学教育学部・(2013/11/23,24)

辰巳純平・國土将平(2014)「小学生の全力疾走における走動作の特性」『日本発育発達学会第 12 回大会プログラム・抄録集』68，大阪成蹊大学(2014/3/15/16)

萩原大河・関典子(2013)「コンタクトワークを取り入れた表現運動の授業実践」第 65 回舞踊学会大会，愛知芸術文化センター(2013/12/7)

中新沙紀子・山口悦司・村山功・坂本美紀・山本智一・神山真一・村津啓太・稲垣成哲(2013)「科学的な問いの生成を支援する小学校の理科授業：第 6 学年「燃焼の仕組み」の事例」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 28 号，第 2 巻，45−48(2013/11/23)

中新沙紀子・山口悦司・村山功・坂本美紀・山本智一・神山真一・村津啓太・稲垣成哲(2013)「科学的な問いの生成を支援する授業のデザイン研究：科学的原理・法則のメタ理解に着目して」『日本理科教育学会第 63 回全国大会発表論文集』第 11 号，316，北海道大学(2013/8/11)

中新沙紀子・山口悦司・村山功・坂本美紀・山本智一・神山真一・村津啓太・稲垣成哲(2013)「科学的な問いの生成を支援する理科授業デザインの改善」『平成 25 年度日本理科教育学会近畿支部大会発表論

文集』112, 和歌山大学教育学部附属中学校, (2013/11/30)

山橋知香, 山口悦司, 稲垣成哲, 奥山英登, 田嶋純子, 堀田晶子, 田中千春, 坂東元(2013)「動物園来園者の観察を支援する紙芝居:旭山動物園のペンギン展示を事例とした予備的分析」『日本理科教育学会第 63 回全国大会発表論文集』第 11 号, 238, 北海道大学(2013/8/10)

Yamahashi, C., Yamaguchi, E., Kuroda, H., & Inagaki, S. (2013). Characteristics of science picture books liked Japanese children in early childhood. Poster session presented at European Science Education Research Association 2013 Conference, Cyprus.

University of Cyprus(2013/9/6)

山橋知香, 山口悦司, 稲垣成哲, 奥山英登, 田嶋純子, 堀田晶子, 田中千春, 坂東元(2013)「動物園来園者の観察を支援する紙芝居の評価:面接調査を通して」『日本科学教育学会研究会研究報告』第 28 号, 第 2 巻, 85−88. (2013/11/23)

山橋知香・山口悦司・稲垣成哲・奥山英登・田嶋純子・堀田晶子・田中千春・坂東元(2013)「動物園来園者の観察を支援する紙芝居の評価:質問紙調査を通して」『平成 25 年度日本理科教育学会近畿支部大会発表論文集』, 100, 和歌山大学教育学部附属中学校(2013/11/30)

(6) 社会的に評価された研究

(7) 広報

本プログラムのすべての内容は, 研究科 HP より情報を発信した。

http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/node/1568

(旧教育・学習専攻長 稲垣成哲)

6.3. 研究科が支援する共同研究

6.3.1「プロジェクト研究」

(1)ESD の基盤としてのライフヒストリーによる心理・教育支援

(タイトルのみ表記・内容は省略)

(2)環境ストレスと疾病リストを客観的に評価するシステムの開発

本プロジェクト研究は, 人間の健康の維持, および心理的, 物理的疾病の予防を目指し, ストレス(心理的要因, 物理的要因(電磁波, 紫外線他)など)や, 疾病のリスクを迅速かつ客観的に定量化し評価できるシステムを構築することを目的とした。一例として, インフルエンザウイルスの検出システムの開発を始めた。医療機関で用いられる従来のインフルエンザ診断キットにおいては, ウイルスに対する抗体が塗布されているが, 抗体は製造に時間とコストがかかり, また安定性も十分ではない。また変異したウイルスに対しては感度が低下する可能性も指摘されている。本研究では, インフルエンザウイルス表面に存在するヘマグルチニンタンパク質を認識する人工核酸を種々の担体に固定化することにより, 抗体よりも安定でかつ, ヒト型, トリ型, またこれらが変異した新型ウイルスに対しても検出が可能になるとの仮説のもと, 研究を行った。その結果, 種々の亜型のインフルエンザウイルスの検出が可能であることが確認された。

(研究代表者:江原靖人)

(3)都市域における人と生物多様化のつながり

世界的に, 都市では生物多様性の著しいスピードで生物多様性が減少している。これを受け, 本プロジェクトでは, 都市の市民にとって生物多様性が身近に存在していることがどのような意味を持つのか, 一年間を通して学際的に議論を行った。年度末には「都市と生物多様性」研究会を開催し, 学外から 3 名の研究者を招待し, 都市における生物多様性の位置づけについて議論をかわした。その中で, アジアの大都市圏では生物が減少していること, 生物多様性は都市市民へ多様な生態系サービス(景観形成, 癒し)を供給している可能性がある一方で, 時には市民との間でコンフリクトを生じさせることがあることがわかってきた。また, このプロジェクト研究を通じて, 都市での生物多様性の減少が植物の進化を促進しうることを発見した研究結果を論文としてまとめることができた。

（研究代表者：丑丸敦史）

(4) 生活安全指標 Human Life Security Index の考案：質の高い生活を実現する人間環境の総合的研究とその指標化

本プロジェクト研究では，「人間発達」およびそれを支える「人間環境」の視点に立って安心して暮らせる生活とはいかなるものか，またその実現のためにはどのような条件が必要か，そこでの課題は何かについて，総合的に検討した。年間を通じ4度の研究会で9人の発題者から問題提起を受けて議論を重ねた。社会科学，人文学，自然科学等，異分野の研究メンバーが意見を交換する中で，現状をよりリアルに分析する際の学際的知見を融合させていくことの有用性，生活における安全・安心の基準を既存概念に拘泥せずむしろオルタナティブな発想で構想することの重要性，さらには基準設定，数値化という作業自体の持つ政治性に対する自覚の必要を確認することができた。こうした成果に立ちながらも，生活の安全・安心を項目化し指標化する具体的作業は，今後の継続的取り組みに委ねられることとなった。

（研究代表者：井上真理）

(5) 持続可能な発展に向けた市民による科学理解の深化に向けた基礎研究

① 研究目的

地球環境問題への新たな国際的な研究構想として， ICSU(国際科学会議)などが推進する Future Earth が始動し始めたが，そこでは個別に研究を進めてきた多分野の科学者を結集させるだけでなく，政策担当者や市民など多くのステークホルダー間の連携を強めることが強調されている。その場合の課題の一つとして，論争的な環境問題における科学研究結果の市民への受容の問題がある。環境問題に現われる自然現象は一般に複雑であり，科学研究の結果は必ずしも直観的に受け入れ可能なものとは限らない。したがって，単に研究の結果だけを受容するのではなく，その科学的な推論過程も含めて理解することが望ましい。一般に，科学研究における推論には確率論的構造が埋め込まれており，とくに，複雑で不確実な結果を理解するには，特にそのベイズ的な構造の理解が欠かせない。本研究では，科学研究における推論のベイズ的な構造を一般市民が共有できるようにするためには何が必要かを理論的および実践的に探ることを目的とした。

② 研究の実施体制

本研究のコアメンバーは，蛯名邦禎，田畑智博（人間環境学専攻），岡部恭幸，坂本美紀（人間発達専攻）であり，それぞれ，確率論の理論的な枠組み，確率・統計教育の改善，授業における論争的な課題の取り扱い，ライフサイクルアセスメントなどの視点から研究を進めた。また，地球環境問題の解決のための実装へ向けた将来展開の構想について，議論した。その過程で，サイエンスショップの伊藤真之，源利文，および総合地球環境学研究所（地球研）の谷口真人氏と密接に討論した他，学内から農学研究科，都市安全研究センター，附属小学校，学外から香川大学，宮崎大学，兵庫教育大学，人と自然の博物館，兵庫県立高等学校，University of California Berkeley, Lewis & Clark College, University of British Columbia などの研究者と討論を行いながら研究を進めた。さらに，兵庫県教育委員会，兵庫県土整備部土木局，米国オレゴン州の Center for Research in Environmental Science and Technology および River Hood Middle School に，今後の展開に向けた予備的な取材を行った。

③ 実施した研究内容

平成 25 年度における研究実施内容は，(a) 文献等による情報収集，(b) コアメンバーによる分担した研究の推進，(c) 取材と実践的な活動を通じた知見の収集，(d) 将来の研究展開へ向けた構想の議論，などである。

(a) 文献等による情報収集：

科学的活動とはどのようなものかについて考究した科学哲学の基礎的な文献，ベイズ的アプローチによる確率論の発展に関する文献，科学教育や数学教育における確率・統計の扱いや論争的な問題の取り扱いに関する文献を分析した。また，環境問題におけるフレーム齟齬とその解決方法へのアプローチに関する文献の分析を行った。これは，現在も継続して実施中である。さらに，Future Earth に関する国内外の動向に関する知見を得るために谷口真人氏（地球研）によるセミナーを，地球温暖化問題におけるフレーム齟齬に関する知見を得る

ために江守正多氏(国立環境研)によるセミナーを実施した。

(b) コアメンバーによる分担した研究の推進:

1) 研究の推論過程で確率論的な認識の重要性を明らかにするために, 確率論的な思考法, 特に確率分布の理解がどの程度学校教育の中で扱えるか, またどのように教育することが可能か, 教育の場の設計の観点から先行研究を検討し, 小学校における確率分布の考え方を含む教材の開発の意義と可能性を明らかにした。(岡部) 2) 小学校高学年を対象として, 環境問題や科学・技術に関する論争的問題を扱った総合学習の実践研究を行い, 科学的証拠を解釈し結論を導き伝達する力, 科学やテクノロジーの発展の社会的意味を考える力の育成を目指した。科学技術や環境問題などの「公共的」な課題に対して, 学んだ科学的証拠に基づいて子どもなりの解決策を創出する協調学習の授業を開発し, 総合的な学習の時間における実験授業を通じて成果評価を行った。(坂本) 3) 銀行への預金を題材として, ライフサイクルアセスメント(LCA)手法を用いた預金のライフサイクルに伴う二酸化炭素 (CO2) 排出量を試算し, 銀行により運用され, 民間企業等に融資されることで発生する預金の経済波及効果に伴う CO2 の排出も加味した結果, CO2 排出量の合計は 291.0 百万 t- CO2/年となり, 預金 1 円当たりの CO2 排出量は 0.82g- CO2 となった。経済波及効果を加味した CO2 排出量は, わが国の年間 CO2 排出量の 23.2%に相当することから, 預金が CO2 排出に及ぼす影響は大きいことが示された。(田畑) 4) 科学研究の進め方における確率判断の役割を分析し, 科学的成果の一般受容において確率リテラシーの重要性を議論した。また, 確率的な現象の時系列の解析方法に関する方法論の改善の議論を行った。(蛯名)

(c) 取材と実践的な活動を通じた知見の収集:

今後展開すべきフィールドとして, 流域圏における学校生徒や地元住民の相互作用的な活動のモデルとして, 兵庫県の流域圏に関して, 県土整備部土木局, 県教育委員会事務局などを, 外国におけるモデルとして米国オレゴン州の Trillium Creek Primary School, Hood River Middle School を取材した(オレゴン州の取材にあたっては, 地球研からのサポートも受けた)。また, 兵庫県西部の佐用川における住民と生徒の活動について取材した。

(d) 将来の研究展開へ向けた構想の議論:

今後の確率リテラシーの涵養のためのフィールドとして, 兵庫県における 15 ほどの流域圏に流域圏ステーションを設置し, 高校生などの課題研究での調査・学習の拠点とするとともに, 外部からの職業的研究者, 地域住民, 小中高の教員, 地元企業の関係者, 地元自治体などの人々の交流の場を展開し, 確率リテラシーの実践的な教育プログラムの開発する構想について研究グループを立ち上げ, 議論を進めた。また, この構想の一端を, 3 月 8 日に開催された第 1 回未来社会を担う人材育成のための多角連携フォーラムで紹介した。今後は, 確率リテラシー教育の理論的な枠組みの構築と同時に, 外部資金などを獲得して実践的に展開するための基礎を構築していく予定である。

④ 研究発表等業績

本プロジェクトの一環として学会等に発表された主要なものは以下のとおりである。

岡部恭幸 (2014)「小学校における確率教材についての考察 ―確率分布に着目して―」, 2013 年度数学教育学会春季年会発表論文集 pp.58-60

中尾慶, 田畑智博 (2014)「我々の預金に伴いどれだけの CO2 が排出されるか?」, 環境科学会誌, 投稿中。

蛯名邦禎 (2013)「計算性能のもたらすものは何か」, 科学基礎論学会 2013 年度総会と講演会ワークショップ「High Performance Computing の哲学」(大阪大学大学院人間科学研究科(吹田キャンパス))

蛯名邦禎 (2014)「計算機シミュレーションの結果をどう理解すべきか ―科学コミュニティ内と一般社会における受容―」, 日本物理学会第 69 回年次大会 講演概要集第 4 分冊 27pAH-9

蛯名邦禎 (2014)「未来の市民と未来の科学者育成のための多角連携構想」, 第 1 回 未来社会を担う人材育成のための多角連携フォーラム(2014.03.08)における講演

K. Umemura and K. Ebina (2014): JPS Conf. Proc., 1, 019006: Multi-scale stochastic modeling of dynamics of a time-averaged variable

(研究代表者:蛯名邦禎)

6.3.2「研究推進支援経費」研究

(1)マスターズ甲子園 2004－2013 プロジェクト実践による効果分析

本研究では，イベント開発・運営，啓発・キャンペーン，推進組織の開発・運営で構成されるマスターズスポーツの推進事業が，どのような個人・集団・社会レベルでの効果を生み出すのかを明らかにすることを目的とし，2004年から実施してきた「マスターズ甲子園プロジェクト」を活用し，本プロジェクトの3主要事業であるイベント開発，組織活性化，キャンペーンによる総合効果を検証した。大会参加者・ボランティア・地方組織運営者への調査に加え，掲載メディア情報の内容分析や，支援・協力団体に対する反応分析，大会ホームページ情報のメッセージ分析を用いながら量的・質的に分析を行った。得られた結果と成果は以下に集約される。

(a) アウトカム指標として設定した，1）個人のライフスタイル活性化（夢への再挑戦による個々人の生き甲斐と活力ある人生），2）地域の活性化（地元高校を軸とした同窓会と世代間交流の活性化，地元・母校への帰属意識・愛着心の向上），3）社会の活性化（生涯スポーツ文化，OB/OG文化，熟年文化の発展への寄与），4）教育の活性化（ユース世代へのスポーツ文化の継承と応援メッセージの発信），以上の4つに関連した各種の効果を，掲載メディア・HP等のメッセージ情報の内容分析により確認した。

(b) 関係者からの言語データ分析により，「楽しさ・喜び・快感情」，「行動的・認知的変容」，「成長・成熟」，「社会的交流」，「活力ある社会」，「ポジティブな加齢観と加齢観の成熟」といったアクティブ・エイジングに関わる個人的・社会的便益が確認された。

(c) これまでの老年医学的視点からの運動による身体的効果に加え，中高齢期においてより組織化・競技化されたスポーツへの参加がもたらす人生での意義を確認し，活動的に年を重ねること，その支援の意義を社会的・文化的観点から実証した。

（研究代表者：長ヶ原誠）

(2) 大量退職・大量採用時代における熟練教師から初任者教師への理科授業実践知識・技能の伝承モデル

我が国は，団塊世代の教員の大量退職に伴い，初任者教員の大量採用時代を迎えている。科学教育の教師教育研究という観点からすれば，これは世界で初めての経験である。学術的ならびに社会的に危惧されているのは，日本の教育水準の高さを維持するための基盤とみなされてきた教師文化のうち，優れた教育や授業を行うための実践知識・技能の伝承が途絶えてしまうことである。 しかしながら，このような問題に着目した科学教育研究は，その重要性にも関わらず，空白領域である。このため，熟練教師が持つ理科授業実践知識・技能を初任者教師へと伝承することについて，それを分析したり支援したりするための理論的モデルが世界的にも未開拓の状況である。そこで，本研究では，科学教育分野の研究者と高齢者心理および発達心理という異なる専門分野の複数の研究者が総合的・学際的にアプローチすることで，上記の課題に取り組んだ。教師の知識・技能に関する研究資料の分析・比較を通して，暫定的な理論的モデルを策定した。

（研究代表者：山口悦司）

6.3.3.「シンポジウム」

(1) グローバル社会における表現教育の困難性と今日的可能性を探る：授業を構造的に積み重ね，子どもの心に語りかける教育スペシャリストの挑戦

1) シンポジウム支援経費申請タイトル：
グローバル社会における表現教育の困難性と今日的可能性を探る：授業を構造的に積み重ね，子どもの心に語りかける教育スペシャリストの挑戦

2) 連続シンポジウム実施時タイトル：
スペシャリストの挑戦　今日的困難性の下で表現教育の可能性を探る

3) 開催組織構成員：
鈴木幹雄（神戸大学）：専攻：人間発達専攻（学び系講座），専門分野：芸術教育学・教育学
塚脇　淳（神戸大学）：専攻：人間発達専攻（表現系講座），専門分野：造形表現論・立体造形論

前田豊稔(甲南女子大学):専攻:総合子ども学科, 専門分野:美術的表現力の構築についての学習論

4) 講演者・紹介者:

・大津雅子先生(尼崎市教育マイスター, 大島小学校)

・김양숙(書体:AppleMyungjo)(女性) : 金良淑 Kim Yang Suk 先生(ウルサン外国語中等学校, 美術教育教員)(韓国側教員)

・南城 守(奈良県立美術館・学芸課長)

・宮川紀宏先生(京都市立宇多野小学校)

韓国側紹介者:趙美玉先生(現神戸韓国教育院院長)(以上, スケジュール順)

5) シンポジウム 趣旨・目的:

(a) グローバル社会を志向する現代社会の歩みの下, 教育の世界には, その本来の理念に反して主要教科学力主義と教育の隘路が作られてきた。しかし現代社会は, 子ども達の多様で多元的な内面世界と人間性を必要としており, 社会の為にも子ども達の成長の為にも, 所謂「主要教科」と芸術的教科とを統合的に, しかも豊かに開花させることが求められている。

(b) そこで本シンポジウムにおいては, 表現教育の困難性に立ち向かう日韓芸術教育界のリアリズムを踏まえて, 子どもの人間性, 並びに彼らの情感の次元と理知の次元を統合的に育む表現教育の為の現実主義的なアプローチの芽(「未来展望の芽」)がどのような形で暖められているか, また指導力量を抱えた表現教育実践者はそのアプローチをどのように育んできているか, この点を日韓の表現教育界に即して探り出す。

(c) そこで本年度は, この現実主義的なアプローチの芽に関連し, ①両国の指導的で, 豊かな指導力量を持つ表現教育実践者達がそのアプローチを長年の蓄積の中でどのように育んできているか, 加えてまた②その力量を次世代の教員育成の中でどのように伝えようとしているか, をテーマに研究する。

6) 2013 年度 日韓表現教育シンポジウム・開催日スケジュール:

会場:人間発達環境学研究科大会議室／B-208 教室／F-251 教室

カテゴリー1:今日的困難性の下で表現教育の可能性を探る

月日	3時限目(13:20-14:50)	題目
1／20(月)	大津雅子先生	授業の創造―子どもと創る―
1／27(月)	金良叔先生김양숙(書体:AppleMyungjo) (女性)	疎通と配慮の美術, 90%のためのデザイン-感性的なデザインで理性的な責任感を創出しよう！-
2／3(月)	宮川紀宏先生	図画工作の授業デザインと実際

カテゴリー2:表現教育を支える視角と現代性＊

月日	3時限目(13:00-14:50)	題目
1／29(水)	南城 守先生	デッサンとは何か―ものの見方と考え方

(＊:H25 子ども発達論コース・シンポジウム, タイトル:「子どもの表現教育・そして子どもの心に語りかける仕事」(第2部)の後援)

7) 参加人数:

		計	総計
1／20(月)	大津雅子先生	37	37
1／27(月)	金良叔先生김양숙(書体:AppleMyungjo)	36	73
2／3(月)	宮川紀宏先生	38	111
1／29(水)	南城 守先生	85	196

(代表者:鈴木幹雄)

(2) 発達研究の課題(その 3):発達研究と現場実践との共創(コラボレーション)―「子どもの心と発達」をつかむ

1) 日　時:2013 年 12 月 14 日(土)10～17 時
2) 場　所:兵庫県学校厚生会館
3) 申込み:120 余名(滋賀・京都・和歌山・奈良・大阪・兵庫など／10～70 歳台／研究者, 教員, 保育士, 福祉職員, 心理士, 言語聴覚士, 看護師, 学生・院生, 出版関係者, 会社員など)
4) 概要と成果

2011 年度より連続開催している公開シンポジウム「発達研究の課題」の「その 3」として,「発達研究と現場実践との共創(コラボレーション)」と題して,「「子どもの心と発達」をつかむ」ことを企図した。

午前中の第一部「教育実践の創造と生活綴方」では, 西條昭男氏(元小学校教員)から「子どもと教育の閉塞的状況下における教育の創造―希望としての生活綴方」と題したご講演をいただいた。午後の第二部「読み解けば見えてくる自閉症児の心と発達」では, 熊本重勝氏(小学校教員)から同タイトルのご講演をいただいた。その上で, 本研究科の川地亜弥子准教授が「子どもたちと共に生きる, 子どもたちのつぶやきを聴く, 子どもたちの表現を育てる」, 赤木和重准教授が「何か違う！ 何が違う？―熊本実践を読み解く」とのコメントを行い, 参加者も交えて総合討論を行った。

子どもの心(内面世界)と発達をどのようにつかむのか, 発達研究と現場実践とが協働する企画の意義は大きく, 参加者からも好評を得た。なお, 当日配布の資料冊子は閲覧できるように, 附属人間科学図書館に収蔵した。

(人間発達専攻・学び系:渡部昭男・木下孝司・川地亜弥子／こころ系:赤木和重)

6.4. 各専攻の研究

平成 25 年度において行われた各専攻における特徴的な研究, プロジェクト研究等について掲載する。

6.4.1 こころ系講座(旧心身発達専攻)

旧心身発達専攻における研究の特徴は以下の通りである。

- 発達障害の心理的支援の研究領域では, 北海道大学との発達障害支援の共同研究, 新潟私立幼稚園との共同研究「幼児の実態調査」や, 神戸市立幼稚園との共同研究「ユニバーサルな発達障害支援グランドデザイン」などの共同研究を積極的に行っている。
- 疾病予防の研究領域では, 近畿大学の学齢期の体組成の共同研究を行っている。
- 生涯発達心理学の領域では, 神戸淡路大震災の頃から続けてきた大震災による PTSD 研究を, 東日本大震災による PTSD 研究として発展させている。特に福島県の養護教諭の会合と連携を持ち, 大震災や津波, 放射能などが引き起こす不安の研究, 及び養護教諭による心理教育的支援のあり方の研究は特筆すべきであろう。津波と比較して目に見えない被害や不安である放射能の問題は, 福島県では言葉にできないが深い不安や悩みを引き起こしており, 研究を継続することで福島県への支援という意味も含んでいる。一年間に数回福島県に行って共同研究会をするとか, 福島県から招いて講演会や研究会を開催するなど, 精力的に活動を行っている。
- 臨床心理学の領域では, 聴覚障害者の心理支援や, 児童養護施設における子どもの心理支援, 虐待や反応性愛着障害への対処法などについて, 研究を進め, 学会で報告している。また, 心理検査としてのロールシャッハ法の発展に向けて, 特に阪大法について勢力的に研究している。また, 教育臨床の領域でも, 兵庫県の臨床心理士会の要請を受けて, スクールカウンセラーの教育研修のあり方, スクールカウンセラーの緊急支援のあり方, 緊急支援の実際について研究を進めている。
- 教育心理学の分野では, 理科の授業デザインに関して, 科学的な問いの生成を支援する方法について, 教師との共同研究を通して精力的な研究を行っている。
- 発達障害児心理学の領域では, 発達障害を抱える子どもの発達に関して, 対話型シナリオによる教員養成型 PBL 教育の研究を進めている。
- 健康心理学の領域では, 全学協定校であるグラーツ大学, 部局間協定校であるグラーツ医科大学と健康に関連する生活の質(Health　Related Quality of Life: HR-QOL)をテーマに研究や実践活動を行っている。

神戸大学工学研究科や保健学研究科とも連携をとっており，学際的な展開が図られている。また，カロリンスカ研究所とも学術交流を進めている。

（こころ系講座主任　吉田圭吾）

6.4.2 学び系講座（旧教育・学習専攻）

今年度の学び系の研究活動として，各専門領域における論文投稿，著作執筆などの研究活動が，論文件数 33（査読有 14，査読無 19），著作（9 件），国際会議プロシーディング等（28 件），研究発表（58 件），演奏指揮（1 件）など，活発に行われた。（把握している範囲，著者による計数により重複あり）

また，研究資金の獲得状況においても，科学研究費補助金基盤研究（A）4 件，基盤研究（B）11 件，基盤研究（C）7 件，挑戦的萌芽研究 2 件，若手研究（B）1 件に代表者として参画している。

さらに，以下の特記すべき国内外の研究者との共同・連携研究が行われた。

1) 今年度で 3 回目となる公開シンポジウム「発達研究の展望（その 3）ー発達研究と現場実践との共創（コラボレーション）ー『子どもの心と発達』をつかむ」を実施した。
2) 旭川市旭山動物園や兵庫県立人と自然の博物館との連携研究（科学研究費補助金　基盤研究(A)での取り組み）を行い，その取り組みは神戸新聞三田版（2013/8/21 及び 8/23 に掲載）に取り上げられた。

（学び系講座主任 岡部恭幸）

6.4.3 からだ系講座（旧人間行動専攻）

からだ系講座の研究活動は，人間の発達と人間の行動の係わりについて学際的視点から研究し，人間行動を体系化することである。本系講座教員の具体的研究内容としては，「人間行動・身体運動のメカニズム」，「体内・外的環境の変化に対する心身の適応・効果・発達・加齢現象」，「各ライフ・スパンにおけるアクティブなライフスタイルの構築」等について研究を進めている。研究体制は，基本的には1教員1分野であり，各教員がそれぞれのテーマで個人またはグループで研究を進めている。各教員の研究分野，研究テーマ，業績の一例は以下のごとくである。

- 研究分野：健康・スポーツ科学，　研究テーマ：ヒトの身体機能の調節に関する研究
  「Characteristics of sweating responses and peripheral sweat gland function during passive heating in sprinters. Amano T, Koga S, Inoue Y, Nishiyasu T, Kondo N. Eur J Appl Physiol. 113: 2067-2075, 2013.」
- 研究分野：スポーツプロモーション，　研究テーマ：成人・中高年を対象としたマスターズイベントの開催効果
  「Health Sports Promotion Coach 養成講座テキスト，公益財団法人日本健康スポーツ連盟監修，長ヶ原誠・山羽教文編著，杏林書院」
- 研究分野：スポーツ技術論，　研究テーマ：身体運動・スポーツにおける動作・技術に関する研究
  「短距離走スタートにおけるスターティングブロックに加えられた力とブロッククリアランスの関係（Relationship between the forces applied to the starting blocks and block clearance in a sprint start.），篠原康男，前田正登，体育学研究　第 58 巻　第 2 号　pp.585-597，2013.」
- 研究分野：健康・スポーツ科学（身体運動科学），　研究テーマ：加齢期の運動機能に関する研究
  「都市部高齢化地域居住者の運動意欲に関連する要因について，　乾順紀・長ヶ原誠・岡田修一・近藤徳彦・増本康平・竹中優子・朴木佳緒留，神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要 7（2），印刷中，2014.」
- 研究分野　運動心理学，　研究テーマ　運動習慣の形成とスポーツ活動の影響
  「Development of the Chinese college students' version of Buss-Perry Aggression Questionnaire, LV Lu, TAKAMI Kazushi, DONG Dong, Wong Lawrence, Wang Xi Chinese Mental Health Journal Vol.27 No.5, 2013.」
- 研究分野：体育・スポーツ史，　研究テーマ：近代イギリススポーツ史
  「1914 年以前のイングランドにおける全国的統括組織非加盟ホッケークラブの活動についてーレイディーズホッケーリーグ（1910 年設立）の検討からー，秋元忍，　大熊廣明監修，真田久，新井博，榊原浩晃，李燦雨編著，『体育・スポーツ史にみる戦前と戦後』，道和書院，pp.237-263，201.」

- 研究分野:運動生理学,　研究テーマ:運動・スポーツによる健康・パフォーマンスの向上
  「自発的運動により2型糖尿病の発症が抑制された OLETF ラットの運動パフォーマンスと骨格筋特性, 髙田義弘, 竹下大輔, 石見惠子, 保井俊英, 今北英高, 峯松 亮, 和気秀文, 岡田修一, 平川和文, 中谷 昭, 坂田 進, 第 28 回日本体力医学会近畿地方会 2014.1.25. 」
- 研究分野:認知心理学, 高齢者心理学,　研究テーマ:認知機能の加齢変化に関する研究
  「顕在記憶指標・潜在記憶指標を用いたポジティブ優位性に関する研究, 上野大介・権藤恭之・佐藤眞一・増本康平, 認知心理学研究, in press」
- 研究分野:運動生理学およびバイオメカニクス,　研究テーマ:身体運動の巧みさを探る
  「膝関節角度と踏み出し距離からみた構え姿勢による反応時間への影響, 岸川晃大, 河辺章子, 身体行動研究第 3 巻, 印刷中」
- 研究分野:スポーツ社会学, 生涯スポーツ論,　研究テーマ:スポーツと地域振興, スポーツ政策
  「スポーツ白書 2014－スポーツの使命と可能性－　第 6 章スポーツの人的資源, 山口泰雄(編著), SSF 笹川スポーツ財団, 2013,」
- 研究分野:社会老年学, 社会心理学,　研究テーマ:高齢者の社会参加, 東アジアの家族関係, アジア大都市の街の歩行環境と高齢者の健康　等
  「Keiko Katagiri and Tomoko Wakui.The Road to Successful Aging: Older Adults and Their Families in Japan. in Sheung-Tak Cheng, Iris Chi, Helene H. Fung, Lydia W. Li and Jean Woo(eds),"Successful Aging: Asian Perspectives." Springer (in print)」
- 研究分野:運動処方論, 研究テーマ:子どもの体力・運動能力, 競技力向上とトレーニング
  「小児の日常生活中におけるエネルギー消費量と体格・体力との連関　－二重標識水法および加速度計法を用いた検討―, 中江悟司, 山田陽介, 木村みさか, 鈴木和弘, 小澤治夫, 平川和文, 石井好二郎, 体力科学, 第 62 巻第5号, 353-360, 2013.」

（からだ系講座主任　平川和文）

6.4.4 表現系講座（旧人間表現専攻）

平成 25 年度に行われた国内外の研究者との共同・連携研究や, 学外演奏家との共演や他ジャンルとのコラボレーションパフォーマンス, 美術館等との協定事業などを中心に以下に挙げる。個人研究や個人の創作, 演奏活動等については KUID を参照されたい。

学術研究においては, 各専門領域における論文投稿や著作執筆等の研究活動はもとより, 以下のような特記すべき国内外の研究者との共同・連携研究が行われた。

1)　日本大学, 名古屋工業大学, 民間研究者との共同による「山越邦彦に関する総合的研究」
2)　筑波大学研究者との共同による「情報社会の倫理に関する共同研究」
3)　ハーバード大学研究者との共同による「日本におけるアメリカ音楽研究」
4)　国内の理学系, 工学系, 芸術・デザイン系研究者との共同による「かたち創造に関する研究」

創作・演奏等実践的研究においては, 各表現領域における創作, 演奏活動はもとより, 以下のような, 学外演奏家との共演や他ジャンルとのコラボレーションパフォーマンス, 美術館等との協定事業など, 特記すべき活発なパフォーマンス活動が行われた。

1)　神戸ビエンナーレ 2013・兵庫県立美術館と神戸大学発達科学部の相互協力協定事業「Site Specific Dance Performance #3『春の祭典』」におけるダンスパフォーマンス
2)　彫刻作品とピアノのコラボレーションパフォーマンス「塚脇淳彫刻展における坂東肇スペシャルコンサート」
3)　美術館とのコラボレーションパフォーマンス「和泉市久保惣美術館久保惣 Ei ホールに於けるミュージアムコンサート」
4)　大阪音楽大学, 武庫川女子大学演奏家とのピアノ共演「2 台ピアノ 8 手連弾による Tchaikovsky 大序曲「1812 年」の演奏」

（表現系講座主任　小高直樹）

6.4.5 人間環境学専攻

本専攻では，多分野の教員が自身のテーマを発展させ，多彩なプロジェクトに従事していることから，研究展開のあり方がきわめて多様である。そのなかから，本専攻のメンバーが主宰または参加している共同研究を以下に紹介する。なお，以下は，系統だった完全な紹介ではなく，あくまで事例紹介で，記述は順不同である。

- 本専攻研究者：青木茂樹，高橋覚（学振 PD），尾崎圭太（学振 DC）
  共同研究者：中村光廣（名古屋大），六條宏紀（名古屋大 学振 PD），吉田哲也（JAXA 宇宙科学研），他 GRAINE collaboration（神戸大，名古屋大，JAXA 宇宙科学研，岡山理科大，愛知教育大，宇都宮大）
  研究課題：GRAINE 計画（Gamma-Ray Astro-Imager with Nuclear Emulsion）
  研究資金：一般財源ほか
  研究概要：気球搭載型エマルション望遠鏡により宇宙ガンマ線を観測する。
- 本専攻研究者：伊藤真之
  共同研究者：高島健（宇宙航空研究開発機構），柏木敏介（神奈川大学），西村純（宇宙航空研究開発機構）ほか
  研究課題：月周回探査衛星 SELENE 搭載 α 線検出器による月面ラドンガスの観測研究
  研究資金：（独）宇宙航空研究開発機構
  研究概要：月周回探査衛星 SELENE 搭載 α 線検出器による月面ラドンガスを観測し，月面の放射線環境，月希薄の動態，地殻構造などについて調べる。
- 本専攻研究者：伊藤真之
  共同研究者：常深博（大阪大学），河野 功（宇宙航空研究開発機構），國枝秀世（名古屋大学），上田佳宏（京都大学）ほか
  研究課題：小型衛星の編隊飛行による高エネルギー広天走査衛星(FFAST)計画
  研究資金：（独）宇宙航空研究開発機構
  研究概要：それぞれ望遠鏡と硬 X 線検出器を搭載した2機の小型衛星を編隊飛行させることにより，高エネルギーX 線で天空の走査観測を行い，多数の活動銀河中心核（銀河中心の巨大ブラックホール）を検出して，その宇宙史における進化を探る。
- 本専攻研究者：江原靖人
  共同研究者：開發邦宏，加藤修雄（大阪大学産業科学研究所）
  研究課題：インフルエンザ感染を阻害するシアル酸修飾 3-way junction 型核酸の創製
  研究資金：科学研究費補助金・基盤(C)（代表：江原靖人）
  研究概要：あらゆるインフルエンザウイルスの感染を阻害することを目的とし，糖鎖修飾 3-way junction 型核酸を合成し，ウイルスに対する感染阻害能評価を行う。
- 本専攻研究者：江原靖人
  共同研究者：開發邦宏，加藤修雄（大阪大学産業科学研究所）
  研究課題：インフルエンザウイルスと結合するシアリルラクトース修飾核酸の合成
  研究資金：物質・デバイス領域共同研究拠点課題（代表：江原靖人）
  研究概要：あらゆるインフルエンザウイルスと結合する材料の開発を目的とし，シアリルラクトース修飾核酸を合成し，ウイルスとの結合能評価を行う。
- 本専攻研究者：江原靖人
  共同研究者：居城邦治（北海道大学電子科学研究所）
  研究課題：DNA ポリメラーゼを用いた，金属イオン応答性長鎖二重らせんDNAの合成
  研究資金：物質・デバイス領域共同研究拠点課題（代表：江原靖人）
  研究概要：金属イオン配位能を有する化合物を DNA 上にナノメーター間隔で並べることにより，金属イオン応答性高分子を合成する。
- 本専攻研究者：江原靖人
  共同研究者：株式会社 大真空

研究課題:糖鎖修飾核酸を用いたインフルエンザウイルス検出用 QCM センサ素子の開発
研究資金:株式会社　大真空
研究概要:糖鎖修飾核酸と水晶発振子(QCM)センサを組み合わせることにより，従来の製品より高感度なウイルス検出システムを開発する。

- 本専攻研究者:佐藤春実
  共同研究者:窪田健二(群馬大学)
  研究課題:ジェランガムのゲル化に伴う分子間・分子内水素結合の変化と秩序構造形成の同時観察
  研究資金:科研費　基盤研究(C)(代表:佐藤春実)
  研究概要:ジェランガムのゲル化機構を赤外分光法と X 線を用いて調べる。
- 本専攻研究者:佐藤春実
  共同研究者:尾崎幸洋(関西学院大学)，森澤勇介(近畿大学)
  研究課題:極表面分析用全反射減衰遠紫外分光分析装置の開発と高分子極表面分析への応用
  研究資金:科研費　基盤研究(B)(代表:尾崎幸洋)
  研究概要:固体用減衰全反射遠紫外分光器を用いて高分子極表面の構造・物性を調べる。
- 本専攻研究者:中川和道
  共同研究者:足利裕人(鳥取環境大学)，竹谷篤(理研)
  研究課題:作って・測って・判断できる放射線教育システムの構築　―国民的素養としての放射線教育をめざして―
  研究資金:科学研究費「挑戦的萌芽」
  研究概要:国民的素養としての放射線教育プログラムを作成する。
- 本専攻研究者:中川和道
  共同研究者:北浦　守(山形大学)
  研究課題:真空紫外発光分光による固体光励起状態の包括的研究
  研究資金:分子科学研究所 UVSOR 長期課題資金
  研究概要:放射線などで高エネルギー励起されたアミノ酸の発光を真空紫外遺棄で調べる。
- 本専攻研究者:中川和道
  共同研究者:田中正人(産総研)，泉雄大(原研機構)，小林憲正(横浜国立大)，山岸明彦(東京薬科大)
  研究課題:宇宙ステーションにおける生体分子の紫外線変性
  研究資金:アストロバイオロジーネットワーク
  研究概要:宇宙放射線環境における生体分子の紫外線変性を調べる。
- 本専攻研究者:源利文
  共同研究者:近藤倫生(龍谷大学)，宮正樹(千葉県博)，益田玲爾，笠井亮秀(京都大学)ほか
  研究課題:環境 DNA 分析に基づく魚類群集の定量モニタリングと生態系評価手法の開発
  研究資金:科学技術振興機構　戦略的創造研究推進事業　CREST(代表:近藤倫生)
  研究概要:環境中の DNA を用いて水中の生物群集の分布を把握する手法を海洋生態系に応用する。
- 本専攻研究者:源利文
  共同研究者:土居秀幸(広島大学)，片野泉(兵庫県立大学)，山中裕樹(龍谷大学)ほか
  研究課題:環境 DNA　技術を用いた生物分布モニタリング手法の確立
  研究資金:環境研究総合推進費(代表:土居秀幸)
  研究概要:環境中の DNA を用いて水中の生物群集の分布を把握する手法を河川やため池へ応用する。
- 本専攻研究者:源利文
  共同研究者:近藤倫生，丸山敦，山中裕樹(龍谷大学)
  研究課題:実証的群集生態学に革新をもたらす環境 DNA 分析手法の確立
  研究資金:科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究(代表:近藤倫生)
  研究概要:環境中の DNA を用いて水中の生物群集の分布を把握する手法を開発する。
- 本専攻研究者:源利文

共同研究者：渡辺知保（東京大学），門司和彦（長崎大学），石川智士（地球研），渡部徹（山形大学）ほか
研究課題：気候，土地利用，人口の変化が引き起こす新たな健康リスクの予測モデル構築とその懸賞に関する研究基盤形成
研究資金：グリーン・ネットワーク・オブ・エクセレンス 環境情報分野（代表：渡辺知保）
研究概要：アジアの発展途上国を対象に，ビッグデータを活用してこれまででは解析が不可能であった公衆衛生に関わる事案を分析し，新たな健康リスクの予測モデルの構築およびその検証を行う。

- 本専攻研究者：伊藤真之，源利文
  共同研究者：佐用町生涯学習課，佐用川のオオサンショウウオを守る会ほか
  研究課題：佐用川の生態系保全を中心とした市民科学活動への支援
  研究資金：神戸大学地域連携事業（代表：伊藤真之）
  研究概要：オオサンショウウオの生息状況の調査や保護に向けた啓発活動などに取り組む市民グループ等と連携して，地域生態系の保全とそれを通じたコミュニティ活性化の手法について実践研究を行う。
- 本専攻研究者：伊藤真之，蛯名邦禎，源利文，中山晶絵
  共同研究者：加納圭（滋賀大学），前波晴彦（鳥取大学），秋谷直矩（京都大学），吉澤剛（大阪大学）ほか
  研究課題：STI に向けた制作プロセスへの関心層別関与フレーム設計
  研究資金：科学技術振興機構 科学技術イノベーション政策のための科学 研究開発プログラム（代表：加納圭）
  研究概要：国民のニーズや意見を政策プロセスにつなげるために実践的な研究開発を行う。
- 本専攻研究者：源利文
  共同研究者：深町真由（大分県立安心院高校）
  研究課題：大分県におけるオオサンショウウオの分布状況調査
  研究資金：一般財源ほか
  研究概要：環境 DNA 手法を用いてオオサンショウウオの分布南限である大分県における詳細な分布調査を行う。
- 本専攻研究者：丑丸敦史，源利文
  共同研究者：神松幸宏（京都大学）
  研究課題：京都府西山地域における小型サンショウウオ類の分布状況調査
  研究資金：一般財源ほか
  研究概要：環境 DNA 手法を用いて京都府西山地域におけるヒダサンショウウオ等の小型サンショウウオ類の分布を調査し，近年の鹿の増加との関係を探る。
- 本専攻研究者：源利文
  共同研究者：高原輝彦（広島大学），松本宗弘（兵庫県立農業高校）
  研究課題：神戸市近郊におけるカワバタモロコの生息調査
  研究資金：一般財源ほか
  研究概要：環境 DNA 手法を用いて神戸市近郊における絶滅危惧種カワバタモロコの生息状況を調査し，近年のオオクチバスやブルーギルの増加との関係を探る。
- 本専攻研究者：高見泰興
  共同研究者：曽田貞滋（京大）
  研究課題：交尾器進化による種分化:種間差をもたらす性選択と遺伝子
  研究資金：科研費基盤 B（代表：曽田貞滋）
  研究概要：行動実験と遺伝学的手法を用いて，性淘汰による交尾器形態の進化が種分化をもたらすか否かを検証する。
- 本専攻研究者：高見泰興
  共同研究者：曽田貞滋（京大），千葉聡（東北大）
  研究課題：貝食性オサムシと陸貝の多様性，適応，共進化
  研究資金：科研費基盤 B 海外（代表：曽田貞滋）

研究概要:分子系統学的手法を用いて，陸貝と貝食性昆虫の進化的起源を明らかにする。

- 本専攻研究者:高見泰興
  共同研究者:清水晃(首都大)
  研究課題:クモバチにおける原始社会性の起源:メス間の社会行動の特性とその進化的意義
  研究資金:科研費基盤 C(代表:清水晃)
  研究概要:行動観察と遺伝学的手法を用いて，クモバチに見られる共巣性の進化的起源を探る。
- 本専攻研究者:藁田弘樹
  共同研究者:横田明穂(奈良先端科学技術大学院大学)
  研究課題:CO2 固定酵素ルビスコの機能進化研究
  研究資金:JST・さきがけ(代表:藁田弘樹)
  研究概要:光合成 CO2 固定酵素ルビスコの進化で獲得した多様な酵素特性を構造活性相関研究により明らかにする。
- 本専攻研究者:藁田弘樹
  共同研究者:木村浩之(静岡大学)
  研究課題:メタン産生アーキアの新規 CO2 固定回路の解明
  研究資金:JST・さきがけ(代表:藁田弘樹)
  研究概要:メタン産生アーキアが有する光合成 CO2 固定酵素ルビスコが生体内で機能する代謝経路を明らかにする。
- 本専攻研究者:藁田弘樹
  共同研究者:松村浩由(大阪大学)
  研究課題:メタン産生アーキアのカルビン回路酵素ホモログの構造解析
  研究資金:JST・さきがけ(代表:藁田弘樹)
  研究概要:メタン産生アーキアが有する光合成カルビン回路酵素ホモログの機能解析・構造解析を行い，その機能同定を行う。
- 本専攻研究者:藁田弘樹
  共同研究者:森井孝(京都大学)，中田栄司(京都大学)
  研究課題:DNA origami 上へのタンパク質の空間的配列研究
  研究資金:なし
  研究概要:DNA origami 上へのタンパク質会合を光合成 CO2 固定酵素ルビスコをモデルに解析する。
- 本専攻研究者:藁田弘樹
  共同研究者:富永基樹(理化学研究所)
  研究課題:ミオシン改変型植物の光合成能解析
  研究資金:JST・さきがけ(代表:藁田弘樹)
  研究概要:植物光合成に対するミオシン改変による原形質流動速度変化の影響を解析する。
- 本専攻研究者:藁田弘樹
  共同研究者:岩井優和(理化学研究所)
  研究課題:シアノバクテリアにおける CO2 固定細胞小器官の形成過程解析
  研究資金:JST・さきがけ(代表:藁田弘樹)
  研究概要:シアノバクテリアにおける CO2 固定細胞内小器官であるカルボキシソームへの CO2 固定酵素ルビスコのパッキング過程を蛍光を用いたライブイメージングにより解析する。
- 本専攻研究者:藁田弘樹
  共同研究者:泉井桂(近畿大学)
  研究課題:植物の C4 型光合成化
  研究資金:特になし
  研究概要:C3 型光合成植物に C4 型光合成酵素遺伝子を導入し，C4 型光合成化を目指す。
- 本専攻研究者:近江戸伸子

共同研究者：辻本壽（鳥取大学）
研究課題：ジャトロファの早期開花組換えならびに花成に関する研究
研究資金：鳥取大学乾燥地研究センタープロジェクト予算（代表：近江戸伸子）
研究概要：油糧植物ジャトロファについて，遺伝子組換え法を用いて，特性を改良し有望な植物の育成を図る。

- 本専攻研究者：近江戸伸子
  共同研究者：ツェンコバ　ルミアナ（神戸大学農学部）
  研究課題：アクアフォトミクスによる水を介した生体機能の解明
  研究資金：科研費基盤研究 B（代表：ツェンコバ　ルミアナ）
  研究概要：イネの組織培養ならびに通常の成長において，アクアフォトミクス解析法の確立を行う。
- 本専攻研究者：近江戸伸子
  共同研究者：野上智行（大学評価・学位授与機構），稲垣成哲，山口悦司ほか
  研究課題：欧州における科学技術系博士号取得者のキャリア形成を支援する事業マネジメントの研究
  研究資金：基盤研究（B）（海外学術調査）（代表：野上智行）
  研究概要：欧州の博士課程教育の現状を理解し，日本の博士課程教育の多様化ならびに改善を行う。
- 本専攻研究者：白杉直子
  共同研究者：大村直人（神戸大学・工），本多佐知子（神戸山手短期大学）
  研究課題：食の安全を重視したスマートキッチン・ダイニングの構築による省エネルギーと低炭素化
  研究資金：科学研究費補助金・萌芽（代表：白杉直子）
  研究概要：家庭部門のエネルギー消費低減に向けて，改善の余地が大きい厨房における「省エネ・低炭素化」対策に，「食の安全・安心」重視の観点を取り入れ，「食のリスク管理」にも同時に貢献するスマートキッチン・ダイニングの構築を図る。
- 本専攻研究者：白杉直子
  共同研究者：大村直人（神戸大学・工），本多佐知子（神戸山手短期大学）
  研究課題：食文化に根差した省エネ・低炭素型地域コミュニティー創生への挑戦
  研究資金：科学研究費補助金・萌芽（代表：大村直人）
  研究概要：持続的経済発展と健康・長寿，安全・安心，省エネ・低炭素を目指した社会の構築のためにどのような地域コミュニティを創生すべきかを，日本の食文化に着目して提案する。地産地消が省エネ・低炭素化につながるとの観点から，旬の食材を使った郷土料理を採り上げ多角的に評価を行う。
- 本専攻研究者：城仁士
  共同研究者：野呂千鶴子（園田学園女子大学），日比野直子（岐阜県立看護大学），中村陽子（園田学園女子大学）
  研究課題：災害復興に挑む過疎地域の高齢者の主体的な生の全うを支援する生活環境モデルの構築
  研究資金：科学研究費補助金・基盤(C)（代表：野呂千鶴子）
  研究概要：災害被災地である高齢化が深刻な過疎地域住民の住み慣れた地域での生の全うをめざす災害復興支援生活環境モデルの提言を行うものである。
- 本専攻研究者：城仁士，井上真理
  共同研究者：藤原義章（岩戸ホーム施設長），岡田修一（神戸大学），近藤徳彦（神戸大学）
  研究課題：地域包括ケアシステム導入に関する活動分析
  研究資金：運営交付金，科学研究費補助金・基盤(C)（代表：野呂千鶴子）
  研究概要：京都府福知山市にある社会福祉法人成光苑傘下の岩戸ホームとサンヒルズ紫豊館は，「あんしんケアコールセンター24」という 24 時間 365 日対応の在宅サービスを提供するシステムの導入から運営状況を参与観察している。
- 本専攻研究者：佐藤真行
  共同研究者：植田和弘（京都大学），前田章（東京大学），中川真太郎（下関市立大学），中元康裕（九州産業大学），時松宏治（東京工業大学）

研究課題:制度を媒介とした持続可能な発展と主観的福祉のリンケージ
研究資金:科学研究費補助金基盤研究 A(代表:植田和弘)
研究概要:持続可能な発展と主観的福祉に関する理論モデルの開発およびデータベース構築, 実証研究

- 本専攻研究者:佐藤真行
  共同研究者:馬奈木俊介(東北大学), 佐藤正弘(京都大学), 鶴見哲也(南山大学), 溝渕英之(龍谷大学), 小嶋公史(地球環境戦略機関)蒲谷景(地球環境戦略機関), 栗生木千佳(地球環境戦略機関)松本郁子(地球環境戦略機関)岡安早菜(地球環境戦略機関)
  研究課題:高質で持続的な生活のための環境政策における指標研究
  研究資金:環境省受託研究「環境経済の政策研究」(代表:馬奈木俊介)
  研究概要:持続可能な発展の指標研究, 政策研究
- 本専攻研究者:佐藤真行
  共同研究者:植田和弘(京都大学), 細田衛士(慶応義塾大学), 寺西俊一(一橋大学), 吉田文和(北海道大学), 大沼あゆみ(慶応義塾大学), 馬奈木俊介(東北大学), 松野裕(明治大学), 大森正之(明治大学), 伊藤康(千葉商科大学), 除本理史(大阪市立大学), 山口臨太郎(野村総合研究所)ほか
  研究課題:東日本大震災学術調査 環境経済班
  研究資金:東日本大震災学術調査(代表:植田和弘)
  研究概要:本研究費では, 東日本大震災が及ぼした被害について, 経済インフラの被害だけでなく自然資本や人的資本ストックの被害について包括的に測定し, 復旧の度合いを分析している。福島原発事故の被害状態についての現地調査などもあわせて進めている。
- 本専攻研究者:佐藤真行
  共同研究者:栗山浩一(京都大学), 伊藤伸幸(京都大学)
  研究課題:食品リスク認知とリスクコミュニケーション, 食農倫理とプロフェッションの確立
  研究資金:科学研究費補助金基盤研究 S(代表:新山陽子)
  研究概要:東日本大震災後の食品選択行動の実証研究
- 本専攻研究者:佐藤真行
  共同研究者:植田和弘(京都大学)ほか
  研究課題:ダムの費用便益分析と多基準評価
  研究資金:ダム水源地環境整備センター(代表:植田和弘)
  研究概要:ダム評価
- 本専攻研究者:井上真理
  共同研究者:佐々木良平, 吉田賢史(神戸大学・医)
  研究課題:子宮がん患者の放射線治療衣の開発
  研究資金:科学研究費補助金・挑戦萌芽(代表:井上真理)
  研究概要:子宮がん患者の QOL 向上のために放射線治療時の衣服を開発することを目的とし, 肌触りの良さ, 着心地の良さを主にした衣服設計を行う。
- 本専攻研究者:井上真理
  共同研究者:諸岡晴美(京都女子大学), 三野たまき(信州大学), 薩本弥生(横浜国立大学), 斉藤秀子(山梨県立大学)ほか
  研究課題:シニアの健康・快適な衣生活を支援するための被服衛生学的研究
  研究資金:科学研究費補助金・基盤(A)(代表:諸岡晴美)
  研究概要:加齢による心身の変化に着目し, シニアの健康・快適な衣生活を支援するための基礎研究を総合的視点から追及することを目的とし,「老い」に対して積極的なコンセプトを持った繊維製品の開発やその設計指針を導出する。
- 本専攻研究者:井上真理
  共同研究者:山田由佳子(大阪教育大学)
  研究課題:乳幼児ズボンのウェスト構成と圧迫による身体影響に関する研究

研究資金:科学研究費補助金・基盤(C)(代表:山田由佳子)
研究概要:乳幼児のズボンの種類により,ウェストの衣服圧を測定し,圧迫感の小さいズボンの設計のための基礎研究を行う。

- 本専攻研究者:井上真理
  共同研究者:松本龍守,森秀茂,筒井久美子(村田機械株式会社)
  研究課題:編み布の官能検査に及ぼす物理的特性
  研究資金:産学連携等経費(代表:井上真理)
  研究概要:主に肌着用の編み布を試料として,手触りによる感覚に及ぼす力学特性・表面特性を明らかにし,触感の客観評価を試みるとともに編み布の触感に最も適する物理特性の測定条件を決定する。
- 本専攻研究者:井上真理
  共同研究者:馬場武一郎,田中秀一,麻河典生(日本毛織株式会社)
  研究課題:衣服性能に与える生地物性・縫製仕様の影響に関する研究
  研究資金:産学連携等経費(代表:井上真理)
  研究概要:特にスーツ地用途の羊毛を含む布地を試料として,その生地物性及び縫製が仕立て映えに関わる性能に及ぼす影響を明らかにするための基礎研究を行う。
- 本専攻研究者:井上真理
  共同研究者:市吉加奈,藤田発芽,岸根延幸(株式会社良品計画)
  研究課題:ドレスシャツ地のしわに関する研究
  研究資金:産学連携等経費(代表:井上真理)
  研究概要:シャツ地の洗いざらしのしわ感を客観的に捉える方法を確立するとともに,しわ感に及ぼす生地の物性を明らかにする。
- 本専攻研究者:平山洋介
  共同研究者:佐藤岩夫(東京大学),大堀研(宮崎大学),越山健治(関西大学),糟谷佐紀(神戸学院大学)ほか
  研究課題:東日本大震災からの住宅復興に関する被災者実態変化の追跡調査研究
  研究資金:科学研究費補助金・基盤(B)(代表:平山洋介)
  研究概要:東日本大震災の被災者を対象とするアンケート調査を継続し,住宅確保に関連する被災者の実態・意向を把握することによって,住宅復興政策のあり方についての実証的な根拠を得る。
- 本専攻研究者:橋本直人
  共同研究者:平子友長(一橋大学),鈴木宗徳(法政大学),景井充(立命館大学),菊谷和宏(和歌山大学),佐山圭司(北海道教育大学)ほか
  研究課題:ポスト3・11的危機からみる〈理性〉〈欲求〉〈市民社会〉の再審
  研究概要:「ポスト3・11的危機」と呼ぶべき現代日本の危機的状況を,特殊日本的な近代化の文脈と近代社会の普遍的問題の先鋭化という文脈の交差と位置づけ,この危機的状況の思想史的意味を明らかにする。
- 本専攻研究者:井口克郎
  共同研究者: 曽我千春(金沢星稜大学),田中純一(北陸学院大学)
  研究課題:住み続ける権利を考える
  研究資金:金沢星稜大学学内研究費(代表:曽我千春)
  研究概要:東日本大震災が露呈させた日本の雇用保障・社会保障の問題点について,「住み続ける権利」を保障するという視点から考察と改善に向けた提言を行う。
- 本専攻研究者:井口克郎
  共同研究者:前田定孝(三重大学人文学部),上野鉄男(元京都大学防災研究所),清野政明(元気象研究所),志岐常正(元京都大学理学部)
  研究課題:災害予測・防災・復興に関する総合的研究
  研究資金:日本科学者会議研究基金研究助成(代表:前田定孝)

研究概要:東日本大震災によって露呈した日本の国土，インフラおよび社会的諸制度の脆弱性について，人権という観点から，自然科学及び社会科学の学問諸分野間を有機的に関連づけて検討を行う。

- 本専攻研究者:澤宗則

  共同研究者: 南埜猛(兵庫教育大)

  研究課題:多様化するインド人ディアスポラのグローバルネットワークと場所の再構築

  研究資金:科研費基盤(C)(研究代表者)

  研究概要:グローバル化の下，越境するインド系移民社会の変動を主としてグローバルシティ・東京でのインド系 IT 技術者に注目し，彼らが自分達の生活空間・場所をどのように構築し，彼らのアイデンティティ形成とどのような関係があるのかについて，フィールドワークに基づいて，調査分析を行っている。

- 本専攻研究者:澤宗則

  共同研究者:岡橋秀典(広島大学)日野正輝(東北大学)，溝口常俊 (名古屋大学)，由井義通 (広島大学)，友澤和夫(広島大学)，森日出樹(松山東雲女子大学)，中條曉仁(静岡大学)，梅田克樹(千葉大学)

  研究課題:現代インドにおけるメガ・リージョンの形成・発展と経済社会変動に関する研究

  研究資金:科研費基盤(A)(研究分担者)

  研究概要:グローバル化経済の下，経済成長するインドにおいて形成・発展しているメガ・リージョンを対象に，その経済社会変動のメカニズムと問題点を，フィールドワークに基づいて，調査分析している。

(人間環境学専攻長 平山洋介)

7. 産官学共同・地域連携による教育・研究活動

7.1. ベンチャー創成型産学共同研究プロジェクト

神戸大学発ベンチャー企業「ジーン・アンド・ジーンテクノロジー(G&GT) 」株式会社を中心に開発された重油生産藻類「ボトリオコッカス・ブラウニー(Botryococcus braunii)」に着目した研究を行っている。中でも 2009 年に石油系炭化水素生産藻「ボトリオコッカス・ブラウニー(Botryococcus braunii)」から育種開発に成功した新品種の藻“榎本藻”は乾燥藻重量の 50%ものオイルを生産する能力を維持しながら世界最高の増殖速度を持つ品種に改良することに成功した。2012 年より，この高速増殖型のボトリオコッカス藻“榎本藻”を使って，IHI・ネオモルガン研究所・神戸大学の三者で，藻からオイル生産の実用化を目指して，NEDO の資金援助の下，産学連携でさらなる研究開発を行っている。 この藻が光合成によって二酸化炭素 CO2 から生産する石油系オイルは，ジェット燃料，ガソリン，軽油などのエネルギー資源として利用できるだけでなく，プラスチックや化学繊維の原料も供給でき，石油と異なり新たな CO2 排出をしないカーボン・ニュートラルな地球環境に優しい，かつ食料生産とも競合しない“夢のエネルギー生産システム”である。

2013 年度は，この藻を使って①この藻の遺伝子組み換え方法の開発，②より浮上能力の高い藻への改変・育種，③10mx10m のポンド3機での野外培養の試験的実施，を行った。このうち，①の研究ではこのボトリオコッカス藻への遺伝子導入には従来の遺伝子導入システムでは成功しないことが明らかになった。②の研究では，従来の大きさの約10 倍の大きさまで成長する新規藻株の開発に成功した。さらに③の野外培養では日本初の完全オープンポンドでの培養に成功した。次年度からは，次期の NEDO からの資金援助を受けて，遺伝子組換え法の開発，複数形質を持つ新規株の開発，さらに野外での 10m x 50m(500 ヘーベ)の巨大培養システムでの試験を行うことを予定している。

(人間環境学専攻 榎本平)

7.2. 地域連携

7.2.1. スポーツプロモーション

(1)「神戸マラソン 2013」

神戸マラソンの基本構想を決める「フルマラソン大会検討委員会」(2009)の委員長を務めてから，「第 1 回神戸マラソン 2011」「第 2 回神戸マラソン 2012」「第 3 回神戸マラソン 2013」と継続して，兵庫県と神戸市が主催する都市型市民マラソンの運営をサポートしてきた。「神戸マラソン 2013」においては，神戸マラソン 2013 実行委員会委員を務め，大会参加者のイベント評価に関するランナー調査および学生ボランティアのコーディネート等を行った。

ランナー調査においては，生涯スポーツゼミ生および身体行動論コース学生・院生により，フルマラソン・クオーターマラソンのフィニッシュ地点において，質問紙調査を実施し，1,464 票を回収した。データ分析においては，大会参加決定における重要性と大会満足度を明らかにし，さらに，参加者の大会参加における支出額と市民マラソン大会へのイメージ・参加意欲等を調べ，参加者の性別，参加コース，及び居住地において比較した。調査報告書は，実行委員会において報告し，PDCA サイクルを使い，次回大会への改善資料として活用された。

学生ボランティアのコーディネートにおいては，兵庫体育・スポーツ科学学会と連携・協働を進め，神戸大学を中心にして，兵庫・大阪における 16 大学・専門学校等に学生ボランティアの派遣を依頼し，442 名の学生ボランティアが活動を展開した。活動場所は，最もマネジメントが困難な，35 キロ地点から神戸大橋ブロックを担当した。また，フィニッシュブロックにおいて手荷物返却を，15 大学・専門学校の 17 名の教員と共にランナー支援を行い，学生ボランティアの活動評価に関する質問紙調査も実施した。ランナー調査の結果及びボランティア調査の結果は，兵庫体育・スポーツ科学学会・学会大会および日本体育学会・学会大会等において院生・学生が研究発表を行い，市民マラソンへの地域貢献の成果を公表した。

（人間行動専攻 山口泰雄）

(2) マスターズ甲子園プロジェクト

「マスターズ甲子園」は，全国の高校野球 OB/OG が，性別，世代，甲子園出場・非出場，元プロ・アマチュア等のキャリアの壁を越えて出身校別に同窓会チームを結成し，全員共通の憧れであり野球の原点でもあった「甲子園球場」で白球を追いかける夢の舞台を目指そうとするものである。全国 200 万人と推計される元高校球児による各地域での OB/OG 野球クラブの活性化，生涯スポーツとしての野球文化の発展，熟年（マスターズ）世代と共に高校球児を含めたユース世代にも応援メッセージを発信しながら，活力と夢に満ちた個人・地域・社会・未来への創造と発展に寄与していくことを開催目的とし，神戸大学発達科学部の教員，職員，学生が中心となって産官学民の連携体制により 2004 年から第 1 回大会を始動した。大会事務局と主催団体である全国高校野球 OB クラブ連合の事務局を神戸大学発達科学部内のスポーツプロモーション研究室に併設し，神戸大学による後援のもと，大学による社会貢献活動とアクションリサーチを展開すると共に，スポーツ振興や生涯教育，老年学等のテーマに興味を持つ大学生が，成人・中高年のスポーツ活動支援や生きがい創造支援への直接的関与を可能にしていくための，学内外における学習機会として機能していくことを目指している。

今年の事務局運営は，大会開催日（11 月 16 日・17 日）が正式決定する 3 月下旬から始動し，その後，平均して週 1 回の大会運営委員会を開催し，2 月から 9 月までの期間で開催された各都道府県における地方予選大会支援と並行しながら，甲子園本大会に向けてのプログラム立案，出場者受付，PR・広報事業，財源の確保，ボランティアマネジメント等の準備作業を進め，大会前日の総会運営，大会当日運営，大会終了後の事後処理を行った。

マスターズ甲子園 2013（第 10 回記念大会）には，14 都府県の地方予選大会から代表 14 チーム（計 644 名），東西日本代表 2 チーム（計 100 名）が出場し，また，甲子園キャッチボール（元高校野球関係者，親子，夫婦，過去のボランティア参加者によるペアによる自由参加プログラム）に 32 都府県から計 206 ペアが参加した。神戸大学学生・院生を中心とした全国の学生ボランティア，成人・中高年ボランティア，近畿圏の高校生を含めた計 765 名のボランティアがスポーツプロモーションの一環として大会運営を支え，本学部からは，教員 2 名，大学院生 5 名，学部生 52 名，本学部卒業生 34 名が参加した。

現在，大会事務局が運営する全国高校野球 OB クラブ連合には 34 都道府県，約 2 万人が登録し，各地方組織と本大会を支える各種民間団体や行政組織との連携事業として本プロジェクトを進めていく。

（人間行動専攻 長ヶ原誠）

7.2.2. その他の地域連携

(1) 兵庫県三木市との連携事業

兵庫県三木市と神戸大学とが協定を結んで連携事業を行うことになった。その一環として，三木市の掲げる「次世代育成プロジェクト事業」には主に本研究科が参加して，2012 年度から「確かな学力向上プロジェクト」がスタートした。2013 年度は，「三木市学力向上推進委員会」の開催（2012 年度から継続），神戸大学スタッフの研修講師派遣（新規），などが行われた。2014 年度からは，8 中学校の校区を順次指定しての「三木市学力向上サポート事業」に着手し，さらに共同の取り組みが展開される予定である。

（教育・学習専攻　渡部昭男・山下晃一）

8. 社会的活動・震災復興支援

平成25年度の本研究科教員による震災復興関連の研究及び支援は以下である。

8.1 メンタルケア関係

(1) 心のケア担当教員に対する支援事業

国立大学協会「平成25年度震災復興・日本再生支援事業」として採択され，福島県中通り地区で以下の事業を行った。なお，今年度は教師に対するセミナーに加え，間接的支援として生徒に対する出前授業も行った。

1) 教員に対するセミナー：福島県養護教諭県北部会所属の養護教諭に対して，25年7月31日に福島商業高等学校（福島市）を会場として9:30から16:00まで被災地域の児童生徒の理解や教師として対応のあり方について，昨年度に引き続きセミナーを行った。先方の要望に応じ，昨年度よりも内容と時間を大幅に増やし，とくに被災地域の特性に基づいて，事例研究に対する助言指導（東北大学／池田忠義），「相談のポイント」（和歌山大学／則定百合子），「発達障害児童・生徒への関わり」（本研究科／赤木和重），「非行への対応」（奈良女子大学／岡本英生），「思春期の発達的意義と教師の対応」（本研究科／齊藤誠一）を内容とした。
2) 生徒に対する出前授業：3校から依頼があり，4件の出前授業を行った。①25年7月11日／福島県立福島南高等学校2年生：「震災後の心のケア：ストレスから考えてみよう 」をテーマに震災ストレスに対する対応のあり方を講じた（齊藤）。②26年1月15日／福島県立福島高等学校1年生：「人のほどよい距離の取り方」をテーマにいろいろな傷つきをしている人たちとどのように接していけばよいかを講じた（齊藤）。③26年1月22日／桜の聖母女子学院中学3年生，高校1年生：それぞれ「女子の犯罪と薬物使用について」を震災復興関連事業で多くの人が福島県に流入し，薬物犯罪が発生しやすい環境でどのような注意をしていけばよいかを講じた（岡本，齊藤）。
3) 個別相談セミナー：福島県養護教諭県北部会所属の養護教諭の希望者を対象に心のケア教員として関わっている個別の事例などに関する相談に応じた（齊藤，岡本，池田，則定／25年6月17日，7月30日，10月12日，11月15日，12月25日，3月16日）。このほか， 日常の教育活動において生じる心のケア上の問題については，メール等による相談に応じた。

(2) 心のケアに関わるシンポジウムの開催・参加

前年度の事業や調査で得られた成果をもとに以下のシンポジウムなどで，情報発信を行った。①25年25年11月17日日本青年心理学会第21回大会で「東日本大震災と福島の青年の生き方」を開催し，齊藤・則定・岡本・池田・吉田のほか，昨年度より本事業で連携している福島県立福島南高校／森紀子，福島県飯舘村保健相談員／高橋美代子にも発表協力を得た。地元福島市で開催でもあり，多くの関心を得た。②26年3月23日日本発達心理学会第25回大会で名古屋大学／氏家達夫企画の「放射能汚染が福島の人々に及ぼした心理的影響」において齊藤がこれまでの成果を元に話題提供を行った。

（齊藤誠一）

8.2. 大船渡復興支援

2011年3月11日に東日本大震災が発災して以来，本研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのプロジェクト（名称：「神戸大学大船渡支援プロジェクト」）として，一貫して岩手県大船渡市へのボランティア活動支援を続けてきた。

同市で津波被害率の最も高い赤崎町における定点支援，学生やNPOスタッフなどをメンバーとするワークキャンプ方式，最低月に一度は現地訪問・ボランティア活動を行う断続的支援，ESD（持続可能な社会づくり）を基本とする総合的なまちづくり支援，他の支援団体を被災地に軟着陸させるプラットフォーム創成活動を特徴とする。

より具体的には，本年度は，「赤崎復興隊（市民まちづくり組織）」の活動支援・ワークショップ支援，圏内仮設住宅での生活支援・交流活動・訪問活動，圏内文化・行事再生支援活動などを行った。特に，5月に開催された「だべっこ祭り」（2013年6月16日NHK総合で紹介された）は，実質的に本プロジェクトがおぜん立てをした企画である。また，9月には，今後に欠かせない産業振興の第一歩として，「赤崎復興市」を実施した。2013年度には連続した復興市を開催する予定となっている。そのほか，今年度から住民主体で試みられている被災跡地のフラワーガーデンやそば園をつくる活動も，本プロジェクトが呼び水となったものである。

被災から3年が過ぎ，住民の疲れは想像以上のものがある。「二番底」と表現されるように，これまで比較的元気であった住民もやや復興への勢いを失っている感がある。継続的，断続的かつ地域に寄り添った復興支援活動が，このまちが生き残るか否かの鍵である，といっても過言ではない。持続可能なまちとして再生していくプロセスは，たんなる復興ではない。新しいまちづくりである。それゆえ，復興支援は否が応でも長期的になる。今後も，ESDまちづくり支援事業として支援を続けていくことが求められている。

（松岡広路，高尾千秋）

9. 附属施設

9.1. 発達支援インスティテュート

9.1.1. 心理教育相談室

心理教育相談室は，市民を対象とし，地域に開かれた相談室である。臨床心理学や心理療法に関する知見を生かして，地域の人々の心の健康に貢献することを目的としている。同時に，当相談室は，本研究科心身発達専攻臨床心理学コースが臨床心理士養成Ｉ種指定校としての認可を維持するために必要な実習機関であり，コース所属の学生たちの臨床訓練の場として機能する目的を有している。平成 12 年度に，総合人間科学研究科の附属施設として設立され，平成 17 年度からは発達支援インスティテュートの一部門に位置づけられた。心理教育上のさまざまな問題について，臨床心理学の立場から専門的な援助を提供する活動を行っている。年間を通じて開室し（年末年始，お盆の大学の一斉休業期間を除く），カウンセリング，プレイ・セラピーなどの心理療法を中心に，必要に応じて心理テストを提供するなどの心理臨床実践を行っている。相談は有料である。相談内容は，幼児期・児童期に家庭や学校でみられる発達教育上の問題，青年期のアイデンティティ形成に絡む課題，成人期のメンタルヘルス，熟年期の家族関係や生き方に関することなど，多岐にわたっている。毎年 30 件弱の新規相談受付がある。

新規の相談申込みは，基本的に電話受付によって行われている。この受付業務も，臨床心理学コースの授業「臨床心理基礎実習」の一環となっており，修士課程1年（M1）の学生たちが相談室スタッフの一員として交代で臨んでいる。受付時間は土・日・祝日以外の午後１時～6 時である（年末年始の１週間，お盆前後の2週間ほどは閉室）。

本年度の相談室スタッフは，教員5名（臨床心理学コース担当，臨床心理士），博士後期課程心理発達論講座院生3名，前期課程臨床心理学コース院生 22 名（M1：11 名，M2：11 名）である。

平成 22 年度より,『神戸大学大学院発達支援インスティテュート心理教育相談室紀要』が創刊され，院生たちが心理臨床の実践研究をまとめる場となっている。なお，平成 23 年度心理教育相談室の相談実施件数等は「自己評価報告書資料編」に記載されている。申し込み件数は，平成 21 年度から徐々に増加し，相談室スタッフの努力が実りつつある。

（心理教育相談室長　河﨑佳子）

9.1.2. ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

(1) 子ども・家庭支援部門（伊藤　篤）

2013 年度は，以下の各事業を実施した。

- ドロップイン事業「ふらっと」（2005 年度～）
- 「あーち」の基盤サービスの一つである。子育てひろばの提供と利用者間の交流促進，相談援助，情報提供を実施している。親子の見守りや子育て相談にあたっては，灘区保健福祉部，灘区公立保育所，神戸市地域子育て支援センター灘などの協力を得ている。
- アウトリーチ事業「ペリネイタル・アウトリーチ・サービス」（2006 年度～）
- 早期からの拠点（ひろば）利用を促す「あーち」のもう一つの基盤サービス。地域の産婦人科と連携し，そこに勤務する助産師が「あーち」を紹介し，親子の利用を促す。
- コネクション事業「ビギナーズ交流会」（2012 年度～）
- 「あーち」の利用開始後間もない（月齢の近い乳児をもつ）親同士をつなぎ交流を促すコネクション・プログラムを実施。利用者が「孤立・依存」から脱し，自己をエンパワメントさせていく機会を与える取組である。
- ペアレンティング事業「0 歳児のパパママセミナー」（2006 年度～）
- はじめて赤ちゃんを育てる家庭への予防的な親教育及び仲間づくりプログラム（5 月より 12 月にかけて月 1 回・計 7 回）である。募集にあたって灘区保健福祉部の協力を得た。
- あーち・コミュニティ・カレッジ事業（2011 年度～）
- 今年度は，「あーち」利用者を対象に，「ママのためのキャリアセミナーーママになって“働く”を考えるー」を 2 回シリーズでおこなった（1 回目：1 月 8 日「ママにとってのキャリアとは？ーライフプランとマネープラン」，2 回目：1 月 22 日「何から始める？再就職・これから働くための就職準備講座」）。講師は，社会保険労務士。
- 次世代育成事業「中・高生の赤ちゃんふれあい体験学習」（2006 年度～）
- 地域の中学生・高校生（西宮市の公立高校の生徒も含む）と，上記「0 歳児のパパママ交流会」に参加する親と子（赤ちゃん）とのふれあい体験学習（5 月から 12 月にかけて月 1 回・計 7 回）を実施した。
- 専門職支援事業「保育士のためのステップアップ・セミナー」（2006 年度～）
- 「あーち」と連携関係にある地域の保育士の資質向上を目的として実施したセミナー（11 月 14 日，11 月 28 日）。親への対応に焦点をあてた 2 回シリーズのセミナー（会場は灘区役所）を提供した。1 回目のテーマは「養育に困難を抱える保護者・家庭への支援」，2 回目のテーマは「保護者とのコミュニケーションの取り方（ワークショップ形式）」であった。子育て支援センター灘，神戸市灘区保健福祉部，武庫川女子大学の教員および家族支援研究会の臨床心理士の協力を得た。

(2) 障害共生支援部門（津田英二）

1. 「のびやかスペースあーち」において，障がい児を中心とした居場所づくりプログラムを，毎週金曜日の午後に継続実施した。属性や立場が異なる多様な人たちが相互に関心をもちコミュニケーションを活性化するために開いているプログラムである。プログラム内容は，地域住民や学生が，子どもたちとの親密な関わりに基づいて計画・実施する。普段は，音楽プログラムや造形プログラム，季節ごとのイベント，料理プログラムなど，多彩なプログラムを行う。またこのプログラムにおいて，利用者や学生を主体とした参加型調査研究を開始した。このプログラムの意義や効果をさまざまな人の語りから明らかにしようとするプロジェクトである。
2. カフェ「アゴラ」において障がい者キャリア教育支援を継続実施した。雇用のチャンスに恵まれない知的障がい者を実習生として募集し，カフェ「アゴラ」を中心に社会的活動を提供するプログラムである。2 名の実習生

が今年度から「アゴラ」のスタッフとして雇用された。実習中心の実践から，障害者雇用中心の実践に移行した。なお，今年度も NPO 法人コミュニティサポートセンター神戸との連携により，実習生 1 名を住吉駅駐輪場整備の仕事に従事させた。また，神戸市立六甲アイランド高校の生徒，神戸市立須佐野中学校の生徒を実習等で受け入れた。

3. インクルーシヴな地域社会創成をめざす学童保育つむぎの運営協力を行った。知的障がいのある中学生のキャリア開発プログラム「悠々ジョブ」を継続実施し，中学生 1 名を灘の浜高齢者介護支援センターでの作業を見守り，その成長と周囲との関係を記録した。

4. 韓国ナザレ大学との研究・教育交流を促進した。今年度も赤木和重准教授らとの調査チームを維持し，知的障害者を正規学生として受け入れている韓国ナザレ大学リハビリテーション自立学科の調査，障害学生と非障害学生が共同生活，共同学習を行っている大規模な寄宿舎の調査を実施した。

5. 東北大学教育学研究科の田中真理准教授と連携して，学生・卒業生ら 6 名と共に，宮城県亘理郡の障がい児者施設のボランティア活動を行った。今年度は児童デイサービスの「よっちゃんち」での障がい児支援と，「工房地球村」（障害者作業所）での音楽を介したプログラムを行い，また仙台市の仮設住宅において子どもを対象としたプログラムを支援した。

6. 「のびやかスペースあーち」において，利用者の多様性及び利用者間のコミュニケーションを活性化するため，「らくがきおばさんがやってくる」「アートセラピー」「あーち博物館」「音楽の広場」といった表現系プログラム支援を継続して行った。今年度は，博物館実習の枠組みによる教育活動ともリンクした「あーち博物館」として，社会福祉法人たんぽぽ，版画家脇谷紘氏との連携による企画展「バビロン広場の砂場にて」を実施した。

(3) ボランティア社会・学習支援部門（松岡広路）

1. 「震災復興支援プロジェクト」の企画・実施支援

2011 年 3 月 11 日に発災した北東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大船渡市赤崎町（死者 47 名，被害家屋約 900 戸／全 1429）の支援は 2 年目から 3 年目となり，予想通り，長期戦の様相を呈してきた。緊急時支援・復旧支援から，生活支援・まちづくり支援に活動の内容が移行するなかで，遠方のボランティアの役割はなにか？　真の復興に行きつくために今できることは何か？　これらを，学生ボランティアとだけではなく，被災住民と共に考え，少しずつ企画や事業を実行してきた。

神戸大学基金，震災復興・防災科学推進室，人間発達科学研究科，都市安全研究センターの支援を受けながら，あるいは，賀川記念館，川崎重工労働組合，兵庫社会教育研究会などからの経済的支援，「11 えん募金」を通しての神戸市民からの支援を受けながら，これまで，ほぼ毎月，全 40 回にわたり現地で活動してきた。参加した学生ボランティア数はのべ 174 名，発災以来，300 名を超える学生ボランティアが，本プロジェクトのメンバーとして被災地で活動してきたことになる。今年度は，中赤崎復興委員会の活動を実質化するために，「赤崎復興隊」の組織化とまちのビジョン形成支援に全力を尽くし，これは，NHK ドキュメンタリー番組でも報道された。（日本社会教育学会 10 月，日本福祉教育・ボランティア学習学会 11 月などで活動報告）しかし，復興の現実はいまだ厳しい。一連のプロジェクトがこれを打開する力となりえるのか，その効果が鋭く問われている。

1) 「赤崎復興隊・こども復興隊」の活動支援　―「だべっこ祭り」「赤崎復興祭」開催―

一昨年 11 月，赤崎のまちづくりに積極的な姿勢の被災住民有志と神戸大学の学生とを中心に結成された「赤崎復興隊」の企画コーディネーター集団として，松岡広路教授および HC センター部門研究員・学生ボランティアが活動してきた。「赤崎の未来を思い描きながら，現実の復興の方策・計画を練ろう」というキャッチフレーズのもと，毎月「復興隊のつどい」開催支援をしてきた。2014 年 3 月現在，「つどい」は 20 回を数えるに至っている。また，2013 年 4 月には，赤崎町の中学生・高校生による「子ども復興隊」も組織された。本プロジェクトの大学生ボランティアが世話役となり，ミーティングを重ね，5 月 19 日には，「だべっこ祭り」（子ども復興隊主催・赤崎復興隊共催・神戸大学協力）を開催することができた。

2) 「赤崎復興のまちづくり宣言」（含：未来予想図）

未来の赤崎の姿を被災住民と共に描いてきた。改訂を重ね，現在，未来予想図Ⅳが完成している。これを描いたのは本学の学生である。さらに，未来予想図を中心にまちのキャッチフレーズや特徴を盛り込んだ「赤

崎復興のまちづくり宣言」を，2013 年 4 月に策定し，大船渡市に提案した。現在，その反応を待ち続けているものの，防災集団移転事業による高台整備，災害公営住宅の建設が進まず，津波跡地の活用計画も，大船渡市がグランドデザインを発表するのを待っている状況にある。地域住民の思いと行政の思惑とを重ね合わせながら復興が進むよう，丁寧な調整役として活動している。

3)「赤崎の声宅配便」の発行

毎月「月一訪問隊」として本部門担当教員と数名の学生ボランティアが被災地を訪問し，仮設住宅訪問や赤崎復興隊のつどいに参加してきた。ようやく被災者の自然な声を聴くことのできる関係を作るに至っている。教員・学生と被災者とのあいだの信頼関係が育まれ，被災時の様子や今の生活状況について傾聴できるようになった。学生たちがそうした被災者の自然な声を新聞調にまとめ，次回の訪問時に自ら仮設住宅を訪問し配布したり，赤崎町の回覧板を利用したりして赤崎町の人たちにお知らせしている。これが『赤崎の声宅配便』である。メンバーの意識化だけではなく，仮設住宅の人たちがずいぶんと楽しみにしてくださっている。

4) 希望を育む「ベンチ・ひさしづくり」

本プロジェクトは「手作りの温かみを届けたい」をモットーに，学生ボランティアたちが，現地の人たちと相談して，仮設住宅周辺や被災跡地の側道にベンチを設置するものである。今期は，さらに発展し，仮設住宅のバス停，休憩場所の庇，仮設商店街のベンチなども手掛けた。学生たちの大工仕事に不慣れなものも，周囲を笑顔に包む効果があった。被災者にとってボランティアの存在自体が，希望になる事例である。

5) 近未来ジオラマの作成

2014 年 3 月，学生と教職員の協力を得て，赤崎地区の 3 年後の近未来図を形作った「近未来ジオラマ（立体模型：1000 分の 1）」を，工学研究科の槻橋研究室の院生や，福島大学うつくしまふくしま人間研究センターの間野博氏の協力を得て製作した。

以上のように，徐々に「災害復旧ボランティア」から「生活支援ボランティア」に，そして，「復興のまちづくり支援ボランティア」へと，活動の質が変化してきている。とりわけ，「復興のまちづくり」では，ESD（持続可能なまちづくり）の特質がはっきりとしてきた。環境保全・産業振興・地域文化の復興などの輻輳した課題の解決にむけて，地域住民とボランティアの協働関係がうまれつつある。

2. ESD ボランティア育成プログラム推進プロジェクトの実施

「ESD ボランティア育成プログラム推進ネット（ぼらばん）支援プロジェクト」も本年で 8 年を経過した。今年は，邑久光明園での各種ボランティア事業と，京都府美山ワークキャンプ，および，上記の大船渡支援ワークキャンプを連動させることを目的に，以下のような事業を実施した。

1) ハンセン病療養所邑久光明園との連携事業「邑久ワークキャンプ」支援

2013 年 6 月，8 月，12 月，3 月の 4 回，岡山県の長島にある「国立ハンセン病療養所邑久光明園」において「住民との交流」「将来計画関連事業」「集いの広場開墾事業」などを中身とする「ワークキャンプ」を実施した。登録メンバーだけではなく，岡山県の中学生，高校生，大学生の参加も得て，各回の参加者はいずれも 30 名を超え，活動が徐々に定着し，新たな広がりを見せている。

また，昨年同様，ESD サブコース「ESD 論」のオプション・フィールドワーク先として，学生たちを受け入れた。

2) ワークキャンプ・ネットワーク事業の展開

ESD（持続可能な開発のための教育）を実質化する学習プログラムは，特定の課題をもとにしたプログラムだけではなく，他の社会的課題を軸としたものとの交差が求められる。本年度は，タイプと課題意識の異なる三つのワークキャンプへの参加者動向を調査し，その学習論的効果を検証した。すなわち，限界集落の活性化を目的とする京都府美山ワークキャンプ，被災地復興を支援する大船渡支援ワークキャンプ，邑久光明園ワークキャンプの三つすべてに参加するモニター学生の意識や行動の変化を調査し，ネットワーク化の意義を考究した。この結果は，次年度の日本福祉教育・ボランティア学習学会において発表する予定である。

3. ESD 推進関係の事業

1) ESD 推進ネットひょうご神戸（国連大学認証組織：RCE 兵庫神戸）の活性化支援

ESD 推進ネットひょうご神戸の再組織化・再活性化をめざした世話人準備会をほぼ毎月実施した。また，ネットワーク会議（9 月），運営委員会（2014 年 2 月）の開催支援をし，新しい ESD の形態を地域社会に構築

する支援を行った。ESD カフェ，ESD 体験学習プログラムを，30 を超える参加団体・参加者の協力を得て実施するための準備を行っている。

2) RCE グローバル会議（ケニア，ナイロビ）への参加

ESD 推進の地域拠点として国連に認証されている世界中の RCE（Regional Centers of Expertise on ESD）が一堂に会した国際会議が，2013 年 11 月 22 日～25 日，ケニアのナイロビで開催された。HC センタースタッフ 2 名で参加し，日本及び神戸の ESD についての報告を行った。

(4) 労働・成人教育部門（末本　誠）

1. 異業種の成人教育関係者による定例研究会の開催

労働・成人教育部門の研究員には，人材育成のコンサルタント，職業訓練学校教師，放送大学関係者，大学教員，主婦などが参加している。研究活動は，これら他業種の研究員がライフヒストリーを共通項にして，成人の学びに関する実践的研究に取り組んでいる。今年度も例年通りの部門の基本的な研究活動として，月一回の定例研究会を開催した（8 月を除く）。

活動の中心は，あかねが丘学園で「語りのアニマトゥール」として活動している高齢者に対して行った，ライフヒストリーによる成人の学びに関する聞き取りと，その分析活動である。

2. 対外的な成人教育活動支援

昨年に引き続き，今年度も明石市のあかねが丘学園をアトリエとして，アニマトゥールの養成支援を行った。具体的には 2014 年 3 月に，2 回の「語りのアニマトゥール養成講座」を大学において開催し，13 名の参加者があった。あかねが丘学園の参加者の中に生まれた「語りのアニマトゥール」は，すでに 10 名を超える数になり彼ら自身の自律的な活動が始まった。具体的にはライフヒストリーを語ることを目的として「語ろうかい」がクラブ活動として発足した。部門の研究員は，あかねが丘学園のアニマトゥールに対する指導に従事し，この動きを支えた。

3. 成人教育の方法・プログラムの開発

これまでに作成してきた『練習問題』を改定し，『改訂版2　自分の人生を詳しく知るための50の練習問題』を作成し，大学教育や高齢者教育の現場で実際に使用した。

4. ライフヒストリーに関する国際的な研究交流

2013 年 12 月 10 日に，末本がフランスのトゥール大学で開かれた，ライフヒストリー成人教育に関する研究交流会に参加し，ガストン・ピノー名誉教授，ラニ＝ベル教授（ナント大学），パスカル・ガルバーニ教授（ケベック大学）らと，議論した。

2014 年 1 月 31 日～2 月 1 日に，神戸大学の人間発達環境学研究科のプロジェクト研究（代表　末本　誠）と，平成25年度科学研究費補助金基盤研究（A）「生活史法を基盤とした臨床物語論の構築と公共化」（代表森岡正芳）が主催した，「第5回日仏ライフヒストリー国際シンポジウム」を開催した。この会には，フランスのリール第3大学の二ヴィアドムスキー教授を招請した。また日本からは，森岡正芳，津田英二，末本　誠（神戸大学）と松本　大（弘前大学），安藤耕巳（山形大学），添田祥史（北海道教育大学）が報告者およびコメンテーターとして参加した。北海道から九州までの，述べ60人を超す幅広い参加者があった。労働・成人教育部門は，この研究会の組織にあたっての交渉，資料作り（翻訳）等を分担し支えた。

（ヒューマン・コミュニティ創成研究センター副センター長　朴木佳緒留）

9.1.3. のびやかスペースあーち

(1) 「のびやかスペース あーち」全体の取組について

研究科サテライト施設「のびやかスペース あーち（以下，「あーち」とする）」は，2005 年 9 月より神戸市と連携の下，灘区役所旧庁舎（現：灘消防署 2 階）において運営を開始した。以来，2013（平成 25）年度末現在で 8 年半が経過した。開設当初からの利用者であった就学前の子どもたちが，中学生・高校生へと成長をしており，8 年経過した年月の重みを実感させられる。

本施設は，開設当初より「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」を目指して様々な取組および実践的研究を展開している。開設当初より 7 年間継続された発達障害児のための療育プログラム『ほっと』が昨年度末に

終了したのを受け，その後継プログラムとして，4 月より発達障害児の親支援プログラム『ドーナッツ（4 月～7 月）』，また 9 月よりその発展編の『ピーナッツ（9 月～2 月』が新規開催されるなど，プログラムの新旧交代が見られた 1 年であった。また，来年度より『ほっと』の同窓会編として，子どもの成長・発達に伴う課題等を話し合う交流会が，プログラムとして開催されることが予定されている。発達障害のある子どもと親を支える仕組みが地域ではまだまだ不十分と言われている現在，「あーち」での取組は当事者たちにとって大きな支えになっていると言えよう。

昨年度より『あーち 人形劇』をコーディネートする市民ボランティアが，主に阪神間で組織されている人形劇団のネットワークづくりの場として「あーち」を利用し，5 月より隔月で『人形劇』，8 月に『人形劇ワークショップ（2 回シリーズ）』，2 月には『支援者向けのセミナー』を開催した。また，「あーち」開設当初より市民ボランティアとして，主に「あーち」連絡協議会に参加していた男性ボランティアが，自らの退職後の地域活動として『居場所づくり』のボランティアに積極的に参加した。上記の方々は，貴重な男性ボランティアとしての活動が今後も期待される。

「あーち」スタッフにも新旧交代が見られた。長年勤務し子育て中の母親たちを見守る親のような役割を果たしていたスタッフが 2 名，2012 年 3 月末，2013 年 10 月末と相次いで退職となり，それを惜しむ声が利用者から多く聞かれた。なお，4 月に 1 名，さらに 11 月より 1 名，新たなスタッフを迎えることができ，「あーち」に新しい風を吹き込んでくれている。

「あーち」の年間利用者数の詳細は後述するが，3 月末日現在で，31,389 人（延べ数）である。開館日数の 244 日で割ると一日平均 128 人余りが利用していることになる。一日の利用者数が 100 名を超える実績は 2007 年より 7 年間続いており，この安定した利用者数や灘区で生まれた子どもの約 3 割が「あーち」の『おやこ会員』として登録している事実からも，地域に根ざした施設として周知され，さらなる存続と発展とを期待されていると言えよう。

本年度のプログラム開催状況を集計（3 月末日現在）すると，教員・一般のボランティアが主催するプログラムの実施回数（延べ数）は 368 回，大学の正規教育プログラムの実施回数（延べ数）は 24 回となる。例年どおり，資格関連科目である博物館実習も年 1 回開催された。2008 度より引き続き，ESD サブコースの授業に協力し，学部生が実践活動をおこなう場を提供した。このように本年度も，「あーち」は学生の教育・実践を支援する機能を果たした。また，学生・院生の卒業研究・修士研究など，研究活動の場として「あーち」が活用されることも多い。発達支援論コース在籍生による研究成果（2006～2013 年度）として，卒業論文 5 編，修士論文 7 編，博士論文 2 編が提出されている。

大学に設置されている「のびやかスペース あーち 運営委員会」とは別に，日常的に「あーち」のプログラム等にかかわっているメンバーが参加する「あーち 連絡協議会」が，例年どおり，5 月，7 月，9 月，11 月，1 月，3 月に開催された。「あーち」利用者，プログラムリーダーとそのスタッフ，「ふらっと」相談員，一般のボランティア，学生，教職員が一同に会して，「あーち」の現状・プログラムの近況・新しいプログラム等に関する報告や検討をおこなっている。また，学生の卒業・修士論文のための研究など，研究活動の場として「あーち」が活用されるので，この協議会が，学生による研究計画発表の場・学生からの研究依頼承認の場にもなっている。

プログラム予定表，学生や利用者による絵本の紹介，利用者による取材記事等を掲載する月刊誌を編集するために毎月 1 回開催している「あーち 通信編集会議」も開設以来，一度も発刊を欠いておらず，「あーち」のホームページ上で順次公開されている。本年度は，当研究科発達支援論コースを修了し，1 児の母親となった元院生が，新しい家族を迎え，そこで起きる日常のひとコマをユニークな視点で書き綴ったエッセイを連載してくれている。忙しい育児の合間に，ほっとできるような暖かい内容に，読者である現在子育て中の利用者たちから多大な共感を得ており，人気のある連載になっている。この通信はこれまで同様，利用者に配布されているだけでなく，灘区役所や灘社会福祉協議会および各児童館，さらに連携先の産婦人科クリニックでも配布・設置し，昨年度からは「ふらっと」相談員のひとり（元母子相談員）が，マザーズハローワーク三宮，神戸市ファミリー・サポート・センターにも出向き，本通信を設置している。

(2) 「あーち」運営の主たる部門の活動について

「あーち」の日常的実践は，ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの「子ども家庭支援部門」と「障害共生支

援部門」が担っている。今年度における 2 つの部門の実践内容を以下に整理する。

＜子ども・家庭支援部門＞

従来から実施してきた「ドロップイン・サービス（ふらっと）」「ペアレンティング・プログラム」「赤ちゃんふれあい体験学習」などを引き続き実施した。また「赤ちゃんふれあい体験学習」に関しては，県内の高校生に加え，昨年度から六甲道児童館のユースステーションを通じて，灘区内の公立中学校から有志の生徒を迎え，赤ちゃんやその保護者とふれあう機会も設けた。地域における連携活動として，以前から近隣の産婦人科クリニックでも「あーち」の広報をおこなっている。そのため乳児期とその親による早期からの「あーち」利用は安定的に継続している。また，クリニックに通院しているハイリスク家庭を「あーち」の相談員につなぐなどの協働関係も継続している。他に外部機関との連携としては，元母子相談員が中心となり，マザーズハローワーク三宮，神戸市ファミリー・サポート・センターとも「あーち」通信を配布するなど情報交換を継続している

2006 年度より，地域子育て応援プラザ灘および灘区公立保育所とは以下のような形で連携・協働体制を継続している：①保育士による「おひさまひろば あーち」での見守り・相談・親子遊び。②地域子育て応援プラザ灘の保育士による乳幼児健診時における「あーち」の広報。③当部門による灘区内の公立・私立保育所の保育士向けの子育て支援に関する研修会（2 回シリーズ 2012 年 11 月～12 月）の提供。④当部門による地域子育て応援プラザ灘および公立・私立保育所の主催事業に関する広報。

「ふらっと」の相談体制では，発達相談員，元母子相談員の雇用を引き続きおこない，発達相談やキャリア支援のさらなる充実を図った。最近の育児相談のうち，母親の就労やキャリア支援に関する内容が増加していることを踏まえ，昨年度よりコミュニティカレッジ（セミナーの名称）の中に，「ママのためのキャリアセミナー」を取り入れている。また，発達のアンバランス・おくれに関する相談が，毎回（相談員のいる毎週金曜日）非常に多く，地域住民の発達相談のニーズの高さを明らかにしている。この他に，従前から，保育士，助産師，NPO からのボランティアが相談を担当，昨年度からは，灘区の歯科医師会との連携で，隔月に 1 回，歯科医師による相談日を設けている。

昨年度より開始した「あーち ビギナーズ交流会」は，「あーち」を初めて利用する，もしくは利用して日が浅い母親を対象としたコネクション・プログラムであるが，これは，2010 年度に実施した「あーち」利用者対象の悉皆調査の結果分析を受けて構想・実施（月 1 回）したものである。交流会の対象者は生後 6 か月未満の子を持つ母親であり，今年度は，毎回 10 組前後の親子が参加するプログラムとして根付いてきている。また，このプログラムは，博士課程後期課程の院生の実践研究の一環としても利用され，母親のエンパワメントがどのように導かれるかをインタビューや質問紙調査を通して明らかにしており，その成果は学術誌に掲載される予定である。

例年とは異なる連携・協力として，「あーち」の「ふらっと」が，兵庫県健康福祉部とサンテレビが企画・放映する子育て応援テレビ番組「子育て情報ランド」の取材の場となった。

＜障害共生支援部門＞

障害共生支援部門では，「のびやかスペース あーち」が，利用者の多様性の確保と相互コミュニケーションを促進することを主旨とする試みを行っている。「らくがきおばさんがやってくる」「アートセラピー」「音楽の広場」など，そうした試みの一環としてプログラムの実施を専門的な力量をもつ個人や団体に依頼した。

基幹プログラムとして「あーち」設立初期から毎週金曜日に実施している「居場所づくりプログラム」を継続させた。さまざまな障害のある子どもを中心として，障害のある成人，その他の地域住民や学生が多元的な社会関係を形成することで，相互のエンパワメントをめざすプログラムである。

プログラム内容は，子どもとの関わりの中から地域住民や学生らが計画・実施する。通常は子どもの関心に沿った遊びを展開しているが，音楽プログラム，造形プログラム，料理プログラムなど，季節ごとのイベントも行った。その他にも，外部団体との相互連携も発展しており，今年度も恒例の実習農園での芋掘り，社会福祉法人かがやき神戸のクラウンパフォーマンス，プロやアマチュアのミュージシャンとの協働による音楽プログラム，障害児対象にワークショップを展開しているアーティストとの協働による指人形制作，人形劇プロモーターの参加などにより，多彩にプログラム展開をした。

インフォーマルな関係の中から，社会的問題に主体的に関わっていく関係を形成することも隠れた目的としており，持ち込まれる諸問題（多くは障害に関する問題）をめぐる活動も付随した。プログラムから派生した個別の問題に踏み込んで関わることも多くある。教育・研究・実践を三位一体としたインクルーシヴな場づくりをめざす実践的研

究のフィールドとなっており，今年度は多様な利用者が相互にインタビューをしあう集合的インタビューを行い，さらにそのインタビューデータを集合的に分析するといった試みも開始した。

今年度から子どもの発達に不安をもつ親を対象としたプログラムを開始した。「ドーナッツ」はリラックスして自己開示することのできる関係づくりをめざすプログラム，「ピーナッツ」は子どもとの関わりを省察する学習プログラムである。「居場所づくりプログラム」「ぽっとらっく」など，「あーち」の他のプログラムとも連携し，元気を取り戻していく保護者たちの姿を見ることができた。

また，表現活動に基づく相互承認の機会づくりにも継続して取り組んだ。その一環として，本年度も博物館学芸員課程との連携で博物館展示を行った。9 月 28 日～10 月 3 日に「バビロンの広場にて」（社会福祉法人たんぽぽ，版画家脇谷紘氏との連携）を開催した。

(3) プログラム概要・その他

以下に，①プログラム概要 ，②見学・視察数， ③月別年間利用者数（表 1），④プログラム数とそれに対応するボランティア数（表 2），⑤連携・協力関係にある組織・団体（表 3），を示す。

①プログラムの概要

- 子どもとその保護者を主な対象にしたプログラム（◎は継続的・定期的なプログラム／○は単発的・短期的なプログラムを示す）
  - ◎ふらっと：地域子育て支援拠点事業（ドロップイン・サービス）として週5日開設
  - ◎おひさまひろば あーち：神戸市地域子育て支援センター灘の保育士・灘区公立保育所の保育士がドロップイン・サービスの利用者に対し，見守り・相談と親子遊び（ショートプログラム）を提供
  - ◎ベビーマッサージ：「あーち」利用者である母親がリーダーとなっておこなう交流プログラム
  - ◎あーち ビギナーズ交流会：「あーち」を初めて利用する，または利用して日が浅い母親対象の仲間づくりプログラム（子どもの月齢 6 か月未満対象）
  - ◎ほのぼの音ランド：音楽療法士によるリズム遊びプログラム
  - ◎おはなしの国：ボランティアによるストーリー・テリングと絵本の読みきかせ
  - ◎紙芝居：退職教員による味わいのある紙芝居
  - ◎めだか親子クラブ：退職教員が中心となった手作りおもちゃのプログラム
  - ◎らくがきおばさんがやってきた：地域の画家が展開する自由なアート空間
  - ◎アートセラピー：草木などの自然のものなどを用いてアートを展開するワークショップ
  - ◎人形劇：神戸・阪神間の人形劇グループや高校生による公演
  - ◎人形劇団 むー：「あーち」支援者や利用者が立ち上げた人形劇団

  発達障害のある子どもとその親を対象にしたプログラム
  - ◎ドーナッツ：発達障害児をもつ親支援プログラム
  - ◎ピーナッツ：ドーナッツの発展編
  - ◎ぽっとらっく：発達障害児を持つ親の学習会と発達障害児の遊び場

  おとなを主な対象としたプログラム
  - ◎筆をもとう：地域の書家による書の初歩を気軽に学ぶプログラム
  - ◎0歳児のパパママセミナー：子育て中の親を対象にとした学習・交流プログラム
  - ◎中・高校生の赤ちゃんのふれあい体験学習：中・高校生が 0 歳児とその保護者が毎月1回交流する
  - ○保育士のための子育て支援研修会（2回シリーズ）
  - ○コミュニティ・カレッジ：女性の就労およびキャリア支援を中心に構成「ママのためのキャリアセミナー（2 回シリーズ）」
- その他
  - ◎居場所づくり：障害のある人たちを中心としたみんなが集うプログラム
  - ◎音楽の広場：本研究科の院生や教員・ボランティアが主催する，誰でも楽しめる自由な音楽プログラム
  - ◎みんなで歌おう！：地域の作業所スタッフや実習生によるゴスペル
- 博物館実習

○博物館実習:「バビロンの広場にて」:2013 年 9～10 月開催

● 会議

◎あーち 通信編集会議:利用者や学生を交えて「あーち」通信をつくる場

◎あーち 連絡協議会:プログラムリーダー, 利用者, 教職員等による「あーち」運営に関する会議

②「あーち」への見学・視察数

大学のサテライト施設として, 社会的責任や地域貢献をはたし, アクションリサーチの成果を社会に対してモデル提示したり発信したりする手段として, 見学者やメディア取材の受け入れをおこなっている。以下は, 2013 年 4 月以降, 2014 年 3 月末日までの「見学者数」「視察者数」を機関・組織別に整理したものである。

● 見学(総数 14 名)

兵庫県歯科衛生士会(東神戸支部) 1 名 てんま発達支援センター 1 名 天満病院 1 名
生活協同組合 コープこうべ 1 名 神戸クリエイティブセンターKITO 1 名 ココレッチ 1 名
神戸市子ども家庭局子育て支援部 3 名 神戸地域応援プラザ長田 2 名
関西福祉科学大学 学生 1 名 神戸大学広報室 1 名 神戸大学 学生 3 名

● 視察・ヒアリング等(総数 42 名)

和歌山大学 教員 1 名 和歌山信愛女子短期大学 教員 1 名 神戸松蔭女子学院大学 教員 1 名
園田学園女子大学 教員 1 名 近代姫路大学 教員 1 名 兵庫大学 教員 2 名
タイ・チュラロコン大学 30 名(教員等 7 名 院生 20 名 学部生 8 名)
三菱電機 3 名 こうべ市民福祉振興協会 2 名 灘区まちづくり課 2 名(広報掲載用)
＊なお, コンソーシアム和歌山の研究助成を受けた和歌山信愛女子短期大学と和歌山大学による調査・研究報告書(「地域子育て支援」の強化に向けた地域と大学の連携に関する研究)で「あーち」が紹介された。

● テレビ放映のための取材(総数 8 名)

兵庫県健康福祉部こども局少子対策課 3 名 プランニングオフィスジェイムス(放送作家)1 名 オフィスキイワード(フリーアナウンサー)1 名 サン神戸映画社 3 名

③2013 年度「あーち」利用者数とその内訳(2014 年 3 月末日現在)

「あーち」の 2013 年度の年間利用者数(2013 年 4 月～2014 年 3 月)は延べ 31,389 人(子ども 15,996 人, おとな 15,393 人)である。開館日数の 244 日で割ると, 1 日平均 128 人余りが利用している

表 1 月別 利用者数

2013年度		ふらっと		あーと		こらぼ		利用者数の合計		
月	開館日数	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	子ども	おとな	合計
4 月	21	981	885	21	13	102	123	1,104	1,021	2,125
5 月	21	1003	957	26	33	129	154	1,158	1,144	2,302
6 月	21	1151	1,089	30	26	144	177	1,325	1,292	2,617
7 月	22	1575	1,465	24	29	135	144	1,734	1,638	3,372
8 月	18	1127	1,009	21	18	59	113	1,207	1,140	2,347
9 月	20	1253	1,171	34	26	120	176	1,407	1,373	2,780
10 月	23	1536	1,438	27	31	149	153	1,712	1,622	3,334
11 月	21	1317	1,259	28	30	165	169	1,510	1,458	2,968
12 月	19	941	881	18	29	134	158	1,093	1,068	2,157
1 月	19	1,158	1,114	26	27	108	113	1,292	1,254	2,546
2 月	19	1,031	995	19	25	118	119	1,168	1,139	2,307
3 月	20	1,185	1,083	15	24	86	137	1,286	1,244	2,530
合計	244	14,258	13,346	289	311	1,449	1,736	15,996	15,393	31,389

④2013 年度「あーち」プログラム数およびボランティア数

表 2 は, 2013 年度に「あーち」で提供されたプログラム数およびそれにかかわったボランティア(リーダー, スタッフ, 一般, 学生・院生)の数である。

表 2　プログラム数およびボランティア数（延べ数）

2013		プログラム数				ボランティア数			プログラム見学者
月	開館日数	一般のプログラム	大学の授業＆正規教育プログラム(実習)	プログラム総数	プログラム数一日平均	プログラムリーダー＆スタッフ数	一般	学生院生	
4	21	26	1	27	1.29	56	19	32	8
5	21	31	3	34	1.62	71	27	55	16
6	21	32	3	35	1.67	59	30	55	11
7	22	29	3	32	1.46	54	36	45	4
8	18	23	1	24	1.33	53	22	10	7
9	20	36	3	39	1.95	87	33	69	10
10	23	35	3	38	1.65	86	14	50	11
11	21	34	2	36	1.71	113	6	49	6
12	19	27	2	29	1.53	104	3	27	15
1	19	31	1	32	1.68	93	5	21	7
2	19	32	1	33	1.73	94	6	31	5
3	20	32	1	33	1.65	77	42	16	6
合計	244	368	24	392	1.61	947	243	460	106

＊基盤プログラムである「ふらっと」は毎日開催しているが, プログラム数に入れていない

＊「あーち」通信編集会議・連絡協議会・他の会議などは入れていない

＊比較的ボランティア参加の多いプログラム(順不同)

:ぽっとらっく・居場所づくり・アートセラピー・らくがきおばさん・人形劇・パパママセミナー

⑤2013 年度　連携・協力関係にある組織・団体など

以下の表 3 は, 2013 年度の運営にあたって連携・協力を得た組織や団体名を整理したものである。

表 3　連携・協力関係にある組織・団体など

団体名	連携協力の内容

神戸市市民参画推進局	運営協力
神戸市灘区保健福祉部こども家庭支援課こども保健係	0歳児のパパママセミナー＆中・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
神戸市灘区まちづくり推進部	なだ桜まつり／地域コーディネーター
神戸市灘消防署	消防訓練　地震津波等防災セミナー
神戸市地域子育て支援センター灘（通称：子育て応援プラザ灘）	ふらっと　相談員
灘区公立保育所（7か所）	ふらっと　相談員
灘区地域コーディネーター（元幼稚園教諭）	ふらっと　相談員
神戸市ファミリー・サポート・センター	情報交換
灘区社会福祉協議会	ボランティアコーディネート
灘区内児童館（10か所）	情報交換
六甲道児童館	情報交換
六甲道児童館ユースセンター	中学・高校生の赤ちゃんふれあい体験学習
灘区民ホール	情報交換
社会福祉法人たんぽぽ	博物館実習
社会福祉法人たんぽぽ	みんなで歌おう！
学童保育つむぎ	居場所づくり
カフェ「アゴラ」	
社会福祉法人かがやき神戸	
神戸ユニバーサルツーリズムセンター	
NPO 法人神戸子どもと教育ネットワーク	めだか親子クラブ
チャレンジひがしなだ	筆をもとう
クエスト総合研究所	アートセラピー
NPO 法人マザーズサポータ協会	ふらっと　相談員
亀田マタニティ・レディース・クリニック	アウトリーチ・サービス
灘区歯科医師会	ふらっと　相談員　／パパママセミナー
兵庫県立西宮高等学校	高校生の赤ちゃんふれあい体験学習／人形劇
神戸市看護大学（灘区保健福祉部から依頼）	地域母子保健実習の場として提供
神戸海星女子学院大学	ボランティア（授業）の場として提供
神戸大学医学部保健学科地域連携センター	ぽっとらっく／ドーナッツ　ピーナッツ

他に個人による協力も多数あり

（あーち運営委員会・委員長　勅使河原君江）

9.1.4. サイエンスショップ

サイエンスショップは，(a) 地域社会における広義の科学教育を含む市民の科学に関わる諸活動への支援，及び (b) 神戸大学学生の主体的研究活動等への支援を行うことを目的として，平成 19 年度に特別教育研究経費（教育改革）の支援を受けて設置された。平成 22 年度以降は，発達支援インスティテュートの一部門として位置づけられている。上記(a)については，科学者等の専門家と市民の対話と協働を通じて，環境問題など科学に関わる地域課題への市民の取組や，社会における科学技術の進展とそれに関する政策形成過程などへの市民の参画を促す仕組みづくりと実践を目指している。

平成 25 年度は，研究科専任教員（室長，副室長，及び室員若干名：特命助教1名を含む）と，教育研究補佐員 1 名（非常勤職員），事務補佐員 1 名（非常勤職員），学外研究員 2 名の体制で運営された。

以下に平成 25 年度の主な取組を記す。

(1) 科学技術政策への幅広い国民の関与を促すための研究開発プロジェクト

滋賀大学，京都大学，大阪大学，帝塚山大学，鳥取大学の研究者との連携により，独立行政法人科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）「科学技術イノベーション政策のための科学」研究開発プロジェクト「STI（科学技術イノベーション）に向けた政策プロセスへの関心層別関与フレーム設計」（略称 PESTI，研究代表者：加納 圭（滋賀大学／京都大学），平成24年度採択）を進めた。神戸大学では，サイエンスショップに関わる研究者4名が，主として科学技術に対する関心の高さが異なる市民の階層別の科学技術政策プロセスへの参加を促す場づくりに関する研究・開発に取り組んでいる。平成 25 年度の主な活動としては，政策立案者の動向をふまえた上で，科学技術イノベーション政策立案の出発点となる目指すべき社会像・ビジョンについて，市民の議論の場をつくり，その中から出た意見をまとめて政策立案者に届けるという新たな仕組みとして，「知ろう・語ろう・届けよう 科学技術イノベーション政策」と題した 3 回からなるワークショップシリーズを，グランフロント大阪ナレッジキャピタルにおいて実施した。このワークショップを通じて得られた市民の意見は，文部科学省が東京オリンピック・パラリンピック開催年である 2020 年に向けてとりまとめた「夢ビジョン 2020」の中に取り入れられた。

(2) 地域社会における市民の科学活動支援

サイエンスショップのこれまでの取組を通じて，姫路市を中心とした播磨地域（「サイエンスカフェはりま」），伊丹市（「サイエンスカフェ伊丹」），南あわじ市など兵庫県内の各地域で，サイエンスカフェをはじめとした科学に関わる活動を主体的に進める市民グループが立ち上がって着実な活動を展開し，サイエンスショップがこれを継続的に支援している。平成 25 年度には，神戸大学地域連携事業（課題名：「佐用川の生態系保全を中心とした市民科学活動への支援」）として学内の支援も受けて取組を進めた。

以下に本年度の特徴的な取り組み等をまとめる。なお，サイエンスカフェ開催状況については年次報告書資料編に掲載する

(a) 佐用町におけるオオサンショウオの生息状況調査と環境・科学教育への協力

平成 25 年 3 月佐用町において開催した「サイエンスカフェひょうご」を契機として，同地域でオオサンショウオに象徴される生態系の保全や啓発活動に取り組む市民グループ「佐用川のオオサンショウウオを守る会」および佐用町（生涯学習課）との連携を開始し，平成 25 年度はこの取組みを神戸大学地域連携事業による活動の中心として進めた。具体的には以下の活動を行った。(ア) 源利文特命助教が開発した環境 DNA 手法によるオオサンショウウオ生息状況の調査（平成 25 年 9-12 月），(イ) 前項(ア)の取組に併せた地域の小学生・保護者等を対象とする佐用川の生き物調査イベントの開催（平成 25 年 9 月），(ウ) 前項(イ)の参加者を含む児童を主な対象とした神戸大学訪問（実験・講義などの体験）イベント（平成 25 年 12 月）。(イ)および(ウ)は，地域の要望に応えて，環境教育・科学教育の目的で実施した。

(b) 淡路島

淡路島の地域課題などに取り組む NPO 法人「ソーシャルデザインセンター淡路」（略称 SODA）が企業からの助成を得，「森・里・海をつなぐ水循環と生態系を考える」をテーマとして企画・開催した環境学習・啓発イベント 2 回への協力を行った（平成 25 年 6 月第 1 回「諭鶴羽山系のホタルを見に行こう！」：協力，10 月第 2 回「東日本大震災の経験から学ぶ淡路島の防災と海の保全」：共催）。

(c) サイエンスカフェ伊丹

伊丹市を中心にサイエンスカフェの開催に取り組む市民グループ「サイエンスカフェ伊丹」によるサイエンスカフェ開催（9 回）を支援した。

(d) サイエンスカフェはりま

「サイエンスカフェはりま」は，姫路市を中心とした播磨地域において，サイエンスカフェ等を開催する市民グループである。平成 25 年度以降は，企業の社会貢献活動の一環としての助成を得て，サイエンスカフェやサイエンスツアーの実施など，活発に活動を展開している。 サイエンスショップは広報や運営事務の一部を通じて協力した（サイエンスカフェ 6 回，講演会 1 回）。平成 26 年 2 月には，新しい試みとして開催されたサイエンスカフェはりま第1回文化講演会「科学って文化なの？」（講師：池内 了 総合研究大学院大学理事）の開催に協力した。

この他，公益財団法人ひょうご科学技術協会及び大学コンソーシアムひょうご神戸が主催する「サイエンスカフェひょうご」の企画・運営を担い，伊丹市，神戸市，芦屋市，加古川市で 4 回を開催した。また，神戸市立青少年科学

館が新たに企画した館外でのサイエンスカフェや科学館のあり方について市民が考えるワークショップに協力した。

また，平成 19 年より月に 1-2 回のペースで継続している，市民が科学者とともに IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change ：気候変動に関する政府間パネル）の報告書を読み解く会「市民のための，IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」を 16 回（第 82 回から第 97 回）開催した。

(3) 学部・大学院教育

学部授業科目「ESD 演習 I」および「ESD 演習 II」については，サイエンスショップが平成 19 年度から市民グループの取組に対して支援・連携を行ってきた南あわじ市がフィールドの一つとして設定され，履修学生により，古民家を利用した移入促進，新規就農者への支援など，地域課題に関するフィールドワークが行われた。その成果は，NPO 法人「ソーシャルデザインセンター淡路」が新たに始めた農業従事者間のコミュニケーションを目的としたイベント「農カフェ」において，学生により地域の人々に報告された。

大学院博士前期課程の授業科目「サイエンスコミュニケーション演習」においては，履修者である大学院生が企画・運営を担当して，サイエンスカフェ「知っておきたい音環境のこと」を開催した。このサイエンスカフェは，工学研究科の阪上公博教授をゲストに招き，C 棟音楽ホールにおいて開催され，人間発達専攻表現系講座の坂東肇教授によるピアノ演奏も行われた。

この他，学部学生を中心とした正課外の取組として，地域の小学校等で天体観望会の開催に取組む「天文ボランティアグループ　アストロノミア」も，学科の壁を越えて学生が参加して，神戸市および大阪府の小学校などでの 4 回の観望会の開催を中心に活発な活動を展開した。また，昼休みを利用して，学生グループが教員の支援を受けながら，国際的科学誌 Nature 及び Science の記事を読む取組「Nature & Science をガリガリかじる会」も着実に取組を継続し，参加学生の英語力向上等に成果を収めた。

このように，サイエンスショップは，大学・大学院におけるアクティブ・ラーニングの場やそれを促す仕組みとしても機能している。

また，キャリアサポートセンターとの共催で，高度経済成長期に企業で研究開発に取組んだ技術者数名をゲストとして，学生・大学院生にその経験・メッセージを伝えるキャリアセミナー「世代をつなぐダイアログ　～世界の中の日本の未来を共に語ろう～」を開催した（平成 26 年 1 月）。

(4) 地域科学教育への支援と理系人材養成の取組み

平成 25 年 11 月には，兵庫県生物学会と共同で「高校生私の科学研究発表会 2013」を開催した。このイベントは昨年度に続き部局の「学術 WEEKS 2013」の企画としても位置付けられ，高校生 60 名，高校教員 16 名を含む約 110 名の参加者があり，活発な発表，交流が行われた。優れた研究に対して，サイエンスショップ室長より優秀賞を授与した。

平成 26 年 3 月には，社会科学系アカデミア館において，「第 1 回未来社会を担う人材育成のための多角連携フォーラム　～多様なセクターによる持続可能な社会の共創に向けて～」を，発達科学部・人間発達環境学研究科とサイエンスショップの主催で実施した。内閣府総合科学技術会議の原山優子氏，総合地球環境研究所の阿部健一氏，兵庫県教育委員の長田典子氏（関西学院大学）他による講演が行われ，高校，大学，研究機関，企業などからの多様な関係者が参加し科学技術系人材や持続可能な社会を担う市民の育成などについて交流・意見交換を行った。

このほか，平成 26 年 2 月には，文部科学省コア SSH 事業（SSH を中心とした理数教育推進の中核拠点形成・支援事業）である兵庫「咲いテク」事業推進委員会主催の「サイエンスフェア in 兵庫」に対し，サイエンスカフェの形式での理工系大学生・大学院生と高校生の懇談イベントへの協力，サイエンスショップ紹介のポスター出展などの形で協力を行った。また，兵庫県立兵庫高等学校の課題探求型授業への人間発達環境学研究科大学院生の協力のコーディネートを行った。同高等学校からは，大学院生による高校生への指導の教育効果が高く評価されている。

鶴甲小学校 PTA の要請を受けて，同小学校の児童と保護者を対象とし平成 19 年度以降毎年開催している「理科実験教室」を 7 月に実施した。また，サイエンスショップ研究員の新井敏夫氏により，成人を対象とした「つるかぶと科学教室」（2 回）が企画・実施された。

(5) その他

教職員，学生を含む部局構成員の間で，部局で行われている研究活動等について相互理解を深めることを目

的とした新たな試みとして，部局内で昼休みに開催する「キャンパスカフェ」を企画・実施した。平成 25 年度には下記の 5 回を開催した。

表　平成 25 年度　キャンパスカフェ開催テーマ・ゲスト

テーマ	ゲスト
介護と住宅資産をめぐる世代間関係	泉原美佐（ブリストル大学政策研究学部）
GRAINE 計画　～顕微鏡で宇宙をのぞく～	高橋　覚（環境基礎論講座・日本学術振興会特別研究員）
ギャンブル必勝法はあるか？　～生活の中の確率と統計～	小田利勝（神戸大学名誉教授）
水をくむだけ！見えない生き物を見つけ出す環境 DNA 技術	源　利文（環境基礎論講座）
復興のまちづくり・小ばなし～わたしの出会ったオモロい人々～	松岡広路（HC センター／学び系講座）

表　神戸大学サイエンスショップ　平成 25 年度の主な取り組み

市民科学活動支援
・サイエンスカフェの運営と展開（サイエンスカフェ神戸（3 回開催），サイエンスカフェひょうご ほか県下各地のサイエンスカフェ開催支援（総計 21 回）） ・市民と研究者が協力して気候変動に関する IPCC レポートを精読する勉強会「市民のための，IPCC レポートを根掘り葉掘り読む会」の定期開催（16 回） ・つるかぶと科学教室開催（2 回：学外研究員による企画）　ほか
地域の科学教育支援
・神戸市立鶴甲小学校 PTA からの依頼を受けた児童と保護者を対象とした理科実験教室の開催 ・兵庫県立兵庫高等学校における課題探求型授業「創造基礎」への協力（大学院生による研究・実習等指導）　ほか
大学教育・学生の活動
・ESD 演習 I，II（学部），サイエンスコミュニケーション演習（大学院）等の授業支援 ・天文ボランティアグループ「アストロノミア」による天体観望会の開催（神戸市立鶴甲小学校，神戸市立御影小学校，吹田市立岸辺第二小学校，東大阪市立縄手中学校）
研究会等の主催・共催
・「高校生・私の科学研究発表会 2013／兵庫県生物学会 2012 研究発表会」開催（主催: 兵庫県生物学会，神戸大学サイエンスショップ ） ・第 1 回未来社会を担う人材育成のための多角連携フォーラム　～多様なセクターによる持続可能な社会の共創に向けて～ ・森・里・海をつなぐ水循環と生態系について考える　その2 「東日本大震災の経験から学ぶ 淡路島の防災と海の保全」（特定非営利活動法人ソーシャルデザインセンター淡路主催，サイエンスショップ共催）
イベント等開催協力
・サイエンスカフェひょうご（主催：大学コンソーシアムひょうご神戸社会連携委員会，（公財）ひょうご科学技術協会） 伊丹市，神戸市，芦屋市，加古川市で開催 ・サイエンスカフェはりま（主催：サイエンスカフェはりま） 姫路市，高砂市 ・サイエンスカフェ伊丹（主催：サイエンスカフェ伊丹） 伊丹市 ・森・里・海をつなぐ水循環と生態系について考える VOL.1 「諭鶴羽山系のホタルを見に行こう！」（特定非営利活動法人ソーシャルデザインセンター淡路主催）
その他

・キャンパスカフェ開催(5 回)

(サイエンスショップ室長　蛯名邦禎,　副室長　伊藤真之)

9.2. 実習観察園

平成 25 年度は, 平成 25 年 12 月 6 日に本学において, 近畿教育系大学農場協議会を実施した。6大学, 13 名の出席者があった。協議事項として, 農場等の他大学による利用の有無について農場等施設の今後のあり方と教員退職後の補充について話し合った。その他, 農場運営上の問題点, 地域連携, 環境保全等について話し合った。

(1) 実習観察園施設及び概略図

実習観察園の概略は図1の通りで, 前年と変わりはない。網掛けで示した部分は, 自然環境論コースの教員が研究のために設置したビニルハウスである。

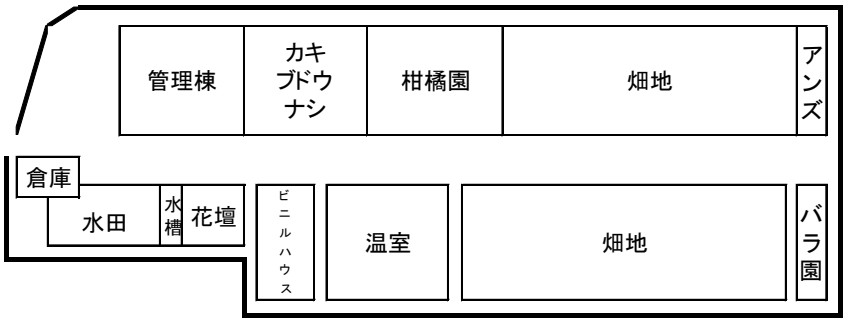

図1 施設・作付概要

(2) 作付面積及び作付植物

作付面積および作付作物はそれぞれ表1および表 2 に示した通りである。主として学部生の実習に使用している。

表1 作付面積(㎡)

種別	面積	備考
畑地	352	教材・実習用
果樹園	255	教材・実習用
水田	70	実習・研究用
バラ園	35	園内美化・実習用
花壇	25	園内美化・実習用
計	735	

表2 作付植物

種類	植物
野菜	コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、キュウリ カボチャ、スイカ、トマト、オクラ、ピーマン イチゴ、ナス、ダイコン、カブ、タマネギ、ニンジン
マメ・穀類	ダイズ、ラッカセイ、ソラマメ、インゲンマメ ジャガイモ、サツマイモ、トウモロコシ、イネ
果樹	なつみかん、ハッサク、温州みかん、スダチ ユズ、キンカン、カキ（富有、サエフジ）、ブドウ （ピオーネ、デラウエア）、スモモ ナシ（長十郎、菊水）、イチジク
花卉	ペゴニア、マリーゴールド、ペチュニア、サルビア キンセンカ、バーベナ、トレニア、デモルフォセカ マツバボタン、スベリヒユ、ヒマワリ、アサガオ ハボタン、チューリップ、ナデシコ、バラ

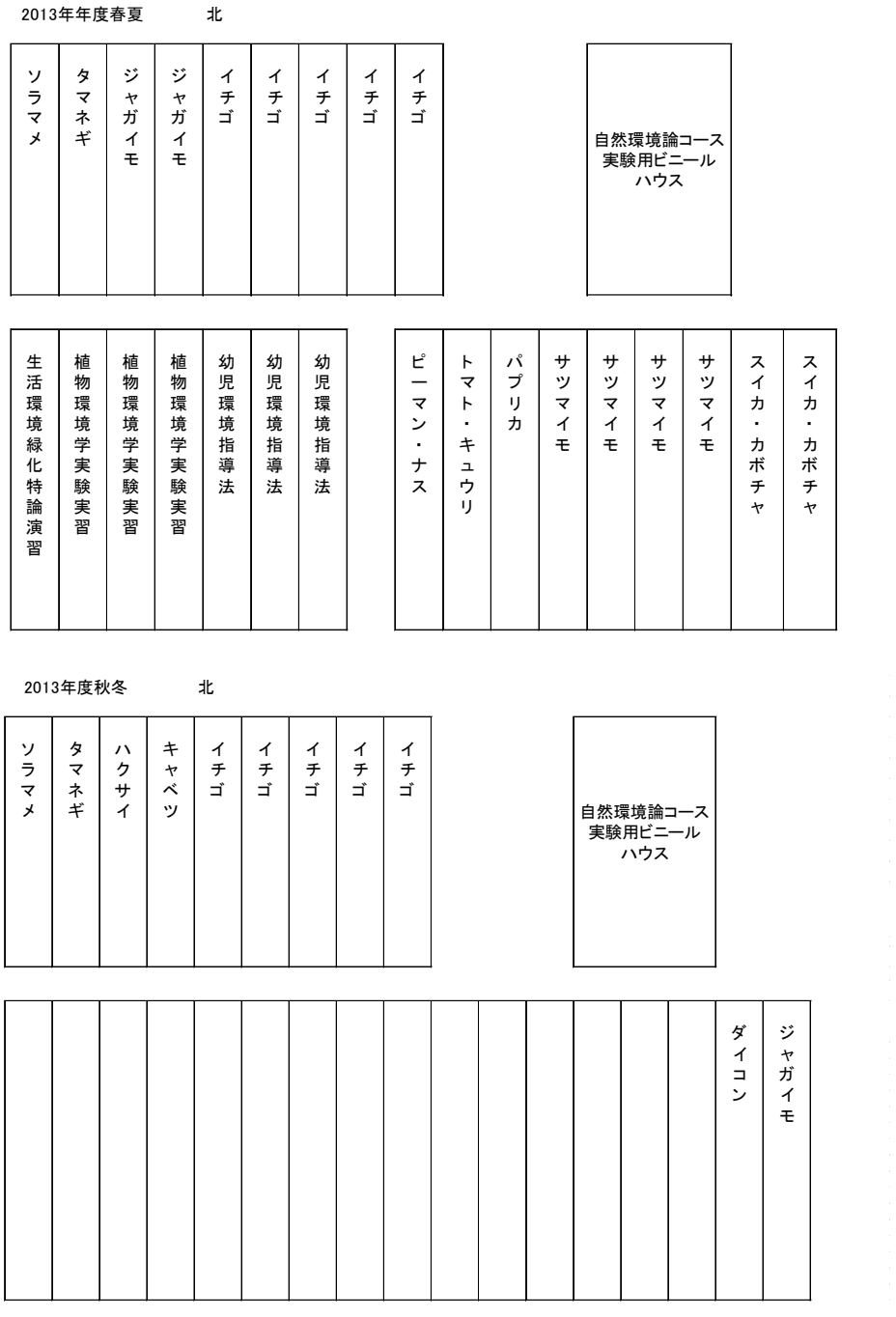

図2　25 年度畑地作付配置図

(3) 教育(実習)活動

本年度も表3に示した授業で，学生・大学院生が活用している。利用の内容は，植物栽培に関すること，すなわち，畝立て，土作り，草花や野菜の種まき，育苗，鉢上げ，定植，誘引，かき，収穫，挿し芽繁殖，花壇設計・制作などである。これらの他に，プランターや鉢植え栽培による校内美化の指導も行っている(図 3)。果樹類については，開花の観察，摘花，摘果，無核化処理などの説明に利用している。

表3 授業としての学生利用数

授業名	2009	2010	2011	2012	2013
生活環境緑化論1	35	46	57	59	57
生活環境緑化論2			37	35	40
生活環境緑化論演習			2	5	11
幼児環境指導法	16	26	25	24	25
植物環境学実験実習	17	17	20	26	22
生活環境緑化特論演習			4	6	2
植物環境学特論	9	11	13	2	21
計	77	100	158	157	178

図3 玄関前の花壇

(4) 他機関の利用

● 田植え体験・稲刈り体験

生活経験，季節感，自然体験が乏しい神戸市灘区の鶴甲幼稚園の園児に，実習観察園で田植えおよび稲刈りを実践してもらい，実際に体を動かし，五感を活用した体験の機会を得た。子どもは実際に田んぼに入り，手植えや稲刈りを行った。指導しながら安全への配慮等についても実践的におこなった。

・田植え:2013年5月21日
参加者:鶴甲幼稚園5歳児約80名，同園教諭等
人間発達環境学研究科2名

・稲刈り:2013年10月17日
参加者:鶴甲幼稚園5歳児約68名，同園教諭等
人間発達環境学研究科4名

●「のびやかスペースあーち」との連携・芋掘り体験プログラム

「のびやかスペースあーち」の基幹プログラムのひとつである「居場所づくり」のイベントとして，農園を利用した芋掘り体験を行った。特に土と触れ合う機会の少ない障害児が，土の感触や収穫の喜びを経験する貴重な機会となった。発達障害があり，手が汚れることが苦手だったり，砂遊びができなかったりする子どもも複数参加したが，いずれも一心不乱に芋を探す様子を観察できた。同時に，サポートした地域住民や学生にとって も，自ら楽しみながら子どもたちと喜びを分かち合う機会となり，さまざまな属性の隔たりを超えた共有体験となった。

・日時:2013年10月18日
参加者:「のびやかスペースあーち」利用者(子どもと保護者)18名，ボランティア(地域住民，学生)16名

● 交流ルーム「カフェ・アゴラ」における知的障害のある実習生の実習活動への協力交流

ルーム「カフェ・アゴラ」では，知的障害のある青年・成人に対して多様な社会経験を提供する活動を行っている。その実習活動の一環に 農園での作業を組み込んだ。今年度は1名の新卒女性が，原則として毎週月・金に，農具の洗浄等に取り組んだ。

● 放送大学兵庫学習センターの面接授業の実施

放送大学兵庫学習センター主催の面接授業「生活環境の緑化」を実習観察園にて実施した。講義室での講義と温室を利用した草花の播種，育苗などの体験授業を行った。

・日時:5月11日(土)，25日(土)，6月8日(土)，22日(土) いずれも，9:45～11:10，11:20～12:45
・申込人数:16名

今後も地域や学校等の要請等も積極的に受け入れ，授業ならびに研究で，利活用を図る予定である。

(実習観察園運営委員長 近江戸伸子)